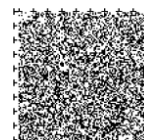


**若者の力が活きる地域
～意見表明・参加・参画を中心に**

報告書

令和3年3月

世田谷区子ども・青少年協議会



目 次

■ はじめに	1
第1章 検討の趣旨と経過	2
1. 背景	3
2. 趣 旨	4
3. 審議のテーマ	4
4. 検討体制	4
5. 検討の概要	5
6. 新型コロナウイルス感染拡大に伴う若者施策への影響と新たな取組み	5
第2章 モデル事業の実施・検証	7
I. 若者が日常的に意見表明できる地域社会の実現のために	8
1. 若者と関わる大人に必要な要素	9
2. 若者が安心して意見が言える場	11
II. モデル事業の実施検証	13
1. 学校でのモデル事業	13
(1) 学校での実施理由	13
(2) 実施案	14
(3) 実施経過	15
(4) 実施結果	16
◆コラム①	19
2. 商店街でのモデル事業	23
(1) 商店街での実施理由	23
(2) 実施案	24
(3) 活動実績・経過報告	25
(4) 商店街モデル事業協力者の声	30
(5) 検証・課題	31
◆コラム②	33
3. イベント形式でのモデル事業	37
(1) イベント形式での実施理由	37
(2) 実施案	37
(3) 実施経過	38
(4) 実施結果および提案	40
◆コラム③	42

第3章 提言	45
I. 前期提言と今期の取組みの関連	46
1. 前期の提言に連動した、平成31年度以降の区取組み	46
2. 前期の提言に連動した、今期協議会および区取組み一覧	47
II. 今期の取組みをととした提案	50
1. 学校チームの提案	50
2. 商店街チームの提案	52
3. イベントチームの提案	52
4. その他の提案	53
5. コロナ禍の中で過ごす若者の支援について	53
III. 提言	54
提言1 「多様な若者に、多様な居場所を」	54
提言2 「現場へ出向き、若者の声を聴こう！」	55
提言3 「参加したくなる、カルチャーを」	56
提言4 「多様に参加・協働できる制度を」	56
提言5 「たくさんの多様な大人と会おう！」	57
提言6 「持続的発展のできる組織づくりを」	58
提言7 「若者にも伝わる広報・PRを」	58
提言8 「庁内連携や官民連携をスムーズに構築できる体制を」	59
IV. 若者の意見表明・参加・参画に関わる指標	60
(1) 共通の指標	60
(2) 学校での取組みに関わる指標	60
(3) 商店街での取組みに関わる指標	60
(4) 施策への活用等を目的とし若者の意見を聴く取組みに関わる指標	61
◆コラム【森田会長メッセージ】	62
資料編	65
1. 依頼文	66
2. 資料1 世田谷区子ども・青少年協議会委員名簿	67
3. 資料2 世田谷区子ども・青少年協議会審議の経過	68
4. 資料3 令和元年度若者支援シンポジウム資料	69
5. 資料4 子ども・青少年協議会 臨時会開催日程・内容	76
6. 資料5 モデル事業学校チーム校内カフェ視察資料	77
7. 資料6 モデル事業商店街チーム資料①【企画案】	91
8. 資料7 モデル事業商店街チーム資料②【取組み案一覧】	93
9. 資料8 モデル事業商店街チーム下北沢まちの案内所アンケート集計結果	96
10. 資料9 モデル事業商店街チームしもきた倶楽部若者の感想	101
11. 資料10 モデル事業イベントチーム意見交換会 記録（要旨）	104
12. 資料11 事業・用語解説	112

■はじめに

令和元年～2年度期の子ども・青少年協議会（以下、「協議会」）は、前期の「若者施策の評価検証と体系化について～区民の参加と協働を目指して」から導かれた提言をもとに、「若者の力が活きる地域」の実現を目指し、意見表明・参加・参画を中心に検討を行ってきた。

意見表明・参加・参画というと、自ら積極的に発言ができる若者のための施策と思われるかもしれないが、感じたことや考えたことを誰かに伝えたり、発信したりすることやその手段は、若者が力を発揮するために必要な道具（手段・方法）であり、生きづらさを抱えている若者にとっても大切なものである。今期の検討を進めるにあたって、対象を「すべての」若者としたのは、そのような理由からである。


また、「すべての」若者を対象として考えると、必然的に、若者の普段の生活に近い場で日常的に自己表現できる環境を実現することを目指したくなる。一昨年度に行ったヒアリング調査では、周囲を意識し役割を演じるように窮屈に過ごしている若者の姿が浮かびあがっていたが、「ここでは自然体でいられる。素でしゃべれる。」という場を持っている若者もいた。そういったナマのデータを分析しまとめられた前期の報告も参考に、「どんな場があれば」「そこにどんな人がいれば」実現できるのか、検討と実証実験を進めてきた。

学校や商店街、イベントと3つのステージでモデル事業を行おうと、盛り上がってきたところで対峙することとなったのが新型コロナウイルス感染症である。会議の一部は中止やリモート開催となり、学校内で開催する取組みは実施困難となるなど協議会も影響を受けたが、若者の日常生活の変化、若者の活動や若者を支える活動は、これからも暫く影響を受け続けるであろうことから、今後の施策検討にあたって避けて通れない要素となった。

そのように活動が制限される中でも、先行自治体の活動現場を視察したり（学校チーム）、商店街の方々の協力のもと駅前でもストーブを囲んでミーティングをしたり、街頭でアンケートを行ったり、地域のイベントに出店したりした（以上、商店街チーム）。また、リモートで若者にヒアリングを行ったりするなど（イベントチーム）、できる限りの挑戦を行い、今後の施策に引き継いでいただきたいことをここにまとめることができた。これも、「若者が誰でも日常的に意見を表明できる」環境の実現を願い、それぞれが仕事を抱える中、月に何度も打合せを行ったり、現地に出向いて活動した委員あつてのこと。改めて感謝申し上げます。


また、若者支援に関わる地域の団体や人物を小委員会にお呼びし意見を伺ったり、若者支援シンポジウムの開催テーマを協議会の検討内容と重ねることにより、多様な参加者同士の意見交換から得たものを協議会に取り入れるなど、施策検討の場を拓けようとしたことも今期の特徴のひとつであった。多くの方が若者の現状や若者とともに進んでいる取組みを知り、自分ごととして関わっていくことが「若者が輝く地域」を支える力となる。今後も協議会の検討を行政だけのものとせず、地域もまきこみ実効性のあるものとしていただきたい。

まずは、今期の検討から、継続的・発展的に根付いていく事業が生み出されることを期待する。



第 1 章

検討の趣旨と経過



■1. 背景

前期（平成29年—30年度期）子ども・青少年協議会では、「若者施策の評価検証と体系化について～区民参加と協働を目指して」について調査・審議を行った。若者支援担当課設置から5年が経過し、これまでの若者施策全体を振り返り、課題解決につながっているのか改めて評価検証するとともに今後の方向性を問い直すテーマであり、若者施策の評価検証を行うにあたっては、15～29歳の区民6,000人と若者関連施設の利用者を対象としたアンケート調査とともに、ヒアリング調査、事業者ヒアリングを行った。

当該調査（平成30年「世田谷区若者施策に関する調査」）の結果から見えたものとして、主に以下の3点を挙げる事ができる。

① 関係の希薄化

家庭、学校、職場以外でのつながりが薄く、「ほかの人に言えない本音を話す相手がない」と回答した若者が12.4%存在した。困りごとや悩みを相談できる相手がない若者が一定数いるとともに、学校でも周囲を意識し、役割を演じて過ごしているとの指摘もあり、身近な家族や所属する学校や職場以外でのコミュニケーションの希薄さを伺うことができる。

② 地域活動や社会貢献への関心

若者の内面を見る設問のうち、「困っている人がいたら助けたいと思う」（すごくそう思う37.6%、まあそう思う54.6%）との回答の数値が非常に高く、「自分の力を地域に役立てたい」（すごくそう思う13.3%、まあそう思う41.3%）との回答も5割を超えている。また、地域活動への参加ニーズがありながら活動の機会がない若者（49.6%）は4割を超えており、関心や意欲がありながら参加機会に結び付いていない現状も垣間見えた。

③ 主体的な活動が育むもの

地域行事やボランティア等の地域と関わるイベントやプログラムに「企画から関わった」経験のある若者や、交流・活動系施設を利用する若者の自己有用感、それ以外の若者より明らかに高く、主体的な活動が自己有用感にプラスに働いていることが伺われた。

同様に、「コミュニケーションの頻度」と「自己肯定感・自己有用感」の間に相関があることが明らかとなった。他者との関わり合いの中で認められることは、自立と成長を実感する機会になっていると考えられる。

また、第3の居場所では、交流・体験をきっかけに、主体的に活動するようになった事例や、そのような次代の育みが引き継がれ循環している事例が確認できた。

上記に見られるような若者世代を取り巻く現状を踏まえ、令和元年—2年度期協議会は区長より「若者の力が活きる地域～意見表明・参加・参画を中心に」をテーマに審議するよう依頼を受け、検討を開始した。

なお、協議会は、地方青少年問題協議会法に基づき設置された区長の附属機関として、社会情勢等を踏まえ、子ども・青少年を取り巻く環境や施策の課題を検討し、区への提言を行ってきており、若者施策の方向性や若者支援事業の展開には協議会での議論が反映されてきている。

■2. 趣旨

今期協議会は、前期（平成29年―30年度期）提言の内容および、その実現に向けた検討を引き継ぐものである。

前期提言の内容は以下抜粋のとおりである。

■平成29年―30年度期 子ども・青少年協議会提言

1. 世田谷区の若者にはみな「第三の居場所」がある
2. 地域に「大人・若者のたまり場（情報や活動、交流の拠点）」（=地域コンソーシアム）がある
3. リアルもネットも若者がつながる場に
4. 生きづらさを抱えた若者が、「居場所」を中核とした専門機関と地域との連携により総合的に支えられている
5. 教育機関との連携により、生きづらさを抱えた若者が早期につながり切れ目なく支えられている
6. 地域の大人、行政職員が若者施策の情報を共有しながら若者を支えている
7. 若者と地域の大人、行政職員が協働しながら若者の文化・情報の発信を支えている

■3. 審議のテーマ

令和元年7月24日、子ども・青少年協議会は区長より「若者の力が生きる地域～意見表明・参加・参画を中心に」について調査・審議の依頼を受けた。

■4. 検討体制

子ども・青少年協議会条例に基づき、区長が委嘱した協議会委員19名（令和2年4月1日より18名）のほか、専門委員7名を加えた26（令和2年4月1日より25名）で検討を行った。専門委員のうち3名は大学生であり、若者の立場から発言していただいた。

また、若者の意見表明、参加・参画に関する審議、現状の把握・課題の分析、モデル事業の調査・実施等について集中的に審議を行うため、令和元年7月24日に小委員会（入澤充委員長ほか、委員12名、その他オブザーバー参加を含む）を立ち上げた。

さらに、子ども・青少年協議会条例施行規則第3条8項にもとづき、関係人として民間の若者支援活動団体の構成員に小委員会への出席を求め、意見聴取を行った。

■5. 検討の概要

今期テーマ「若者の力が活きる地域～意見表明・参加・参画を中心に」をもとに、具体の議論を進めてきた。若者世代を取り巻く現状や多様な若者の存在などの課題をふまえ、まず、以下の視点について議論した。

- ① 若者が日常的に意見表明できる地域社会の実現のために必要な要素
- ② 若者と関わる大人に必要な要素
- ③ 若者が安心して意見が言える場

そのうえで、若者が意見を言いやすい場とはどんな人がいるどんな場か、議論を踏まえた仮説をもとに、パイロット的に試行する以下3つのモデル事業を構想し、実施内容、手法等の検討・実施を進めてきた。

- ◆学校でのモデル事業
- ◆商店街でのモデル事業
- ◆イベント形式でのモデル事業

小委員会や「若者支援シンポジウム」（令和元年10月開催）では、オブザーバーやゲストとして区内若者支援団体の方々等の参加・発言をいただき、「なんとなく過ごせる」第3の居場所や、信頼できる大人とのコミュニケーションの機会を持つ必要性、地域ニーズ優先でなく若者の行動に即したニーズを把握し若者と一緒に創意工夫を取り入れていく重要性など、モデル事業検討の議論を深めた。

新型コロナウイルス感染症拡大による影響を受け、今期協議会は当初の構想からは様々な変更を余儀なくされた。協議会開催中止に加え、学校休校に伴うモデル事業の実施取りやめや、イベント中止の時期を経て、オンラインでの小委員会の開催、学校カフェ視察をオンラインによる取材に変更するなどの対応を図り、検討の継続をすすめた。

コロナ禍における影響により、モデル事業の実施検証が道半ばの部分があり、実証に及んでいないため、今期提言は今期の成果と課題として、次期以降の検討に引き継いでいくものとして取りまとめた。

■6. 新型コロナウイルス感染症拡大に伴う若者施策への影響と新たな取組み

■若者への影響

- ・ 休校期間中は、大学や学内の図書館も閉鎖となり、卒論作成や学習面などの困難が生じた。また、実習や留学、その他の活動など学生期間中の目標ややりたいことが果たせない等の影響も多くあったことが報告された。
- ・ 外出ができない期間は特に、友人などとのつながりが薄くなるなど、人間関係への影響が生じた。また、アルバイト等への影響もあり、経済的な面での厳しさについての声もあった。



- 授業や就職活動等の多くがオンライン化されたことにより、通信環境によっては容量の不足や、そもそも通信環境が自宅に無い若者もいるなど、学生や若者の負担や不公平の問題が指摘された。
- オンライン化により、ひきこもり傾向のある学生が授業に参加しやすくなる、通学時間がなくなり効率的になるなど、新たな側面も指摘された。

■若者施策への影響と新たな取組み

- 令和2年4～5月の緊急事態宣言及び緊急事態措置の発出中は、若者関連施設や事業の多くは休止となり、解除後は感染予防を徹底したうえで段階的な再開を行った。
- 休止期間中においては、対面での対応を必要最小限とするため、メルクマールせたがやでは電話による相談を基本とし、可能な対応を継続した。
- 青少年交流センター（野毛・希望丘）では、休止中にユースワーカーと電話で話せる時間を設け、また定期的に近隣公園へユースワーカーが出かけ、若者への声掛けを行うなどコミュニケーションや見守りを継続した。また、オンラインを活用したイベント（例：海外の若者との交流）などを実施した。
- 「ねつせた！」は、会議など主な活動をオンライン開催に切り替え、取材活動は縮小せざるを得なかった。
- 区内28の地区ごとに行われている青少年健全育成支援活動の多くは中止となっているが、オンラインを活用して一部の活動を継続している地区もある。
- 若者支援に関し、広く情報共有、意見交換を行い交流することを目的として実施している「若者支援シンポジウム」は中止した。

■世田谷区子ども・青少年協議会への影響

- 感染防止のため、第6回小委員会（令和2年3月16日開催予定）、第3回協議会（令和2年3月25日開催予定）を中止とした。また、第10回（令和2年10月22日）、第11回小委員会（令和2年11月13日）をオンライン開催とした。
- 有効と考える取組みをモデル的に実施し評価・検証を行う予定であったが、学校に出向く事業、不特定多数の若者・区民が集まる事業を実施することができず、視察やオンラインでの意見交換などにより、仮説の検証を試みることにした。
- 実証が行えなかったこともあり、本報告書における提言は、今期の成果、課題として次年度以降の検討に引き継いでいくものとしてとりまとめた。
- 同様に、モデル事業の検証を目的として設定した評価指標についても、次年度以降の取組みで活かしていただきたい。



第2章

モデル事業の実施・検証

■ I. 若者が日常的に意見表明できる地域社会の実現のために

若者は、今まさにこの社会を生きる主体であり、大人とともに社会をつくり、社会を担う当事者である。ともに社会をつくる存在として、ともに悩み、学びあう姿勢が「対等」な関係性の形成のために不可欠である。

意見表明・参加・参画の取組みは、一部の積極的な若者だけが取組むものではなく、誰もが関わられるものであること、また、特別な場や機会だけの取組みにすることなく、日常的に意見表明できることが重要である。

そのため、若者世代になって急に意見表明・参加・参画の機運が高まることは考えにくい。何をして遊ぶのか、どの絵本を読むか、どんな服を着たいかなど、子どもは幼いころから、自分で考え自己決定できる機会は日常の中に多く存在している。そして、成長するにつれて、人間関係や自己主張の方法、自分が生活している地域のことなどにも関心を拡げていく。

主権者教育を「国や社会の問題を自分の問題として捉え、自ら考え、自ら判断し、行動していく主権者を育成していくこと」(総務省「常時啓発事業のあり方等研究会」最終報告書、平成23年より)とするのであれば、まさに主権者教育は、教育機関だけが担うものではなく、家庭や地域のなかでの日々の取組みが大切である。

意見表明に必要な力が育つ要素には、小さい時から自分の意見を言える環境があげられる。しかし、現状では保護者は子育てにおいて子どものできないところを指摘しやすい傾向や、失敗することを恐れるがあまり保護者が先回りして方向性を定めてしまうことがある。そのため、子ども自身の失敗体験や、失敗から学ぶ機会が減少することなどから、子どもの自己肯定感が育ちづらい状況があることも指摘されている。

意見表明に必要な要素には、安心して話せる時間と空間がある。見守られ、適度なサジェスチョンがある中で、子ども・若者が自分のペースで安心してくつろいでいいんだと感じられるまなざしが必要である。

だからこそ、日常の身近な場面や、自分の生活に直接関わる場所での参加や意見表明によって、実際に変化が起こり、変化を実感できる仕組みが必要である。そのため、声が出せない子ども・若者や、出しづらい状況にいる子ども・若者でも関わることのできる取組みや、参加したくなる仕掛けが必要である。

また、リアルタイムで苦しんでいる若者や、生きづらさを抱えている若者に対しては、まだ自分自身の整理が中心となり、意見を言う段階にない可能性もある。段階を追った参加のプロセスが必要である。

「世田谷区の若者」と言っても、生まれながらの世田谷区民、通勤通学等のためだけに世田谷区に来る若者、世田谷区のことをあまり知らない若者、生きづらさを抱えた若者を含め、多様な若者がいる。多様な参画の場やあり方を検討する際には、こうした多様なバックグラウンドをもつ若者の存在を前提に考える必要がある。そしてまた、障害のある人たちや外国にルーツを持っていたり、外国籍の人たちなど、区内には多様な若者の存在がある。そのような方々も含めた総合的な展開を検討する必要がある。

なにより、参加・参画を体験型の企画やセレモニーで終わらせることなく、実際に地域を担う市民である若者世代の声を行政施策に反映させること、若者が変化を実感できることが不可欠である。

若者が誰でも日常的に意見表明できる地域社会を目指すためには、若者が安心して意見を言える場が身近にあること、また、若者を理解し代弁する人の存在が必要である。

また、意見表明のためには、必要な情報にアクセスできる環境を保証することが必要である。例えば、議会や区の計画、施策へのアクセス、社会情勢や選挙などの情報への若者世代にとってのアクセス環境が適切かを考え、場合によっては改善に向けて取り組む必要がある。

ヒア・バイ・ライト（Hear by Right）とは、英国若者協会と地方自治体協議会の共同製作で2001年に開発された、子ども・若者の社会参加を具体的に進めるうえでイギリスで活用されている手法である。「7つのスタンダードの考え方」があり、子ども・若者が7つのスタンダードを身に着けることによって参加・参画が実現していくというものである。

- (1) 共通の価値観
- (2) 戦略
- (3) 仕組み
- (4) 体制
- (5) スタッフ
- (6) 技術と知識
- (7) リーダーシップの取り方

この7つのスタンダードをさらに3つの段階「参画に向けて動き出した段階」「参画が実現している段階」「更なる取組みの段階」に分け、子ども・若者の参画が形式的なものにならず、組織の中に組み込まれていくことを目指している。子どもの声に耳を傾けて社会に取り入れるような参画のレベルにまでもっていくにはエネルギーも時間もかかり、さらに、子ども・若者が7つのスタンダードを身につけるには、それを支える大人の方にも「技術と知識」が求められることが指摘されている。（「ヒア・バイ・ライト（子どもの意見を聴く）の理論と実践」奥田睦子編著・監修より）

日常的な意見表明や参加・参画の場の取組みを、ゆくゆくは子ども・若者会議のような意見交換の場の定期的な開催につながる構想の一環として整理しておく必要がある。

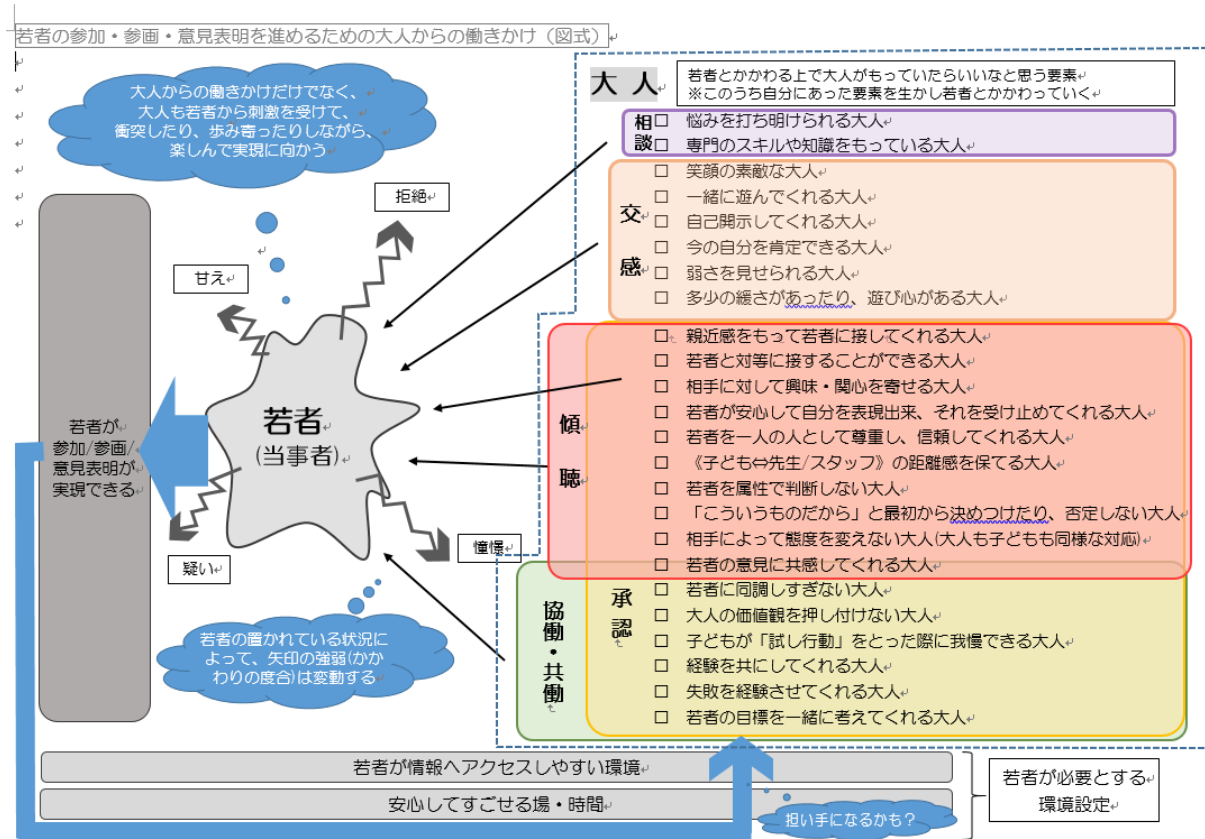
そして、若者たちの声や意見をどのように社会実装するかというゴールを見据えて、例えば区長や区議会議員、行政職員等、若者施策に関わる立場の方との意見交換/ヒアリングといった取組みを定期的な実施することも有効ではないか。

■1. 若者と関わる大人に必要な要素

若者が誰でも日常的に意見を表明できる地域社会を目指すためには、若者が安心して意見を言える場が身近に存在することとともに、若者を理解しその声を代弁する人の存在、若者とパートナーとして関わる人を育てていく視点が必要である。

若者に関わる大人に必要な要素には、若者を信頼し一緒に考える人、若者自身の「やりたい」

を引き出せる人など様々な視点がある。ここでは、「若者の参加・参画・意見表明を進めるための大人からの働きかけ」として以下の図のようにまとめた。



大人が若者の意見を引き出すためには、若者が安心して意見を言える信頼関係の基盤づくりが不可欠である。徐々に関係性を深めていくことで、若者の主体的な活動の実現をバックアップできる関係性へと発展することができる。例えば、第三者で利害関係がないこと、敬語で接する、「教えてください」というスタンスで接するなど、若者からの声を引き出す要素を踏まえることで反応が返ってくることが多い。

このように、若者と関わる人に必要な要素としては、まず、対等に接することができる、価値観を押し付けない、信頼して話を聞くことができるなど、関係性の基盤となる要素が挙げられる。また、若者の社会参加の状況や段階によって、傾聴ができる、適切な距離感を保てる、体験や失敗を見守り寄り添ってくれるなどのスキルが必要となることある。

若者と関わるために、すべての要素を兼ね備える必要があるわけではない。また、若者と関わる人を評価するための指標でもない。多様な大人が、自分の得手不得手や自らの特性に合った要素を生かし若者とかがわっていくことが重要である。

欧米の「ペタゴ」のように、資格・認証制度のような認定で若者に関わる大人を育成することもできるのではないかな。

※ ペタゴギックとは、個々の人間性・個性を見抜いて、それぞれに合った対応をする“究極の個別ケア技術”。このペタゴギックを身につけた人がペタゴ。ペタゴは、主に保育や幼児教育のための施設・学校などで働いている。

理解者の身近な例としては、学校内の「購買のおばちゃん」や病院内の「掃除のおじさん・おばさん」といった、利害関係のない第三者である優しい存在を挙げることができる。

大人と同じように、若者のなかにも、生まれながらの世田谷区民や、世田谷区のことをあまり知らない若者、生きづらさを抱えた若者を含め、多様な若者がいる。若者の置かれている状況によって、かかわり方やその度合い、必要な要素は柔軟に変える必要がある。

若者にとって身近なところに、若者の話を聞ける人がいること、若者に理解のある人が増えることが大切であり、支援者には専門家の養成だけでなくそのような理解者が増えることが必要である。

若者をサポートする大人や支援者の活動に当たっては、その支援をサポートする仕組みも必要である。支援を通じて抱える悩みや思いをその都度解消できるようなフォローや、支援者が一人で抱え込まないよう情報を共有し時には必要な行政サービスを助言するなどの相談体制も必要である。

■2. 若者が安心して意見が言える場

若者が誰でも日常的に意見を表明できる地域社会を目指すためには、若者が安心して意見や考えを言える場が身近に存在することが必要である。また、同時に若者を理解しその声を代弁する人の存在が必要である。

安心できる場とは、自分自身をそのまま表現できる場であり、それをそのまま受け止めてもらえるという相互承認の環境である。

若者には、「言っても仕方がない」「言ったところで変わらないなら言わない」といったあきらめの気持ちがあるのではないか。また、意見を出した後どう使われるのかが見えない、わからないといった思いももっている。

そうした中、世田谷区では、児童館や青少年交流センターなどの子ども・若者の活動拠点があり、若者が意見を言える場づくりという視点においても地域の拠点としての機能は果たしている。

また、若者の日常にとって身近な場やふらっと立ち寄れるまちの中（大学のそばの商店街や駅の近くなど）に、小さくても若者が安心して意見を言える場が存在することで、多様な若者の意見表明・参加・参画の機会をつくることができる。

誰もが気軽に立ち寄りやすい居場所には、駅の近隣などの交通アクセスや活動エリアなどの面から、若者にとって便利な立地環境が必要である。

区内の公的な場所のなかで、日中は使用されていても夜間は空いている場所は多くある。夜間や土日の時間帯を若者に提供するような活用方法は考えられるのではないか。

若者の提案に大人も一緒に取組む場や仕組みが必要である。若者の主体性を奪わない程度に関わり、一緒に取組む場や仕組みを身近につくり、若者が自己有用感を実感できる体験が必要である。そして、地域や町会などの様々な活動に、若者が体験的に参加でき、日頃活動されている地域の方々との交流を通じて熱量を感じる体験は有効なのではないか。

高校生や大学生世代が地域の中からすっぽりと抜けてしまう現状があるが、大切なのは積み

重ねである。小学生、中学生時代から地域の中で活動し、意見を言え、参加することができていれば、その関係性はつながっていくと考えられる。

若者が参加したくなる仕組みづくりには、楽しいコンセプトが不可欠である。ファーストインプレッションはできるだけハードルを低くし、「おもしろそう」と気軽に入ってみた場で、参加者から担い手に代わっていくような仕掛けを用意することが大切である。

以前、若者支援担当課でオルパという若者の居場所を始めた際にも、どうなるかわからない不安もあるなかで始めた経過がある。しかし、オープンした後は若者の人気が高まり多くの人が集まる居場所となった。楽しくてわいわい集まれる場であり、若者が力を発揮できる場となることが大切である。

「報酬を求めて始めたわけではないが、実際に活動をはじめてみると時間も多く費やし大変なことも多い。目に見えるメリットがあるとやりがいを感じられる。」という大学生の声がある。参加の仕組みには、若者にとって魅力的なインセンティブが有効である。活動費の支給といった報酬だけでなく、例えば大学の単位や地域ポイントなども考えられる。

意識の高い、一部の若者だけのための場となっていないか、自ら手を挙げない人をどう巻き込むかを考えることが重要である。学校に行くこと自体に興味に向かない若者など、誰もが仲間に入れるような場づくりやふらっと来た人が立ち寄れる雰囲気づくりが大切である。

また、コロナ禍において授業や就活、会議等でもオンラインのコミュニケーションが急増するなか、若者たちの通信環境はあまりよくない現状がある。データ容量が足りず途中で通信が落ちてしまったり、映像をオフにして容量不足に対応しているような現状もある。このようななか盤石な Wi-Fi 環境は重要なインフラである。区内の公共施設において Wi-Fi 環境が整備されれば、おのずと若者も利用するようになる。そのうえで、そうした施設運営について若者の声を反映させるなど、今ある資源に少し手を加えるだけで、若者が関わりやすくなる。

また、若者が立ち寄りやすい身近な場として、大学に近い商店街での居場所が有効と議論してきたが、商店街の活性化を第一義にすると空回りしてしまう。若者がその思いを伝えることができる環境が確保されたうえで、結果として商店街の活性化につながっていく。これは行政施策も同様であり、本末転倒にならないように考える必要がある。

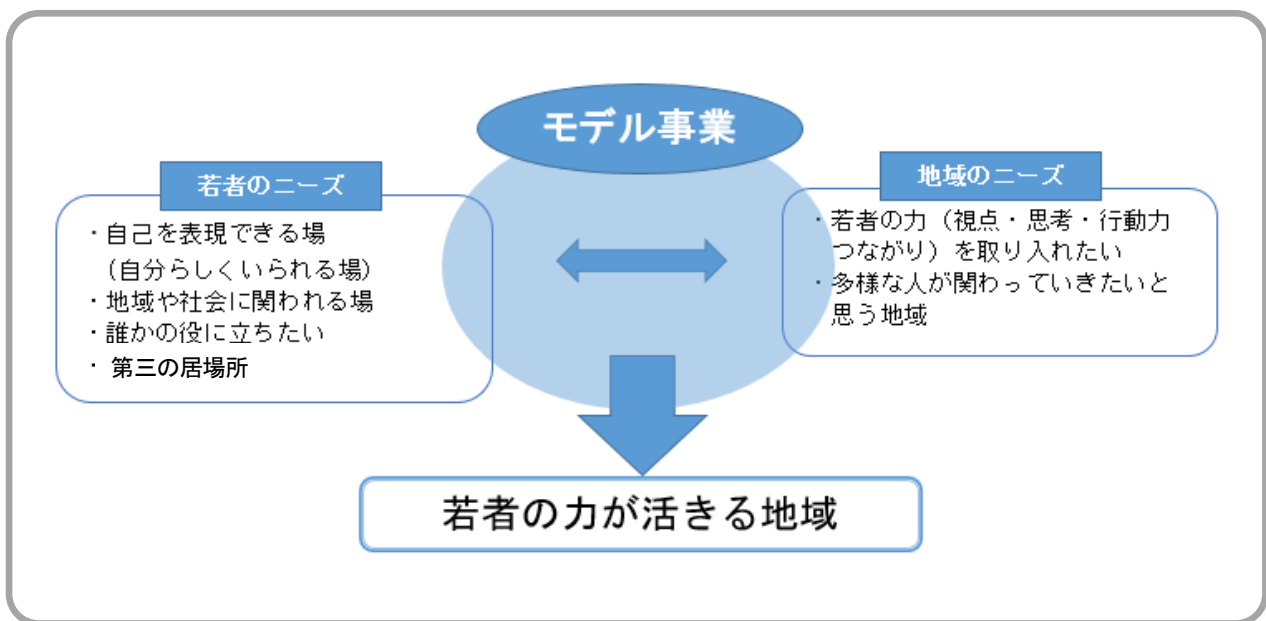
なにより、オンラインでのコミュニケーションが増えるなか、リアルなコミュニケーションのニーズや重要性は一方で高まっている。メルクマールセたがやでも、直接会って話ができる場を求める方が相談や居場所に来所している。

オンライン/オフラインそれぞれの特性を踏まえた取組みが、より一層望まれている。

■ II. モデル事業の実施検証

若者が誰でも日常的に意見を表明できる地域社会の実現のために、若者と大人と一緒に取り組む「若者が安心して意見が言える場づくり」を、複数のモデル事業を実施・検証することにより、継続的・発展的に取組め効果が上がる手法を探ることとした。

モデル事業は、若者のニーズと地域のニーズがマッチする部分で、事業を通し若者と地域の双方にプラスの効果をもたらす結果として「若者の力が活きる地域」を実現できると思われるものとして、「学校内」「商店街」「イベント形式」の異なる3つのステージで仮説的に事業を組み立て実施・検証することとした。



■ 1. 学校でのモデル事業

(1) 学校での実施理由

- ① 中高生や大学生が多様な大人に出会える場、意見を言いやすい場として、利用する心理的ハードルが低いカフェというスタイルで取組むとなった場合において、「立ち寄るのに便利な」「通いやすい」「大人にとっても若者にアクセスしやすい」というアクセシビリティを考慮し、学校での試行がモデル事業の一つとなった。

- ② 学校でのカフェ試行により、想定される効果として、次のことが挙げられた。
- ア 普段通っている学校内に、異質な空間や体験、コミュニケーションを体験できる、日常と異なる居場所を設けることで、家庭と学校以外の関わりが生まれて、視野が広がるのではないか？
 - イ クラス、教室には馴染めないが、学校には来られる生徒の居場所となるのではないか？
 - ウ 特に、地域や多世代の区民と出会える居場所があることで、若者の世界に多様な価値観を持った大人が入ることができるのではないか？
 - エ 異質な居場所をきっかけに、同じ体験をすることで、新たな仲間づくりができたり、友情を高めたりすることができるのではないか？
 - オ 中学生や高校生は、学校が社会のすべてであることが多い一方、大学生になれば視野や活動場所が自然に広がること、日中、制服を着てまちにいただけで咎められる場合があることを考えると、中学校・高校内に学校でない居場所であるカフェを設置する意味があるのではないか？
- ③ 一方で、次のような懸念が挙げられた。
- ア 高校生や大学生は、中学校で開催されると来ないかもしれない。
 - イ 自分の学校以外の学校カフェに参加できるようにすべきか。
 - ウ 高校生世代になると、進学の有無にかかわらず、地域とのつながりが途切れてしまい、参加しないのではないか。

(2) 実施案

- ① いつ頃、何回程度行うか？（時期・回数）
- （案1）年2回程度
 - （案2）月1～2回
- ② 会場をどこにするか？
- 理解の得られた一つの学校でモデル事業を実施することとし、会場案として、次の2校が挙げられた。理由として、当該学校法人は、高等学校で生徒、保護者、教職員の三者協議会を実施しており、開かれた学校運営に取り組んでいるため。
- ・学校法人大東学園高等学校（世田谷区船橋7-22-1）
 - ・同法人世田谷福祉専門学校（世田谷区船橋7-19-17）
- ※ 事業展開の理想
- モデル事業：1校
 - 5年後：5校（地域ごとに1校）
 - 将来：区内全中学校
- ③ 会場のどの場所で実施するか？
- 具体的なカフェ設置場所として、次のとおり案が出た。共通する条件として、教職員・生徒、先輩・後輩といった縦関係のないことが挙げられた。

- ア 図書室
- イ 保健室→教室には行けないが、保健室であれば行ける。
- ウ 食堂→食を通して、コミュニケーションが図れる。ランチタイムダイアログを行う。
- エ 空き教室
- オ 体育館

④ 誰が行うか？誰を巻き込むか？

モデル事業としては、子ども・青少年協議会委員を中心に行う。ただし、学校司書（図書室）、地域住民（小学生、中学生含む）とコーディネーター、児童館・青少年交流センター等の子ども・若者施設の若手職員、生徒・保護者・教職員、外国籍の人等、多様な人々を巻き込んでいきたい。

⑤ 何を行うか？

- ア モデル事業実施校内にカフェの設置や映画観賞会の開催といった取組みを行う。
- イ 居場所に足を運んでもらい、交流するきっかけとなるテーマを設定し、それに沿った次のような取組みを行う。
- ウ お茶をしながら、〇〇（学校生活や今月の話題を挙げてフリートーク）について話し尽くす。またはボードゲームで交流する。
- エ 校則についての意見交換
- オ 占いをしてからの相談
- カ 自由に、ホームルームのような話し合い

⑥ その他

モデル事業の実施に先立って、公立中学校での放課後カフェに先駆的に取り組んでいる西東京市を視察する。

(3) 実施経過

- ① 新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、各学校が休校となったことに伴って、モデル事業「学校内居場所カフェ」の取組みを取りやめることとなった。
- ② ただし、社会状況の鎮静化後に、再度モデル事業への取組みを行うことを念頭に、先駆的に取り組んでいる、西東京市の市立中学校での「西東京子ども放課後カフェ」や、神奈川県立田奈高等学校での「ぴっかりカフェ」を視察またはオンライン取材することにより、「学校内居場所カフェ」を実施する場合の実態、効果、懸案等を把握し、世田谷区で取り組んだ場合の課題等を具体的に想定してみることにする。
- ③ 視察先概要
 - ア 西東京市立中学校「西東京子ども放課後カフェ」へのオンラインでのヒアリング
(実施日時：令和2年9月9日(水) 10:00～12:00 cf:P.77～90資料編「資料5」)

- (ア) カフェの運営主体、手法
任意団体「西東京子ども放課後カフェ」による自主事業
- (イ) カフェの内容
西東京市内の公立中学校において、地域住民が主体的に生徒たちのためにほっとできる放課後の居場所をカフェ形式で提供する。
- (ウ) 会場等
9校中、田無第一中学校ほか7校で実施。(令和元年6月時点)

イ 神奈川県立田奈高等学校「ぴっかりカフェ」への視察及びヒアリング

(実施日時：令和2年11月5日(木) 13:00～17:00 cf:P.77～90資料編「資料5」)

- (ア) カフェの運営主体、手法
特定非営利活動法人パノラマによる自主事業
- (イ) カフェの内容
神奈川県立田奈高等学校の図書室において、若者を支援する専門スタッフや地域ボランティア等と交流し、相談できる居場所カフェを運営する。
- (ウ) 会場等
田奈高校は、入試に学力試験や内申書提出のないクリエイティブスクールで、いわゆる課題集中校。同様の位置づけである神奈川県立大和東高等学校では、多目的ルームで同運営主体により「ボーダーカフェ」が運営されている。実施回数は、それぞれ長期休暇を除く年間35回程度。

(4) 実施結果

(※次頁一覧を参照)

(4) 実施結果				
No.	主な ヒアリング項目			
1	カフェ実現の背景、契機	<p>西東京市立中学校「子ども放課後カフェ」</p> <p>○団体代表が小金井市の緑中学校カフェを見学したこと がきっかけ</p> <p>○代表がPTA役員を務めた田無第一中学校が最初のカフェで、実現まで何年もかかっている。何度も校長と交渉したが、実現ができなかったが、育成会会長という立場や社会福祉協議会にも協力してもらい、計画書を作成し、交渉の場を作ってもらえた。</p> <p>○メンバーが従前積み上げてきた地域のネットワークやそれに伴う学校の信頼感から2校、3校と広がった。</p> <p>○また、当時、市内の中学生が虐待により自死し、同年代を子に持つ代表その他メンバーが、直接の支援は難しくても、カフェという形で関わることができればと考えたことも影響している。</p>	<p>神奈川県立田奈高等学校「びっかりカフェ」</p> <p>○貧困等多様な生徒が集まるクリエイティブスクール（いわゆる課題集中校）において、教育的視点だけでなく、福祉的視点もないと、生徒が抱える問題に対応できないというところから始まった。</p> <p>○運営は、教育委員会とは切り離され、校長に任ざれており、カフェ立上げ当初の校長が、外部の支援を求めて市長部局にヘルプを出して実現している。</p> <p>○学校内の図書館でのカフェとして、当時の学校司書の協力的な姿勢も大きかった。</p>	<p>世田谷区における課題等</p> <p>○モデル事業の目的として、中高生が学校の中で、多様な大人に出会い、意見を言えるようにすることであることを考慮すると、居場所の提供や学校外の大人との関わり合いがメインであり、相談・支援といった福祉的要素が比較的少ない西東京市に近い形かよいのではないかと。○先駆的事例である西東京市においても、公立中学校で実現するまでには、何年もかかっていることから、比較的教育委員会から独立している私立学校がよいのではないかと。</p>
2	カフェ運営において大切にしていること	<p>○学校や家でも、街中でも、教育・指導される立場にいる中学生にとって、指導されない場を作りたいかつたので、そのような場でリラックスできるようにすることが必要。</p> <p>○何かをしてあげる、してもらおうという関係性でなく、1対1の関係づくりが重要。</p> <p>○各中学によって、カフェの雰囲気はまちまちだが、誰にとっても居心地の良い場所はないと思っている。</p>	<p>○カフェだからといって、お客さんにせず、おもてなしがないこと。生徒と一緒に居心地の良いカフェ、居場所を作っていくイメージ。</p> <p>○学校内にあるからと言って、指導する姿勢ではなく、支援するという姿勢で取り組んでいる。</p> <p>○親、学校以外の様々な大人から受ける文化資本（季節の食べ物や浴衣の経験等）のシェアを大事にしている。</p> <p>○運営ボランティア同士の交流も大切。</p>	<p>○今の中高生の生きづらさ（多忙、同調圧力、貧困等家庭環境）を解消するのは難しいが、話に耳を傾け、若者に寄り添う姿勢を大人、それぞれ異なるバックボーンを持った大人が関わっていく必要があるのではないかと。</p> <p>○様々な大人に関わってもらいたい一方で、関わるうとすすぎる大人や教育的・指導的姿勢の大人では、難しいのではないかと。</p> <p>○中高生がリラックスできる場であると同時に、交流しながら、一緒に作っていく居場所カフェであるべきではないかと。</p>
3	カフェで提供しているもの	<p>○カルピス、ブリックコーヒー、麦茶、スポーツ飲料、ココア、ミルクティー等が人気。</p> <p>○教育的観点から、甘い飲物や嗜好品であるコーヒーは不可という学校がある。</p> <p>○食中毒やアレルギーの恐れから、食べ物全校不可。</p>	<p>○味噌汁が人気。特に空腹の生徒には、満たしてあげることが必要。</p> <p>○食べ物や食事は、文化資本でもあるので、季節のものや食べたことのないものを体験してもらうことも重要。</p> <p>○飲物があることで、カフェでの滞在が長くなる傾向がある。</p>	<p>○より居心地の良いカフェとして滞在してもらうため、中高生の嗜好や空腹状況にあわせて提供メニューを考える必要があるが、調達資金ほか運営費用をどうしているか（各種助成金や寄付金を活用するか）。</p> <p>○区立中学校での飲食の提供には様々な制限があると思われるが、体験を提供する意味でもブリックしたコーヒーや瓶入りのラムネ、甘酒等、パラエティーに富んだものを提供できるとよいのではないかと。</p>

No. 主な ヒアリング項目	西東京市立中学校「子ども放課後カフェ」	神奈川県立田奈高等学校「びっかりカフェ」	世田谷区における課題等
4 ロケーションや物品、開催時間等の条件	○生徒の目につきやすい1階にある部屋がよい。 ○調理室は、洗いがしやすく便利。 ○中学生は忙しく気まぐれなので、部活前や帰宅時のわずかな時間に立ち寄りやすい場所がよい。 ○開催時間は、1.5h～2.5h	○飲食物やゲーム類、カフェ備品が保管できる冷蔵庫やバックヤードが必要。 ○「ぼっち」でいるために、本棚の間にシェードのような覆いやネットで隠られる場を作ったり、背を向けて外を眺めていられる場を作ること必要 ○開催時間は、1.5h～4h。ただし、時間厳守ではなく、片付けをしつつ、ロスタイムのような時間を設けて、閉めている。その時間に相談等を話す生徒がいるため。	○協力いただける学校との相談となるが、昇降口に至るまでの生徒の帰宅する動線との関係や、部活や塾通、アルバイトといった生徒の生態に合った時間設定、冷蔵・冷凍庫や各種ゲームやマンガを補充する物品保管場所の確保が重要ではないか。
5 様々な背景や問題を抱えた生徒への対応	○いろいろな背景を抱えている生徒はいると思うが、はっきりとは分からないし、それでよいと思っている。大事なのは、どの生徒にも同じように接すること。 ○養護教諭から生徒の背景を聞くことはある。学校がカフェをどう捉えているかという学校の姿勢による場合もある。	○カフェは、スタッフやボランティアが生徒とリラックスして話す中で、問題を発見する場所であり、解決は別。 ○発見された問題については、学校と共有したり、同法人が月2回受託している相談事業の中で対応したりする。	○教育的な指導か、福祉的な相談・支援かといったことはあるが、相談・支援または解決ありきでカフェを運営すると、生徒、運営側ともレッテル貼り等で、構えてしまい、様々な生徒が訪れ、リラックスできる居場所として機能しないのではないか。 ○学校又は教室に行けない生徒への配慮が必要ではないか。
6 経費、協力してもらえ る地域資源	○経費は、カフェ1回あたり5,000円程度。 ○毎年度、西東京市から、全カフェで約200,000円の補助金をもらうが、回数の多いカフェでは不足するため、別の助成金や寄付により個別に対応している。	○コアとなる専門スタッフ2人の人件費は、約2,000,000円。ただし、他高のカフェも含む。また、自主事業のため、行政からの委託料や補助金はなく、民間の助成金や寄付金、フードロスからの提供で運営している。 ○カフェボランティアには、NPO主催のボランティア養成講座を条件とする。	○世田谷区で、活用できる既存の助成事業はないか、協力をいただける地域資源はないか、検討する必要がある。
7 学校との関係性	○カフェに対する校長会または副校長会での反応としては、管理者側としては、メリットもなくデメリットもなく、困ったことは起こらないが、とてもよい活動という評価でもないという聞いたとのこと。 ○カフェ未設置の中学校では、既存の地域の学習支援があるからカフェは不要との声がある。既存の地域活動との重複にも配慮が必要。	○ボランティア養成講座には、副校長先生にも参加してもらっており、ボランティアの質も見られている。 ○教職員には、否定派、無関心派もいる。	○区立中学校で取り組む場合は、校長の権限においてできる範囲の事業とするのがよいのではないか。また、ご協力していただける校長を見つけることが必要ではないか。 ○区立中学校で取り組もうとする場合は、「中学生の放課後活動支援STEP」と協働するといのではないか。 ○モデル事業としては、カフェの効用を積極的に打ち出すよりも、学校の管理者側にデメリットのないことを理解してもらおう方がよいのではないか。 ○どのように教職員の負担や学校行事への影響がないよう、事業を組み立てて、それを理解してもらおうか。 ○設置先の学校の要望を考慮しつつも、第一は若者が参加・参画できる場とすることが必要ではないか。

■■ コラム ■■

コロナ禍におもう

世田谷区青少年委員会 森岡 美佳

「わー、きゃー、アハハ…」先日近隣の小学校の近くを通ったとき、校庭で遊んでいる子どもたちの楽しい声が漏れ聞こえてきました。コロナ禍にあっても子どもたちの姿は変わらないとホッとすると同時に、様々な制限を受けて行動する子どもたちが感じているであろう辛さに、対面して支えることができない虚しさを感じました。先の見通しがたたない自粛の中、社会のいろいろな場面でリアルなつながりが制限され、私自身も強い不安を覚えました。リアルに繋がるのが人間形成にとってどんなに重要かを再確認しました。

誰もが未来を見通せない今、子どもや若い人にとってロールモデルとなりうる大人がコミュニティの中に見つかるの良いと思います。元なでしこジャパンの澤さんは、「苦しい時は私の背中をみなさい。」と言いました。澤さんは私よりお若い方ですが、その言葉に私は救われました。誰かの指標になることに年齢は関係ないのかもしれませんが、とはいえ、私自身コミュニティに属する大人として、若者の指標になれているかどうかを日々自問しながら過ごしていきたいと思います。

■■ コラム ■■

対話の大切さ～人や社会とつながるために～

メルクマールせたがや 廣岡 武明

私は、メルクマールせたがやという区内の若者を対象とした若者支援機関で働いています。コロナ禍になり、生活が一変してさまざまな相談が寄せられています。オンライン環境が急速に整備され広まる中、他者とのリアルなつながりの大切さを改めて実感しています。一方、オンラインは家に居ても誰かとつながれる強みがあり、オンラインだからこそつながれる若者もいることでしょう。

近年、精神医療の分野で“対話”を重視する「オープンダイアログ」という手法が注目を集めています。精神科医の斎藤環氏は「対話とは、（相手に対する肯定的態度を基本姿勢として）面と向かって、声を出して、言葉を交わすこと」とされています。また、対話は主観性の交換とされています。つまり、客観性や正しいことではなく自分自身が考えていること、感じていることを声に出して相手と言葉を交わすことになります。

この対話の考え方は、今期のテーマである若者の意見表明・参加・参画に役立つと考えます。若者も大人も誰もが垣根なく対話をするのが、若者の社会参加を促すエッセンスとなるのではないのでしょうか。

■■ コラム ■■

若者に必要な「居場所」

協定大学学生(昭和女子大学) 東 珠希

私は授業の一環で、世田谷区の女の子の居場所づくり「あいりす」というボランティア活動に関わっていた。その縁もあってか、子ども・青少年協議会に若者委員として参加してほしいという話が舞い込んできた。正直なところ、私はその若者委員の必要性がよく分からなかった。参加する人達は大人であり、私は成績も芳しくないただの大学生だ。「若者の意見を聞きたい」というのは建前ばかりで、数合わせ的な立ち位置なのかと考えていたほどであった。

しかし、いざ協議会に参加すると、それらの不安や疑念は全てなくなっていた。それは想像していたよりはるかに多くの意見を求められ、自分がこの場に必要とされているということを感じたからであった。純粋な私自身の意見が、この場には求められていたのだ。ボランティア活動で得たこれまでの体験や、大学で学んだ知識が、自分より年齢も経験も上の存在である大人の力になっていたことがとても嬉しかった。私の中ではいつの間にか、不安よりも楽しさが勝つようになっていた。この経験が、自分の自信に変化していたのだ。

きっと、最終的に今の若者に必要なのは、こういった自分が必要とされることを実感する機会や場なのであると私は思う。「必要である」と実感させてくれる相手がいることが最も重要で、それは大人であろうが若者同士であろうが関係ないのだ。今回私はこの子ども・青少年協議会で実感することが出来たが、誰しにもこういった機会があるわけではない。モデル事業としてそういった場を事業的に設けることが出来ないか今まで取組んできたわけだが、根本として、社会に生きるそれぞれの人が、今より少し、他人に寛容で認め合うことのできる環境になれば良いのに、と考えてしまう。そのような社会になるためのきっかけづくりに今後の子ども・青少年協議会での活動がなることを願いつつ、コラムを締めたいと思う。

■■ コラム ■■

若者が生きやすくなるために

協定大学学生(日本大学文理学部) 高野 黎

私は現在、教育格差をテーマに卒論を書いています。その勉強を行う中で、印象的だと感じたのは「非認知能力」です。これはコミュニケーション能力や自己肯定感など数値で測ることのできない能力のことで、幼少期の家庭環境が影響していると言われています。例えば、親が共働きなどにより子どもと関わる時間が取れないと、その子どもの非認知能力は伸びにくくなるということです。つまり、子どもが育てにくい社会であれば、自ら意見表明したり社会に参画しようと行動を起こしたりする若者は将来的に少なくなってしまうのではないかと考えます。若者が生きづらい社会となっているのは、このような背景もあるのではないのでしょうか。

若者としては、コロナ禍もあり将来を不安に感じることも少なくないと思います。しかし、このような状況でも若者のために尽力してくれる大人たちがいるということをもっと知ってもらいたいと感じました。どうか若者が生きやすい社会になるように願っています。

■2. 商店街でのモデル事業

(1) 商店街での実施理由

商店街での実施理由として、主に以下の4点が挙げられる。

- ① 若者のリアルな場所提供として
学校・職場の行き帰りや日常の買い物等で立ち寄る身近な場所である商店街に活動の拠点を置くことで、学校でも家庭でもない居場所を構築することができる。例えば、あまり利用されていないように思われる「高齢者 身近な お休み処」を活用すること等が考えられる。
- ② 社会とのインターフェースとして
商店街を訪れる多様な人々や商店街の方と関わる機会が創出され、若者と若者の交流だけでなく、多世代とのつながりが芽生えやすい環境になる。魅力的な若者・大人と出会うきっかけになると考えられる。
- ③ リアルもネットもつながる場として
インターネットや SNS 等のオンライン環境を整備し、リモートで気楽に集まれる場所をつくることで、いわゆる「意識高い系」の若者も、学校や職場に馴染めない若者にとっても参加しやすい場となる。
一方、昨今のコロナショックによって、コミュニケーションの基本がオンラインとなり、リアルな手触り感のあるコミュニケーションが価値化され、若者たちもそれに接したいという欲求があるのではないかと考えられる。
商店街で事業を展開することで、オンラインとリアルのハイブリッドな取り組みが実施できるのでは、と考えられる。
- ④ 商店街の課題解決と若者が活躍する場の拡充として
商店街の抱える課題等を若者と一緒に解決し、若者の視点で盛り上げることはできないか。例えば、商店街の活性化を担う人手不足の改善や活動の拠点をまちの情報が集まる中心地にする等の有効活用ができないか。
また、若者にとっては、商店街の中で社会体験や職場体験等の機会を得ることができれば、「自分の意見が反映される・結果が見える経験」や「誰かの役に立つ経験」等を通じて、自己有用感・自己肯定感の向上が期待できる。

(2) 実施案

① 活動の拠点をどこにするか？

検討当初の案としては、商店街に隣接し、人々が自由に集まれる場所として「高齢者 身近な お休み処」を中心として活動することや下高井戸商店街（松沢小学校正門前スペース）において、eスポーツ大会を開催し、幅広い層の若者・大人との交流の機会を創出すること等を想定していたが、話し合いを進めていく中で、「シモキタ」という若者にとってシンボリックな地域と共創することで、若者たちの新たな自己発見に繋がられないかとの考えに至り、下北沢駅周辺の商店街における活動可能性を模索することとした。

子ども・青少年協議会委員とのつながりから、「しもきた商店街振興組合」の方々へのご説明及びご協力依頼の機会をいただくことができ、下北沢駅から徒歩30秒の「下北沢まちの案内所」や「下北線路街空き地」等で活動を進めていくこととなった。



② 誰が中心として活動するか・巻き込みたい人は？

ア 活動の主体者は、主に10代後半から20代世代の若者。地元の若者や下北沢駅を利用する若者、「誰かの役に立ちたい」と思っている若者、社会への一歩を踏み出したい若者等を想定。

イ 活動の協力者として、社会人、区民、商店街の人々等、多様な大人に協力の声掛け・呼びかけを行う。

ウ 商店街の関係者や下北沢近隣住人、子ども・青少年協議会委員等が若者の主体的な活動の仕掛け人となることを想定。

エ 若者が活動を進めていく際のクライアントは下北沢に住んでいる人、下北沢に来る多様な人々を想定。

オ 若者の主体的な活動を進めていくためには、チームビルディングのためのキーパーソンの存在が必要となる。

③ 何を行うか？

「下北沢まちの案内所」を活動の拠点として、主に以下の取組みを実施することを想定。

- ア 若者による「下北沢まちの案内所」の運営
- イ 電源やWi-Fiが完備され、ふらっと立ち寄れる秘密基地となるような居場所づくり
- ウ オンラインでのライブ配信、ラジオ放送等を行うサテライトスタジオとしての機能
- エ 屋外での交流イベントを実施
- オ その他、若者を中心に、協力者・キーパーソンとともに企画立案を行う
- カ 準備期間も含め、リアルとオンライン双方を活用したハイブリッドな取組みを目指す
- キ 仕掛け人の役割としては、キーパーソン探し・ハイブリッドな取組みを行うための環境整備・PR協力体制づくり・初期資金や運営資金の準備等

④ 目指すべき姿

商店街でのモデル事業実施における若者の主体的活動を進めていくうえで目指すべき姿を以下のとおり想定。

- ア 若者を中心としたチームビルディング
- イ 若者目線でのマーケティング（街や人、地域のニーズを知る）
- ウ 小さなプロジェクトの立ち上げ（自分たちのやりたいこと×誰かのために）
- エ 若者視点のPR作戦

⑤ 実施にあたってのポイント

- ア 「何をやるか」ではなく「誰に届けるか」をまず考えてみる
- イ 下北沢の個性を活かす（地域への関心を深める）
- ウ 若者の「目の前の困っている人を助けたい」思いを大事にする
- エ 仲間の見つけ方、巻き込み方を工夫する
- オ 主体者の具体的なニーズや目的を探る

③ その他

- ア 下北沢でのモデル事業実施に際して作成した企画案はP.91～92「資料6」を参照
- イ 商店街チームで出し合った活動案はP.93～95「資料7」を参照

(3) 活動実績・経過報告

- 令和元年度
商店街とコラボしたモデル事業を検討開始
- 令和2年6月12日
下北沢をモデル事業の候補として想定
商店街に若者の意見や力をとりいれる企画、および場づくり（オンラインも取り入れた場）

について検討開始。

- 令和2年6月25日

しもきた商店街振興組合へのご説明及び協力依頼

駅前の方の案内所を、モデル事業の拠点として利用してよいとの許諾を得る。

商店街との協業については、若者のターゲット属性が明らかであれば商店街から若者に依頼したいこと・力を借りたいことを提案しやすいとのコメントをいただく。

- 令和2年8月4日

若者のキーパーソン探し・協力者呼びかけ・環境設定へ

ターゲットは10代後半から20代の世代、協力者は区民や社会人、仕掛け人は商店街や若者支援担当課、子ども・青少年協議会委員であることを確認。若者を中心としたチームビルディングが重要であることを話し合う。

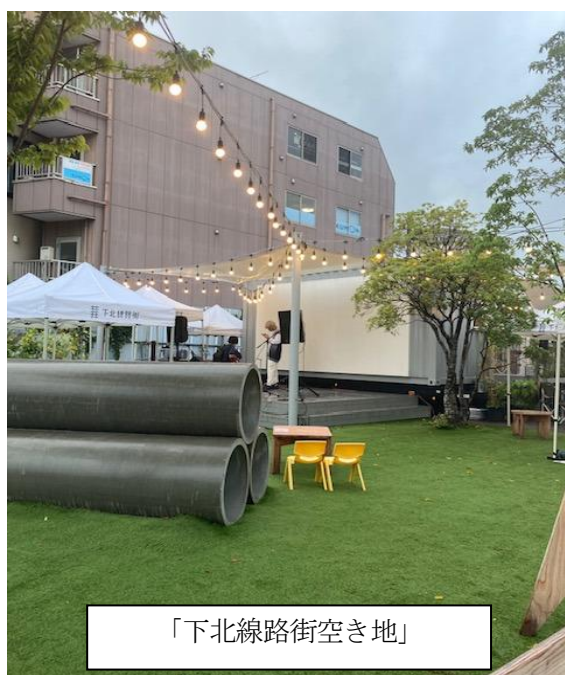
- 令和2年8月12日

下北沢まちの案内所・下北線路街空き地・ポーナストラックを視察

案内所は駅から目の前で、小田急線と井の頭線利用者にとって非常にアクセスがよい。一方で再開発中のため柵に囲まれており、案内所のコンテナは小さく2、3名が定員。コンテナ前のスペースは平日であれば利用可能であることを確認した。

現状は、案内所としてあまり機能しておらず、この「場」の活用から若者と議論できることは有意義だと感じられた。

また、周辺環境に、下北線路街空き地があり、芝生広場や可動式の椅子やテーブルに加え、レンタルキッチンも併設されており、若者と地域の人との交流イベントなどにも有用であることを確認。ポーナストラックでは、レンタルスペースを視察。空間の美しいデザインは、魅力的な居場所の要素の一つであることも確認した。



「下北線路街空き地」



ポーナストラック

・令和2年9月1日～

若者、協力者との打ち合わせ実施・活動事業名を「しもきた倶楽部」に決定

委員から声をかけ、せたがや若者サポートステーション利用経験の OBOG3名、下北沢が地元の大学生2名、ねつせた！関係の大学生4名、計9名の若者に参加いただき初の会合を開催。案内所を中心に活動する若者の活動団体・活動事業名を「しもきた倶楽部」に決定。

「しもきた倶楽部」インスタグラムアカウント開設・LINE グループ始動

9月27日に予定されている、シモキタおやこのまちのつどい市に「しもきた倶楽部」のブースを出店し、若者との接点をつくることを決定。若者と気軽につながるツールとして、若者の意見によりインスタグラムに「しもきた倶楽部」のページを開設。QRコードを名刺カードに印刷し、当日配布する準備を整える。またこの会議の参加者のコミュニケーションツールとしてLINE グループを開設。以降のやりとりはこのLINE グループを通じて行なっていく。

しもきた倶楽部

メンバー大募集

しもきた倶楽部

#下北沢でつながりたい
#居場所づくり #ボランティア #若者の秘密基地
#しもきたコンシェルジュ #しもきたライター

「しもきた倶楽部」は世田谷区の若者支援のモデル事業です。興味があったらぜひインスタにアクセスしてくださいね。



メンバー募集！

- #下北沢でつながりたい
- #居場所づくり #ボランティア
- #しもきたコンシェルジュ
- #しもきたライター
- #若者の秘密基地



「しもきた倶楽部」は世田谷区の若者支援のモデル事業です。少しでも興味をもったらインスタにアクセスしてくださいね。

若者が作成した「しもきた倶楽部」広報物

とうしまい じかせい
きび糖姉妹の自家製ドリンク

¥300

から
ピリリと辛いジンジャードリンク（ホット / アイス）

すなお あま
素直な甘さのレモネード（ホット / アイス）

しもきた倶楽部

ドリンクメニュー表

シモキタおやこのまちつどい市 9月27日(日) 11:00~17:00

会場無料

ステージ・プログラム
タイムスケジュール

11:30	世田谷おはなしネットワーク
12:00	おんぷ館こもろ げんこつやまプロジェクト 石山種子さん
12:30	世田谷おはなしネットワーク
12:45	DJ 輪田知伸
13:45	世田谷おはなしネットワーク
14:00	Jean-Paul RICHARD
14:30	世田谷おはなしネットワーク
14:45	DJ ミチコ
15:15	ノリトレイ
15:45	The Worthless
16:30	Velas Brancas

お買い物

- 1 Cocol Good
- 2 MOJAMOJA FLOWER WORKS
- 3 maonchitrip
- 4 せたがやこどもフードパントリー店舗コーナー
- 5 ミュージシャンズ SHOP

飲食

- 1 せたがしや
- 2 佐藤養老店
- 3 シモキタデリバリー
- 4 コンヴィンヴィアリテ
- 5 しもきた倶楽部

体験

- 1 ヒカリノアトリエ
- 2 下北線路出陣倶楽部

ボルダリング

外遊び

下北線路街空き地
一周年記念ブース

感染症予防対策としてマスクの着用をお願いします。体調不良の方の入場はお控えください。

シモキタおやこのまちつどい市開催チラシ

• 令和2年9月27日

シモキタおやこのまちのつどい市に「しもきた倶楽部」のブースを出店

「せたがしや」という駄菓子ブースと・レンタルキッチンでのドリンク販売を行うとともに「しもきた倶楽部」の周知と併せて、東洋大学福祉社会開発研究センターの協力により、障害を持った若者が、自宅から遠隔でイベントに参加する分身ロボット「OriHime」の活用実験も実施。

イベントは、事前準備から当日において職員や委員と若者メンバーが協力し合いながら実行することができ、また訪れる人たちとの交流を楽しむことができた。しかしながら親子が対象のイベントであったため、若者との接点をつくることは存外難しく周知は進まなかった。



イベント当日の様子

• 令和2年月11月13日

「何をやりたいか」よりも「集まりやすい場所とは」へ発想転換

案内所で何をやるかの議論を若者の意見を主体にまとめていこうとしていたが、個々の忙しさもあり議論が進まない状況に見舞われる中、初心に戻り「若者の秘密基地」のような場とはどんなものか、その場所に集ってフリートークをしてみようということになった。若者にとって集いやすく、自然に交流や対話が生まれる「場」の要件がここから論点に加わる。

- 令和2年月11月24日

案内所に必要なインフラは何？プレアンケート実施

若者がふらっと立ち寄れる「場」としての必要要件を明らかにするため、以下の5つの選択肢で10名にアンケートをLINEで実施。①まちの情報 ②給水ステーション（水や湯）③冷暖房がある ④充電できる ⑤Wi-Fiが繋がる の5項目。結果は明らかに「充電」と「Wi-Fi」が多かった。若者が集う街のインフラに必要な条件やインフラについての仮説ができた。

- 令和2年月11日30日

下北沢まちの案内所にてストーブを囲み居場所をオープン

11月より参加した若者と9月のイベントで知り合った下北沢の若者2名を交え、ストーブを囲んだしゃべり場を実装。アンケートにあった充電器も用意をした。ここで出た若者の意見は、大人が枠組みをつくりその中で若者が自由に動く方がよいというもの。大人への期待がどのようなものであるかがわかってきた。またストーブを囲んで団欒している風景は通りがかりの人の目を惹くことを確認できた。

- 令和3年月1日6日

下北沢まちの案内所にてアンケート調査実施

ねつせた！の若者2名と職員・委員で、アンケート調査を実施。対象は主に下北沢に訪れる若者で、質問項目は来訪動機、案内所に求める要件、属性など。2時間半で50名のアンケートを回収（若者属性以外の回答も含む）。アンケートのお礼として甘酒を振る舞い、ストーブの前で団欒タイムも演出できた。新型コロナウイルス感染者が日々過去最多を更新する中、街ゆく人に声をかけるのは難しい状況にあったが、若者2名が声をかけると、若者が立ち止まるという現象を多く目撃した。大人の声かけでは通り過ぎる若者も、若者の声かけには応じることがわかった。

また、この活動に興味をもち、アイデアなど積極的な意見交換に応じてくださった社会人女性とも出会うことができた。（アンケート結果はP.96～100「資料8」参照）



アンケート実施当日の様子



お礼の甘酒

(4) 商店街モデル事業協力者の声

今期の商店街モデル事業にご協力いただいた方々からのコメントを以下に記載する。

① 若者より（詳細はP.101～103「資料9」参照）

- ・ 下北沢のイベントについては、今年は様々なイベントが中止になるなかに行えたことの一つですので、思い出深いです。
- ・ せたがやの子ども・若者支援に携わる方々は優しい人が多くて、安心して取組みに参加できました。
- ・ 意見を取り入れてくれるところと、自分達ではできないところにサポートをしてくれる体制がしっかりとあり、ありがたかったです。
- ・ お店の形づくりから材料や備品類の調達、当日の最中にも度々お声がけいただけただので、安心して参加できました。
- ・ 参加日数が少なくあまり繋がれなかったのが残念です。
- ・ 会議の回数やオンライン化をしたら大学生も参加しやすいのかなと思いました～
- ・ コロナの影響や時間帯（大学の授業と重なってしまったりと）なかなか会議に参加できなかったため、モチベーションを保つことができなかったと思います。
- ・ どんな人がしもきた倶楽部のメンバーで、誰を中心として動いているかなどがわからないため、活動に参加するのに少しハードルがありました。

② しもきた商店街振興組合理事長 柏 雅康 様より（※個人としてコメントをいただきました）

若者の居場所づくりの大切さは、以前から感じていたところである。

10年くらい前から、町会の中で「このエリアには40～50代くらいの方が、ひきこもっている。老夫婦は、自分の子はこれからどうなるのかと心配している。」という話を聞くようになった。また、世田谷区は人口が増えているが、それは一部の地域であり、人口減少を感じるエリアもある。

「独立できない方がいる」、「子を心配する親」、「人口減少」ということが常に頭にあり、このような状況を何とかできないかということを考えていた。

今回、モデル事業の協力依頼を受け、活動に携わってきたが、「若者の居場所」という取組みは、若者が外に出るためのきっかけの一つとして、非常に良い取組みであると感じている。

ただ一方で、「元気で活発な若者」と、いわゆる「ひきこもり系の若者」という、「全て」の若者を一括りに巻き込んでいくことに、若干の違和感を抱きながら活動を見守ってきた。「ひきこもりがちな若者は、元気な子たちをみて、プレッシャーや居心地の悪さを感じることはないか?」、「本当に支援が必要な若者にターゲットを絞って注力していくべきではないか?」との思いも個人的に抱いている率直な感想である。

若者の居場所支援はとても大切なことである。若者にとって居心地の良い環境、外に出て生活しやすい環境にしていくことが、まちにとっても大切なことである。

このモデル事業が、今後も計画・遂行されることを期待する。

(5) 検証・課題

① 通信環境整備について

若者が居場所に求めるものとして、「Wi-Fi 環境」や「充電設備」が挙げられていた。特にインターネット環境が整っていることは何かをする上でも前提となる必須条件であると考ええる。

公衆無線 LAN サービス「SETAGAYA Free Wi-Fi」は、電波が弱かったり制限があり使いづらいため不都合なく利用できるものであることが望ましい。

シモキタおやこのまちのつどい市に「しもきた倶楽部」のブースを出店する際、通信会社に対し、ポケット Wi-Fi の無償貸し出しの協力依頼を行ったが実現には至らなかったが、別ルートにて交渉したところ実現出来そうな可能性が出てきた。

今後も調整を重ね安心・安全な通信環境を整備することが急務である。

② 進行方法について

私たちは若者の主体性を重んじた進め方をするを共通認識として持っているため、本来であれば、最初のスタートの段階から若者たちに会議進行等を進めてもらい、委員サイド（大人側）はそれをそっと支える形式が理想とされていた。

ただその一方全てお任せにしてしまうと何から着手していけばいいかわからず、困ってしまうシーンも見られた。若者の想いを重んじつつ、大人側の適切なディレクションや参加・参画方法については答えを模索しながら何とか進めているのが現状である。

③ 若者の参加を促すインセンティブ設計について

活動（例えば居場所の運営・イベントの運営協力）に参加・参画してもらう際には、交通費はもちろん報酬の財源を確保する方法を検討しなければならない。また事業における資金調達方法として、クラウドファンディングや助成制度を使用したり、販売やスポンサー収入など多様な収益構造を持つことで、活動を支える持続的な仕組みが構築されるべきである。また、金銭面だけでなく、組織のカルチャーなども大きく若者の参加率に影響するため、カジュアルで楽しめる工夫が必要。

④ 運営体制について

今回は本協議会で議論した上で現場に向かい、直接若者たちと議論やヒアリングを繰り返しながら協働していくスタイルで進行してきたが、上記の通り、若者と私たち委員サイドとの距離感が掴めぬまま時間が過ぎ去ったことも印象深かった。本来であればそのギャップを埋めるべく毎日のように若者たちと密なコミュニケーションを行い、スムーズな進行に務めるべきだが、実際そこまでのコミットメントが難しいことも事実として存在する。その部分を事務局である区役所が担う選択肢もあるが、なかなか片手間で進めていくのも難しい（実際「ねつせた！」では、事業者と世田谷区の担当者がタッグを組んで日々進めている）。

一方、この段階から事業者を決め、資金を使い実行・推進していくのも早計であろう。その丁度エアポケットになっている部分をサポートできる体制やスキーム構築が重要である。また、対若者だけでなく対商店街視点でも人材確保やそれに掛かる報酬などのインセンティブ設計も視野に入れて企画する必要がある。

⑤ 今後の取組みに期待すること

これまでに築いてきた若者や地域との関係性を維持するため、令和3年－4年度期の子ども・青少年協議会が始まるまでの間（4月から6月）も継続して取組むことを期待する。

■■ コラム ■■

モデル事業【商店街チーム】を実施した感想

世田谷区民生委員児童委員協議会 明石 眞弓

1. 関係機関や大人からの情報発信をしても、若者の情報のスイッチにはなかなか届かない
 - ・モデル事業の実施にあたり、参加した若者はすべて「人とのつながり」によって情報を得た若者であった。
2. リアルの「場」は大事だが、情報通信環境が、若者の「場」としての存在が大きい
 - ・若者が居場所に求めるものは「Wi-Fi 環境」や「充電設備が整っていること」が大きな要望を占めていた。
3. 若者たちの将来像は「夢」や「理想の仕事」などのイメージが先行している。現実の社会を知る機会も大事であると思うが、そのための日常での社会参加の場が少なすぎる。
 - ・商店街では、店主や組合の理事、地元の人やNPOで活動する人、社会人など多様な大人が集まり、若者と一緒に活動することを応援してくれる体制があるが、それを活かすきれない。
4. 子ども若者が社会参加をするうえで、若者自身はその支援の担い手となりうるのではないか。また、その取組みによって若者自身も成長できるのでないか。
 - ・モデル事業では大人の声掛けでは、足を止めない若者も、協力してくれた若者に声をかけられると足を止めて参加してくれた。
5. 担い手となる若者には、若者の育成支援に関わる専門家や地域のネットワークが必要である。そのために区内の団体（チーム）を活用できないか。
 - ・今回のモデル事業は区と委員が実施をしたが、それぞれの仕事の合間で限界があり不十分であったと思う。まちには多様なロールモデルがいて、見守ってくれている大人たちもいるので、若者を支える役割としてのチーム（団体）が若者の育成支援やネットワークのコーディネートを行うと良いのではないか。

商店街に「居場所」はいかにしてできるのか

区民委員 藤原 由佳

「どんな若者にも第三の居場所が必要」という先期の結論から、地域と交流できる「場」をつくり、若者が自由に意見表明できる機会をつくろうと動き出したのが商店街におけるモデル事業だ。開始当初は、区の保有する施設や空き家の活用など、まちの活性化を念頭においた実現可能なプランや、若者によるラジオやライブ配信など、好きなことを自由に発表できる秘密基地のようなものを想定。2020年の秋口から、一つのイベントを活用し、まちづくりに関心のある若者を集うことになった。

”若者の意見表明”といっても、やりたいことや伝えたいことが具体的にある若者の方が圧倒的に少数だ。たいていは、働きかけがあって手があがってくる。経験を広げたい若者は多いし、社会に貢献したいと思っている若者は感覚的ではあるが増えていると感じる。大事なのはそうした良い意味の「受け身姿勢」である若者に対し「機会」を接続する機能なのではないか。

意見表明を優先すれば、目的をもった若者を集めていくことになる。「何をするか？」から議論は出発する。しかし、地域や世代間での関係性が希薄になっている中、それだけでは不十分なのではないかと考えた。もう一歩手前に、「ふらっと立ち寄れる」場としての魅力がまちの中にあることが必要なのではないかと。おそらく昔の商店街には、ふらっと多世代の人が交流し顔見知りになる機能があったはずだ。

そして私たち商店街チームは、つながりをもった2名の大学生とともに、2021年1月6日、下北沢駅前に立ち、案内所という「場」に必要なインフラ要件を若者に聞くべくアンケートを実施した。アンケートへの協力を熱心にお願ひする大人委員を横目に、若者スタッフの声がけにばかり若者が足をとめていく。悲しいがこれが現実だ。しかしながら、寒空の下、世田谷区の方が用意くださった石油ストーブの前で短い会話が進む。世代を超えて誰かと触れ合う機会を自然と生み出す「場」とは何かを実装できた瞬間だった。

私はこれまで民間企業で教育・育児・介護の分野のメディアを立ち上げ、現在はコンサルタントとして自宅の環境を整える技術を伝えている。1日の中で最も長く過ごす場所の環境がとても重要であるように、まちの中にも居心地のよい「場」がこれからもっと増えていくことを願ひながら活動を続けていきたい。

■■ コラム ■■

偶有的環境が持つ意味

区民委員 新井 佑

一連のコロナショックにより我々の生活は一変した。

会議も対面からオンラインに変わり、いつでもどこでも”気軽に”会議が出来るようになったメリットは個人的には今でも享受し続けている。一方オンライン会議により社内のコミュニケーション濃度が下がっているという話も良く聞く。オンライン会議ツールは目的的であり、いわゆる雑談をするのが場の雰囲気としてなかなか辛いということなのかと察する。ここで思うところは「私たちは目的の為に生きているのか」ということだ。ロジックではそう思い（思わせ）つつも、素敵な記憶達は意外と目的の部分から離れたところに潜んでいるのも珍しくなく、それこそが人間性の回復に寄与していると言っても過言では無い。

今回は商店街の一角に若者のための居場所をつくることをミッションとした。その中で特に意識して考えた部分は、偶有性を担保するということ。何かが生まれることを直接期待するのではなく、ただその存在自体が媒介となり若者と若者を柔らかくつなげ、結果的に主体性を育み、多様な人々を受け入れる大きな器となることが求められている。

そういった方向性の中、実際に若者たちにアンケートを取ってみるとその場所に必要な主なモノは「Wi-Fi や充電場所」であった。私たちは例えばそれを「Setagaya Wakamono Hotspot」と名づけることで、若者たちのコミュニケーションの基盤となる環境整備を商店街の中に限定的に創り出し、若者同士や地域社会とのつながりだけでなく、今まで外に出辛かった若者の背中を後押しする存在になれたらと思う。

若者にとっての居場所とは何だろうか。私たちは彼らにとってただ便利な居場所を提供したい訳でないし、そうすべきでも無いと考えている。その場所や環境から”意味”を感じ、社会への投金をそれとなく促すような、そんな場所を提供したい。

化学反応が生まれやすい、オープンで偶有性がたっぷり詰まった商店街の一角で。

■■ コラム ■■

若者たちの居場所と地域への還元

特定非営利活動法人ワーカーズコープ 篠原 健太郎

「若者たちが世田谷に戻ってきた。いや、帰ってきた！」と表現した方が適切なのかも。せたがやサポステで就労支援を受け、カフェでのジョブトレーニングを体験した若者OBOGたちが、9月27日のシモキタおやこのまちのつどい市で貢献してくれた。かつて自分たちを成長させ、貴重な居場所にもなったカフェの存在があった。マスターが廃業を決意し、リアル店舗が無くなったが、自分たちと同じように必要としている人たちのために、第2のカフェを立ち上げようと「出張カフェ」という形で取組み続けた。やがて多くの人を巻き込み、3年前に区外に居場所となるカフェを立ち上げ、今もそこで働いている。

今回、時間や設備など様々な制約がある中で、知恵を出し合いながら乗り越えてくれた。支援員としての私の役割はあまり必要とはならなかった。今は区外で働く若者たちが世田谷の取組みに参加し、活躍した。この実践は、世田谷で育ち成長した若者の力が、時を経て地域の中で循環したように思える。人々がつながる居場所や取組みをどのように創るのか、時間をかけて取組んでいきたい。

■3. イベント形式でのモデル事業

(1) イベント形式での実施理由

- ① イベント形式にすることで参加者に非日常感やライブ感を提供でき、参加者が共通体験を通して何か変わるきっかけとなることが期待できるから。
- ② イベントという非日常を提供することで、普段と違う自分を表現することができる空間となる。そのため、所謂「意識高い系」の若者だけではなく生きづらさを抱えた若者でも、意見が言いやすいから。
- ③ 継続的な事業ではないので、比較的取組みやすく、かつ内容が明瞭となりやすいから。
- ④ テーマによって参加する人が変わるので、多様な人を集めることができ、若者も関わりやすいから。

(2) 実施案

当初のアイデア

【実施場所、活用したい場】

人が集まる場所及び若者が集まる場所が良いのではないかと、ということで以下の案が出た。

- ・三軒茶屋の駅前広場
- ・けやき広場（上用賀）
- ・区内大学のキャンパス
- ・区内商店街の既存イベント
- ・エフエム世田谷
- ・LINE のライブ中継
- ・区内の貸し劇場
- ・お寺、神社など

【巻き込みたい人】

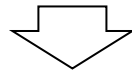
若者と対話する相手として、以下の案が出た。様々な人と対話するべきという意見と共に、社会参画と繋がるような人、また若者が興味を持ちそうなインスタグラマーなども上がった。

- ・道を行き交う様々な世代の人
- ・大学生と地域の人
- ・世田谷区にゆかりある有名人
- ・世田谷区議会議員
- ・区内在住の外国人
- ・インスタグラマー

【何を行うか（何をテーマに意見交換を行うか、イベント内容）】

若者（特に生きづらさを抱えた若者）が意見表明できるような内容を考えた結果、以下の案が出た。

- ・若者の興味を共有できるもの、・自己表現、
- ・今までずっと言えなかったこと、・サイコロトーク
- ・忙しい大人と若者がゆとりを持てるような内容
- ・イベントに訪れる子ども・若者が興味を持てること
- ・カフェ、・七輪とこたつ
- ・講座（イベント出店講座、歩行者天国でのバンド上達講座、メイク講座）



案を出し合う中で、学校や商店街での取組みは「若者が日常的に意見を言える環境づくり（ベースづくり）に通じるもの」という結論が出た。

そこでイベントチームでは「若者から発信された意見が社会に影響を及ぼすことを実体験できる場所づくり」を行うことになった。

その結果、以下の案にまとまった。

「区議会議員と若者との意見交換会」

- ・ 普段接点のない中高生から 20 代までの若者と、世田谷区議会議員が出会い、様々なテーマで話しあってみるイベントを、オンライン会議システムを活用して実施する。

主体者

- ・ 中高生から 20 代までの若者
- ・ 世田谷区議会議員

(3) 実施経過

施策の立案や検討に携わる大人が、若者に集まってもらい意見を聴く取組み

① **区議会議員と若者との意見交換会** ⇒ **延期**

日時：令和2年7月26日（日）10：00～12：00 実施予定

対象：区内在住、在勤の中高生世代～20代の若者

世田谷区子ども・青少年協議会所属区議会議員

テーマ：特に設定せず、コロナ禍による生活の変化や困っていること等を中心に意見交換を行う。

延期理由：若者の応募が少なかった（4名）

（開催日は例年であれば夏休み期間であったが、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、テスト期間と重なる学校があるなど、参加しにくい状況もあった）

周知・調整不足があった

② 世田谷区子ども・青少年協議会委員と若者との意見交換会 ⇒ 中止

日時：令和2年11月3日（火・祝）10：00～12：00 実施予定

対象：区内在住、在勤の中高生～20代の若者

世田谷区子ども・青少年協議会委員

テーマ：中高生から20代の若者までと年齢に幅があるため、対象年齢層に共通するテーマとしてコロナ禍による生活の変化や困っていること等を中心に意見交換を行うことを計画した。但し、必ずしもテーマにはこだわらずに、参加する若者の興味関心に応じて自由に意見交換ができることも大切にした。

中止理由：中高生のスケジュールにも配慮したが、若者の応募がなかった。

-----ここまでの振り返りと、今後のトライアルの検討-----

※若者の応募が少なかった（なかった）ことに対する考察

- ・「子ども・青少年協議会」の分かりにくさ。チラシに紹介文を掲載したが、伝わっていない。意見を伝えたとして、その先どうなるのかイメージできない。関心を持ってない。
- ・「意見交換」という漠然としたテーマを設定では、若者へのアピール力にかけるところではないか。むしろ、ある目的のために既に形成されている若者グループにターゲットを絞って、そのグループのメンバーが関心をもっているテーマに即して意見を出してもらうことのほうが、意見を出しやすいのではないか。

※若者の意見を聴くためには？

- ・若者に集まってもらうことの難しさ → 若者が集まる場所に出向いて行く
- ・トライアルとして、短時間であってもインタビュー可の若者の集まりがあれば出向いてみる。
- ・参加のしやすさにも考慮し、オンラインでの実施とする。
- ・誰と意見交換をするのか明確化する必要がある。 → 協議会の取組みとして、チームメンバー以外の協議会委員も参加可能とする。

施策の立案や検討に携わる大人が、若者の集まる場所に出向いて意見を聴く取組み

③ 希望丘青少年交流センター（アップス） インターンとの意見交換会

日時：令和2年11月1日（日）16：00～17：00

会場：アップス青少年専用会議室＋オンライン

対象：希望丘青少年交流センター（アップス）インターン4名（区内在住3名、区外在住1名）
子ども・青少年協議会委員（1名）

内容：資料10（P.104～111）のとおり

インターン4名全員が世田谷区を好きであると答えており、その理由として、面積の広さ、福祉の充実、利便性の高さ、若者関係の施設の充実、公園の充実、図書館や地区会館など充実をあげている。区の公的施設を日常から活用しており、その経験を通して世田谷区に対するイメージを形成していた。

コロナ禍で困っていることは多々あるものの、状況を冷静に見る面を持っている。若者の

声を社会に伝えるには、まずは若者同士の間で意見交換をすることが有効であると考えている。同時に声を聴いてくれる組織や、小さな声でも掬い取れるようアンケート調査も必要だと考えていることがわかった。

④ **昭和女子大学 鈴木ゼミ 4年生との意見交換会**（鈴木先生は子ども・青少年協議会区民委員）

日時：令和2年11月10日（火）9：00～10：30

会場：オンライン開催

対象：昭和女子大学 鈴木ゼミ4年生（区内在住1名、区外在住3名）
子ども・青少年協議会委員（5名）

内容：資料10（P.104～111）のとおり

学生4名のうち1名は実家から離れて世田谷区内で一人暮らしをしており、3名は都内、都外から世田谷区内の大学に通学する。全員が世田谷区に対してポジティブなイメージを持っており、そのイメージは、居住地との比較や通学や居住の経験から得たものであった。

コロナ禍によりオンライン授業を受けており、大学生が通学できないことは仕方のないことだと受け止めている。

4年生であるため卒業論文作成に取り組んでおり、卒業研究調査により得た知見から、社会をあらためて見つめ直し、社会課題を発見している様子が窺われた。だが、気づいた課題の解決のために発信することはまだハードルが高いため、今回のように大人と自由に語り合う中で、考えを述べる機会があると嬉しいということであった。

⑤ **大学生が運営する女の子の居場所「あいらす」利用者との意見交換会**（オンライン）

日時：令和2年12月3日（木）18：00～19：00

会場：三茶しゃれなあと「スワン」＋オンライン

対象：大学生が運営する女の子の居場所「あいらす」利用者（2名）、スタッフ（2名）
子ども・青少年協議会委員（4名）

内容：資料10（P.104～111）のとおり

週に2～3回および月2～3回程度あいらすを利用する若者たちである。あいらすでの活動内容は利用者の投票で決めており、利用者の投票により決定することに満足している様子であった。コロナ禍により料理の活動が実施できず、活動前後の消毒等、手間がかかることが増えたが、スタッフに会うことができ、ストレスのはけ口であるあいらすは利用者にとって必要な場所となっている。利用者から委員に「初任給の額」の質問があった。就労にたいして具体的なイメージを形成しはじめていることが感じられた。

(4) 実施結果および提案

当初の計画では、日常ではなかなか体験できないシチュエーションを設定することで、多くの若者が意見表明できる場をつくることを検討した。若者の声を少しでも社会に直接届け、少しでも政策などに反映することができるようにと、区議会議員や子ども・青少年協議会のメンバーとの意見交換会を計画した。実際には、若者に対する周知方法や時期、若者にとってイベ

ントの趣旨が分かりづらいなどの課題があり、参加者が集まらず、二度頓挫することとなった。このことを受け、モデル事業の方向性を、若者に集まってもらう方法から、若者が集まる場所に出向いていく方法へと転換を図ることになった。このことは、今後、継続的に事業展開する上でも重要な指針となると考えられる。

3回実施した若者との意見交換の中でも、社会に対して自分から声をあげることについては、「発信していない」、「どこに訴えればいいのか分からない」、「一人で言っても変わらなそう」などと述べており、どこか消極的なムードが感じられた。いろいろな要因はあるにしても、若者が社会に対して自ら声をあげることは、難しいことであるということを前提にしながら、今後の事業を考える必要があると考えられる。一方で、若者はこうした意見交換について好意的に感じており、「大人から寄り添ってもらおうと話しやすい」、「意見を聴いてくれる仕組みがあるといい」などと述べている。大人に真剣に話を聴いてもらう機会を求めている傾向にあり、若者の意見表明のためにはこうした機会を増やしていく必要がある。

そのためには、聴く側の大人やコミュニティの姿勢が大切になる。若者からは「意見を述べる時には、相手を選ぶ」との発言もあったが、その真意としては、きちんと声に対して耳を傾けてくれる大人を欲しており、そうした姿勢があれば専門家だけではなく、身近な誰かでもよいと考えられる。若者が日常的に過ごしている児童館や青少年交流センターなどがしっかりと機能することは勿論だが、地域コミュニティの中に、こうした若者の声に耳を傾けることができる大人を増やし、話を聴く機会を継続的につくっていくことが大切だと考えられる。

若者が社会に声をあげない理由として、「声を上げたとしてもどうせ変わらないし、無駄に思える」などの意見があった。こうしたあきらめムードを打破するためには、若者の声が社会に反映された事例を広く周知したり、実際に若者に体験してもらったりすることが重要だと考えられる。そのためには、まずより身近な場所で、若者の意見に対する回答やアドバイス、あるいは行動結果をきちんと返すことが必要であり、こうした積み重ねが、若者の主体的な行動を喚起すると考えられる。

具体的には、若者が日常的に過ごしている場で、こうした実践を加速させるとともに、世田谷区全域で若者の声を聴くキャンペーンを実施したり、こうした声を政策に届け、区役所の各所管から意見に対する回答を行ったりする取組みも有効だと考えられる。まずは若者に寄り添い、声に耳を傾ける機会をつくり、その積み重ねの上に、若者自身が一步踏み出し、発信をしていけるような環境づくりに取り組むべきであると考えられる。

■■ コラム ■■

耳を澄ます

区民委員 鈴木 法子

2050年を目標に日本は今、脱炭素社会へとシフトし始めています。2018年の夏にグレタ・トゥンベリさんがスウェーデンの国会議事堂の前で気候変動運動の抗議運動を始めた時には予想もできないことでした。バリ島ではメラティ・ワイゼンさんとイザベル・ワイゼンさんの5年にわたるバイバイ・プラスチックバック運動が実を結び、2018年にはレジ袋が廃止されました。声をあげた時のトゥンベリさんは15歳、ワイゼンさんは12歳、イザベルさんは10歳です。日本でも2020年7月からレジ袋有料化が始まっていますが、わたしたちが生きる現在、そして未来は、大人だけではなく子どもや若者の声に加わってはじめて創られます。

世田谷区にも多くのトゥンベリさんやワイゼン姉妹がいます。区内のトゥンベリさんやワイゼン姉妹の声に気づき声を広めることが、子ども・青少年協議会の大きな役割の一つです。同時に、耳を澄まさなければ聴こえてくることのない小さな声のありかを探し、その声を宝物として扱うことも、同じくらい大切な子ども・青少年協議会の役割です。

21世紀に日本で生まれた人の人生は100年といわれています。100年後の世田谷を見据え、さらに多様な子どもや若者の声が響き合う世田谷であるために、子ども・青少年協議会には大きな期待がかけられています。子ども・青少年協議会は、子どもや若者たちの声の拡声器であり集音器でありボイスレコーダーです。

■■ コラム ■■

若者の意見表明できる環境を構築するために

希望丘青少年交流センター「アップス」 下村 一

子どもや若者がコミュニティの一員として自分の意見を述べることは、コミュニティの活性化につながる、とても重要なことです。しかし、学校や社会の多くの場面で、人と同様であることを求められている子どもや若者にとって、自分の意見を表明することは、とてもハードルの高い行為だと考えられます。こうした状況を打破していくためには、大人の在り方が問われていると思います。

カナダ・オンタリオ州にあるアドボカシー事務所では、子どもや若者の声を聴き、若者が社会の主体となっていくための支援をし、定期的に若者の声を社会に届ける仕組みをつくるなど大きな成果を残しています。

カナダでは専門機関を設置することで成果を残していますが、世田谷区では日常的に若者との多くの接点を持つ青少年交流センターがこの役割を果たしていくことが必要だと考えています。この報告書は、青少年交流センターが今後、取り組むべき活動指針になるものであり、センターの内外で、若者との信頼関係を築き、若者に「自分の意見を表明してみよう」と思ってもらえるように環境を整えるために努力していきたいと思います。

■■ コラム ■■


新しい時代の若者支援の在り方

『情熱せたがや、始めました。』メンバー 中谷 汐里


私は普段「情熱せたがや、始めました。」(以下「ねつせた!」という)のメンバーとして区内で活動しております。ねつせた!は、本協議会における若者の社会参加・参画のモデル事業としてスタートし、SNSを用いて若者ならではの視点で世田谷区内の情報を発信しています。今回、このねつせた!から代表してこちらの協議会に携わらせていただきました。

ねつせた!で活動をしつつも、協議会については殆ど知識がない状態でした。そこから青少協委員を2年間務めさせていただいた結果、世田谷区には若者に対してこんなにも真摯に向き合って下さる大人がいたんだ、という気付きを得ることが出来ました。一方で、このような大人の方々による政策が若者のもとに届き切れていないのも現状です。ねつせた!メンバーとしては、周知方法などを見直し、若者向けの政策を若者に届き切ることを目標にして引き続き活動に取り組んでいけたらと感じました。

また、今期は「生きづらさを抱えた若者」の参加・参画が課題となっていました。2020年度は新型コロナウイルスの影響もあり、なかなか思うようにモデル事業を行うことが出来ず、そのような若者に直接お話を聞くことが出来なかったのが心残りです。また、コロナ禍で新たに生きづらさを抱えている若者も増えたかもしれません。今期のモデル事業などで得たことを活かしつつ、新しい時代に沿った活動を来期は期待します。影ながら、応援しています。



第3章 提言



■ I. 前期提言と今期の取組みの関連

- 平成29年～30年度期の子ども・青少年協議会では、「若者施策の評価検証と体系化について～区民の参加と協働を目指して」をテーマに検討を行い、7つの提言を打ち出した。
- 前期提言がその後の若者施策にどうつながっているのか、区のと組みと今期協議会の取組みの両面から確認した。

■ 平成29年～30年度期 子ども・青少年協議会提言

若者の交流と活動の推進	1. 世田谷区の若者にはみな「第三の居場所」がある
	2. 地域に「大人・若者のたまり場（情報や活動、交流の拠点）」（=地域コンソーシアム）がある
	3. リアルもネットも若者がつながる場に
生きづらさを抱えた若者の支援	4. 生きづらさを抱えた若者が、「居場所」を中核とした専門機関と地域との連携により総合的に支えられている
	5. 教育機関との連携により、生きづらさを抱えた若者が早期につながり切れ目なく支えられている
若者の社会に向けた文化・情報の発信	6. 地域の大人、行政職員が若者施策の情報を共有しながら若者を支えている
	7. 若者と地域の大人、行政職員が協働しながら若者の文化・情報の発信を支えている

■ 1. 前期の提言に連動した、平成31年度以降の区のと組み

前期の提言に連動し、平成31年度以降に区がと組んだ施策について概要を紹介する。

交流と活動の推進

- 地域の大人等に見守られながら、夜まで安心して滞在できる「第三の居場所」の重要性に関する提言に鑑み、青少年交流センター池之上青少年会館について、ユースワークの充実や、より若者に寄り添った運営を目指し、令和3年度からの民営化の準備を進めている。
- ネット上の居場所に向けての環境整備として、青少年交流センターでのWi-Fi設備の設置を順に進め、運用している。コロナ禍においては、委託事業者の発案もあり、リモートのユースワークや動画での情報発信、国外若者施設との交流等が行われている。今後、若者に親和性の高いeスポーツやオンラインでの3センターの合同イベントへの活用を見込んでいる。

生きづらさを抱えた若者支援

- 平成 31 年より月 1 回行っていた希望丘青少年交流センターへの出張相談会に加え、令和 2 年度より各総合支所内で定期的な出張相談会を開催。支援機関が遠方にあるため利用しづらかった方だけでなく、各支所の保健福祉センターの紹介によりつながった方や、新型コロナウイルス感染拡大により公共交通機関の利用に不安を感じている方、家庭への訪問相談の次のステップとして等、様々ケースで利用のハードルを下げる効果が認められた。定期的にメルクマールせたがやの専門職が支所に出向くことで、地域の関係機関との連携も強化された。
- 生きづらさを抱えた若者が早期に支援とつながることができるよう、平成 30 年度より、メルクマールせたがやと区職員が区立中学校全校を訪問し、事業説明と意見交換を行っている（令和 2 年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響により、一部のみ実施）。また、令和 2 年度に「ティーンズサポート事業」リーフレットを改定し、区立中学校全校生徒に配布したほか、「世田谷区不登校 保護者のつどい」でも事業説明を行った。

文化・情報発信

- 子ども・青少年協議会における検討から若者に届く魅力的な情報の発信を目指してスタートしたねつせた！は、若者の言葉での情報発信の継続により知名度が徐々に上がり、区役所内や区内事業者からの発信やコラボの依頼に加え、若者団体（大学生グループ）からの依頼などが増えている。また、依頼を受けた発信に留まらず、区役所インタビューや区境ハイクなど若者の関心による独自の取材にもとづく発信が行われている。
- 令和 2 年度よりねつせた！の SNS 情報をまとめるプラットフォームとして WEB サイトを開設した。
- ねつせた！で若者自身がやりたいことに積極的に取組めるために、プロジェクト制を導入。グループでフォローし合い、孤立せずにチャレンジできる仕組みとして継続している。また、プロジェクトのなかで「居場所プロジェクト」を開始。大人がつくるのではなく、若者による居場所づくりの試みとして取組んでいる。
- 活動の継続や循環の仕組みづくりに不可欠な若者の伴走役を、令和元年度より地域活動に特化した区内 NPO 法人委託し、協働した運営を行っている。

■2. 前期の提言に連動した、今期協議会および区の実施の一覧

- 前期提言と、今期の協議会で行った取組みおよび区の実施との関連性を、一覧で可視化した。

□ 前期の提言に連動した、今期協議会および区の実施計画一覧

前期提言 (平成29-30年度 期)	交流			
	1	2	3	
	世田谷区の若者には みな「第三の居場所」がある	地域に「大人・若者のたまり場」がある	リアルもネットも若者がつながる場に	
モデル事業	学校 チーム	<ul style="list-style-type: none"> ・「第三の居場所」について、好事例の確認 ・普段の学校に、教育でない時間（寄添いや支援）があり、教師でない大人（地域住民）がいる「第三の居場所」を作ることの有用性の確認 ・時間がなく、心理的になじみのない場所には行かない若者が、居場所を体験し、青少年交流センター等、校外の居場所へのステップとしての機能の認識 ・学校に来たくない若者への配慮は必須。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「学校カフェ」を体験することから児童館や青少年交流センターの利用につながり、ひいては他のモデル事業とも関連する「地域コンソーシアム」につながっていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・特に高校においては、Wi-Fi設備は必須（音楽・ダンス・学習等）。 ・ただし、つながりの形として、リアル→ネットは効果的だが、ネット→リアルは困難。
	商店街 チーム	<ul style="list-style-type: none"> ○ 若者が身近な場として認知している下北沢において、商店街と連携し、下北沢まちの案内所等を活用した活用したモデル事業を実施した。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ まち自体が若者を受け入れている雑然とした雰囲気の中でモデル事業を実施した。 ○ 事業の企画を通じて集まった大人と若者との情報共有と交流の場を持った。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ リアル：シモキタおやこのまちのつどい市での出店、下北沢まちの案内所でのアンケート実施 ○ オンライン：LINEを活用した情報共有及びアンケート実施、Instagramを活用した情報発信、分身ロボットを活用したイベント参加
	イベント チーム	<ul style="list-style-type: none"> ○ 区内の若者にとって「第三の居場所」である「アップス」や「あいりす」の利用者と意見交換を行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 大人が若者のたまり場に出向き、意見交換を行ったため結果として「大人・若者のたまり場」となった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 意見交換会は全てオンラインを併用して行った。今後本格的にイベントを開催する時に今回の経験が基盤になると考えられる。 ○ 意見交換を行った若者の話から、「アップス」と「あいりす」が、リアルでつながることのできる地域拠点として重要な場であることが、あらためて確認できた。
	区施策	<ul style="list-style-type: none"> ○ 青少年交流センター近隣の小・中の卒業生に、お祝いとセンターのことを記載したカードを配布 	<ul style="list-style-type: none"> ○ Cheer!の配架場所の工夫（区内専門・専修学校や自動車学校ほか） 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 3センターのWi-Fi環境整備 ○ 委託事業者によるリモートユースワークの取組み ○ ねつせた！のSNS情報をまとめるプラットフォームとしてWEBサイトを開設 ○ ねつせた！でやりたいことに積極的に取り組めるプロジェクト制を導入 ○ プロジェクト制で若者による若者のための居場所の試みとして「居場所プロジェクト」開始

前期提言 (平成29-30年度期)	生きづらさ		文化・情報発信		
	4	5	6	7	
	生きづらさを抱えた若者が「居場所」を中核とした専門機関と地域との連携により総合的に支えられている	教育機関との連携により、生きづらさを抱えた若者が早期につながり切れ目なく支えられている	地域の大人、行政職員が若者施策の情報を共有しながら若者を支えている	若者と地域の大人、行政職員が協働しながら若者の文化・情報の発信を支えている	
モデル事業	学校チーム △	<ul style="list-style-type: none"> 「学校カフェ」は寄添いや支援の情報提供、学校以外の人とのつながりを提供し、生きづらさを抱えた人を支える場の一つとして機能 	<ul style="list-style-type: none"> 学校に行きたくない若者へのアプローチとして、インターネットの活用や保健室や始業式での資料配付といったアウトリーチがある。 教室に行けない子の学校内の居場所として機能（SOSの感知、メルクマールせたがやの出張相談） 	<ul style="list-style-type: none"> 子ども・若者を「学校カフェ」利用者として周知するだけでなく、一緒に巻き込んで作っていくことも重要。 区内の若者支援に係るリーフレットや冊子を設置（Cheer!等） 	
	商店街チーム ○	<ul style="list-style-type: none"> 秋の地域のイベントにおいては、地元の若者と、ねつせた！に参加する若者と、サポートステーション卒業生の若者が集うことができた。 サポートステーションで支援を受けて就労した若者が、関係者と連携しながら、培った経験や能力を地域に還元していく姿が見られた。 		<ul style="list-style-type: none"> 地域住民や商店街の人等、多様な大人と若者たちの企画会議を開催したり、地域イベントとの共催としてポスター展示を行うことで、地域と行政が若者施策の情報を共有しながら、若者を支える体制整備に寄与すると考えられる。 	<ul style="list-style-type: none"> 下北沢の街のイベントに参画したり、下北沢まちの案内所の環境整備を行い、「場」を利用した若者中心のアンケート調査を実施することで、若者の文化・情報発信を支える体制整備に寄与すると考えられる。
	イベントチーム ○	<ul style="list-style-type: none"> 実際に意見交換会を行う中で、「あいりす」はそのような役割を担っているように感じた。 	<ul style="list-style-type: none"> イベント形式ということで、学校などの教育機関とは異なる視点・アプローチでモデル事業を行った。 イベントを新たに行うのではなく、メルクマール世田谷など既存の若者支援拠点の活動や場に出向き、若者にとって切実で必要な問題に何らかの形で関わらせてもらったりすることが重要ではないかとの示唆を得た。 	<ul style="list-style-type: none"> イベント参加者の疑問や問いに答えながら、施策情報の提供を行うことができる。（モデル実施では機会がなかった） 	<ul style="list-style-type: none"> ヒアリングした若者の声をもとに、青少協で施策の検討を行った
	区施策 ◎	<ul style="list-style-type: none"> メルクマールせたがや専門職による出張相談会を、5地域で定期的開催することとした（令和2年6月より） 当事者や家族によるピアサポートの活動を支援するため、新たな補助金制度を創設した 	<ul style="list-style-type: none"> メルクマールせたがや「ティーンズサポート事業」リーフレット改定 （メルク）区立中学校全校訪問 不登校親の会での、メルクマールせたがや事業紹介 「Cheer!わかものライフガイド」を、区立小学校6年生、区立中学校全校生徒に配布 	<ul style="list-style-type: none"> 民間団体と共催で「若者支援ネットワーク交流会」をオンラインで開催 「Cheer!わかものライフガイド」による施策周知 	<ul style="list-style-type: none"> （ねつせた） 区や地域の情報やコラボ依頼を受けた若者による積極的な情報発信に加え若者グループからの依頼等知名度UPによる依頼増 区役所インタビューや区境ハイクなど、独自の取材編集を経た世田谷区の発信を実施 若者の伴走役を地域活動に特化した区内NPO法人と協働運営

■Ⅱ. 今期の取組みをととした提案

今期のモデル事業の取組みを通して明らかになった、今後区が同事業を検討していく際に留意すべきことを、「1. 学校チームの提案」、「2. 商店街チームの提案」、「3. イベントチームの提案」、「4. その他の提案」、「5. コロナ禍の中で過ごす若者の支援について」として、それぞれ提案としてまとめる。

■1. 学校チームの提案

学校チームにおける提案は、前期（平成29年－30年度期）の各提言に沿って、次のとおりとする。

◎「世田谷区の若者にはみな「第三の居場所」がある」（前期 提言1）

- 学校チームにおいては、「居場所」についての定義を「強制力のない、人と会える居心地の良い場所」とし、家や学校（職場）以外の居場所について検討した。
- 世田谷区では、児童館や青少年交流センター、プレーパーク等、第三の居場所となり得る施設がある一方、部活や塾に忙しい子ども・若者が自ら、なじみのないそれらの施設に赴くことは、時間的・心理的に困難なのではないかと思われる。
- また、学校（や職場）といった所属のない状況が長く続くほど、安心していられる居場所の確保が困難になることはメルクマールセタがやでの実践から明らかであるため、所属のあるうちに居場所を知ってもらい、利用してもらうことが重要であると考えます。
- 上記のハードルの高さや居場所の重要性に鑑みて、第三の居場所の第一歩として、学校内にカフェをつくり、身近に自然と入りやすいような場「学校カフェ」を設けることを提案するに至った。
- この「学校カフェ」は、日常的に所属している学校・教職員と、学校外にある地域・地域住民や青少年交流センター等施設・職員とが交錯し、若者を見守っていく2.5番目の居場所として機能するのではないかと考える。
- 「学校カフェ」の効果として、様々な大人と出会える場となり、若者の視野が広がり、将来のイメージが豊かになること、学校生活に馴染めない若者を含めて在籍するあらゆる若者がアクセスでき、学校や社会とのつながりを維持できることが挙げられる。
- ただし、学校自体が嫌い・学校そのものに足が向かない子ども・若者には居場所とならないため、違うアプローチを試みる必要がある。

◎「地域に「大人・若者のたまり場（情報や活動、交流の拠点）（＝地域コンソーシアム）がある」（前期 提言2）

- 子ども・若者が、「学校カフェ」を通じて、運営する地域の人々とふれあい、「第三の居場所」を体験し、青少年交流センターや児童館等に活動を広げた次のステップとして、「イベント」や「商店街」等のことを知ってもらえるようになれば、他のモデル事業との連携

ができるようになるのではないかと考え、ひいてはそれこそが地域コンソーシアムにつながると考える。

◎「リアルもネットも若者がつながる場に」(前期 提言3)

- リアルでつながった若者に対し、その延長線上で、より関わりを深めるために「ネット」を活用することは効果があると考え。しかし、「ネット」でしか関わったことのない若者、「ネット」にしか居場所のない若者にアプローチし、リアルでつながることは困難ではないか。
- コロナ禍で、ツールとしての「ネット」の有用性は見出されているが、実際は、リアルの居場所が強く、「ネット」はサブ的、補完的な役割であるのが実情と思われる。
- また、「ネット」で若者に対して情報を発信したとしても、若者がその情報元自体を知らなければ(もしくは若者の間で話題にならなければ)、実空間での交流の第一歩とはならない。だからこそ、「学校カフェ」というリアルでのつながりが、始めの一步として重要視される。
- その中で、例えば、学校に来たくない生徒に対しどのようにアプローチしていけば良いのかが課題である。一案として、インターネットの活用や、保健室・相談室でのチラシ配架、始業式の配付物にチラシを含めること、アウトリーチを行うといった方法により、青少年交流センターや児童館等、学外にも居場所があるという事を広報したいという意見があった。

◎「教育機関との連携により、生きづらさを抱えた若者が早期につながり切れ目がなく支えられている」(前期 提言5)

- 学校カフェは正確に言えば、教育機関と連携するわけではない。問題を抱えているが学校には来て、リアルでつながれる子ども・若者に対しては支援を行うことは可能であるが、学校にも来ない子ども・若者に対しては、教育機関との連携も念頭に置いて、支援していく必要がある。
- (前期 提言3)で具体案として挙げた「アウトリーチ」の方法が大きく関わってくると考えるが、懸念として、アウトリーチをする立場の人間が教職員である必要がある場合、教職員の仕事の負担を増やすことになってしまうことが挙げられる。地域の子ども・若者施設によるアウトリーチの活用が望まれる。

◎「地域の大人、行政職員が若者施策の情報を共有しながら若者を支えている」(前期 提言6)

- 学校カフェのことをどのように周知させるかを考える必要がある。学校に来ていけば自然と知ることができるかもしれない一方で、ヒアリング・視察をした、西東京市「子ども放課後カフェ」、田奈高校「ぴっかりカフェ」とも、中学生・高校生と一緒に学校カフェをつくりあげている。このように、生徒を巻き込んでいくことも大切と考える。
- 若者と一緒に居場所をつくり上げることで、安心して過ごせる場を提供するとともに、若者が主体性を育み、カフェで他者との共同体験を得て、仲間づくりや他者とのつながりの機会を得ることができる。
- ただし、学校に来ていない子ども・若者に対しては、教職員や学外の子ども・若者施設と連携し、学校カフェを地域資源のひとつとして、周知を行っていく必要があると考える。

■2. 商店街チームの提案

今期の取組みを通じて見えてきた課題等を踏まえて、持続的な事業推進の確実な実行を見据え以下の通り提言の方向性を決定するものとする。

①通信環境整備について

- ・可及的速やかに関係者と調整を進めること
- ・官民連携や庁内連携にて実現可能性を上げる基盤をつくること
- ・安心、安全な通信環境を整備すること
- ・リアルな場とオンラインの融合の可能性を最大化させること

②進行方法について

- ・大前提として若者の想いに寄り添うこと
- ・大人が若者が集まるところに出向き、現場感を知ることが大切
- ・初動については、大人側が思考的枠組を持ちながら若者と関わること

③若者の参加を促すインセンティブ設計について

- ・若者が本事業に参加、参画する際には一定の報酬が必要だということ
- ・今後自走する形を見据え、収益構造も多様化していくこと
- ・参加するのが楽しい組織カルチャーの構築が不可欠であること

④運営体制について

- ・委員の役割や、事務局の役割を改めて再定義する必要性
- ・委員でも事務局でもなく、若者と委員側の間を取り持つ人材の確保を
- ・ステークホルダーとの調整に対する人材確保とインセンティブ設計を

⑤今後の取組みに期待すること

- ・令和3年ー4年度期が始まるまでの取組みは現体制で推進すること

■3. イベントチームの提案

イベント形式での取組みを通じた提案

- ・若者に集まってもらうのではなく、大人が若者が集まる場所に出向くことが求められる。
- ・地域コミュニティの中に、若者の声に耳を傾けることができる大人を増やし、話を聴く機会を継続的につくる。そして若者の意見に対して回答や行動結果をきちんと返すこと。
- ・具体的には、世田谷区全域で若者の声を聴くキャンペーンを実施したり、こうした声を政策に届け、区役所の各所管から意見に対する回答を行う取組みが有効と考える。
- ・意見を聴いてもらう経験を積み重ねた若者が、次のステップとして自ら発信をしていける環

境づくりも必要である。

- 外出できず声をあげることのできない若者等を支える機会を拡げるためにも、事業に携わる方が事前に生きづらさを抱えた若者を理解する試み（講習受講等）があるとよい。

今後区がイベント形式の事業に取り組む際に留意すべきこと

- 若者が社会に対して自ら声を上げることは難しいことである、ということを前提にしながら今後の事業を考える必要がある。
- 意見が取り入れられたり実現したりする期待がもてないと、声をあげるモチベーションを失う。小さなことでも意見が反映される体験の積み重ねや、若者の声が反映された事例を広く周知するなどの取組みが求められる。

■4. その他の提案

- 若者に情報を伝えたいのであれば、SNS や YouTube を、ただ使うだけでなく、どう目を引くかを工夫すべき（反面教師として区公式 YouTube）。区役所の様々な課の仕事紹介といったコンテンツ（公式の優位性を活かし、公務員志望の若者を対象）、コンテンツを見る引っかけりとなるサムネイルや動画タイトル（世田谷区のキャラを活用し、華やかに）を工夫すべき（若者委員の声「正直、すごくつまらなさそう」「これだと若者は…。結構検討の余地あり」）。
- 若者の提案を実現するための予算（資金）を確保。若者による審査で選ばれた事業を実現する。
- 若者自身が評価者になって、若者施策や事業を評価する仕組みの構築
- 各会議に若者を一定割合入れるなど、若者の意見が反映される仕組みの構築

■5. コロナ禍の中で過ごす若者の支援について

- オンラインと対面の併用で行うことを基本とする必要がある（例：イベントを行う際には、インターネット環境が無い若者のために、区内の施設のPC を利用しての参加も可能とする）。
- リアルな他者とのつながれる場所が必要。可能な限りの感染対策（3密を避ける、手指消毒、検温、マスク）を実施して相談・居場所は維持する。
- オンラインはアクセスのしやすさが有効だが、オンラインからリアルにつながる仕組みも合わせて整えることが望ましい。

■Ⅲ. 提言

今期の取組みを通じた提案を踏まえて、若者の意見表明や参加・参画により「若者の力が活きる地域」を実現していくために区が取組むべきことを「提言」としてまとめる。

【提言1】「多様な若者に、多様な居場所を」

若者が日常的に意見を表明できる第一歩は、安心して自らを表現できる場、受け入れられる場をもつこと。若者誰もがそんな居場所をもてるようサポートする。

なお、若者のなかには、生まれながらの世田谷区民や通勤通学のために通う若者、生きづらさを抱えた若者、また、障がいのある方々や外国籍の若者など、様々なバックグラウンドを持つ多様な若者が存在する。すべての提言に共通する前提となるが、一部の積極的な若者のみを対象とするのではなく、多様な若者の存在やそれぞれの背景をふまえた取組みが必要となる。

さらに、コロナ禍による若者の行動変化に伴い、リアルとオンラインそれぞれに特性を活かした多様な場づくりや環境整備を進めることで、新旧それぞれの居場所が密接に絡み合い、溶け合い、育み合う仕組みをつくりたい。

●具体案

① 居場所 2.5「校内カフェ」をオープン

子ども・若者が日常過ごす居場所として自宅の次に身近な学校(第2の居場所)の中に、地域の大人など外部から多様な人が参加して運営する「校内カフェ」など、非日常の場をつくる(居場所 2.5＝第2の居場所に第3の居場所の要素を取り込んだ、+0.5のイメージ)。学校内に居場所をつくることは、日常的にふらっと立ち寄れるメリットがあり、より多くの若者に届けることができると考える。

既存の地域団体等、地域資源との協力やスーパーヴァイズ役を青少年交流センターや児童館が担うことで校内カフェの継続化が可能

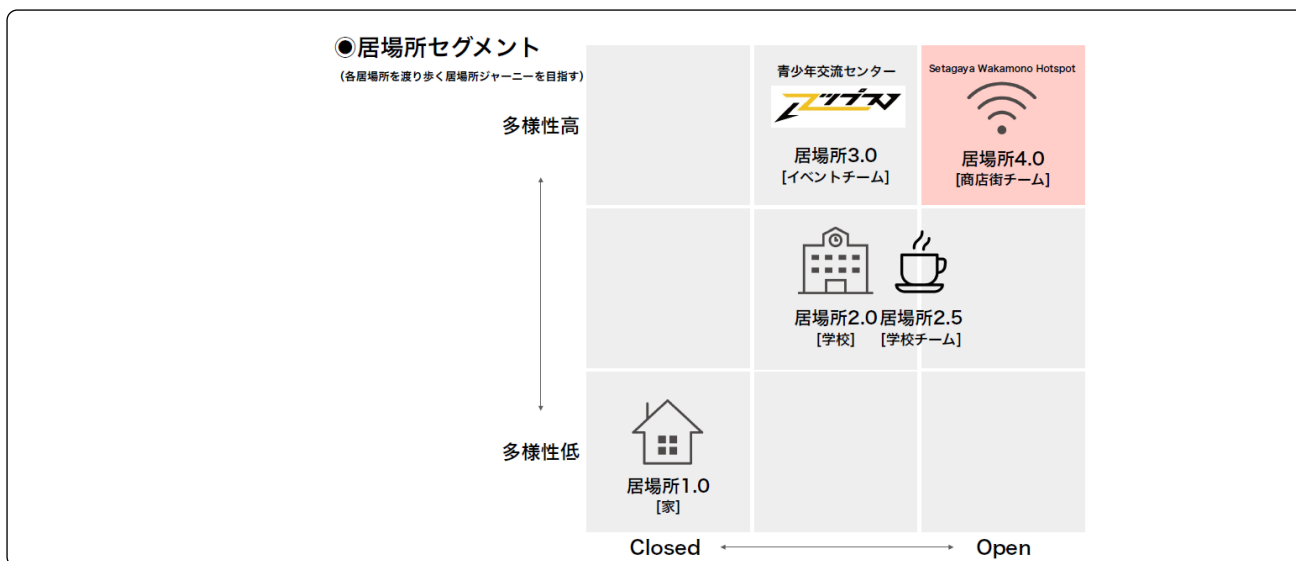
② 居場所 4.0「Setagaya Wakamono Hotspot」の開設

自ら出かける青少年交流センターや児童館とは異なり、まちの中に溶け込んでいる居場所。商店街との連携でWi-Fiや充電器等の通信環境を整備したスポットをつくり、若者たちの地域社会における参加機会を創るだけでなく、外出しづらい若者たちのリモートでの立寄りを促すことも目指す。

既存の若者施設とは別に、商店街など地域のなかに居場所を置くことは、地域にとっても多世代の交流が生まれ、経済活動にもつながり得るなどメリットも大きい。

また、地域における多世代交流や商店街の課題解決等にもつながる取り組みまで発展させることができ、官民連携、庁内連携を進めていきたい。

※EX) 通信事業者との包括的連携協定を結ぶ。



【提言2】「現場へ出向き、若者の声を聴こう！」

答えは会議室でなく若者のいる現場にある。声を上げる難しさを抱える若者は多く、変化のない日常にあきらめの感覚や不安感を抱える声も聴く。まずは、若者の生の声を聞きに出向くことが大切。小さな意見でも届き反映される体験の積み重ねが、意見を表明する意欲の醸成につながっていく。また、その時のメンバー体制も専門職のみではなく多様な大人が聴くことで、共感や憧憬、(良い意味での) 反発等、様々な受止めが可能となる。

同時に子ども・若者の声や意見を日常的に聴く大切さや、参加・参画の必要性が、周囲の大人により理解され浸透する基盤をつくっていくことが重要である。小さな日常の試みであっても、日々子ども・若者の声を聴き、子ども・若者が自ら選び自己決定する体験を重ねることこそが、成長し関心を広げていく土台となる。そのような視点を言語化することで、子ども・若者の身近にいるおとなの言葉掛けや意識、日々の接し方が少しずつ変化していくことが望まれる。

●具体案

① 青少年交流センターや児童館、青少年地区委員会等が学校内に出向き、校内カフェなどの居場所づくりのベースを担う

青少年交流センターや児童館がこれまで地域で培ってきたネットワークや活動のノウハウを発揮することでよりスムーズに進行すると同時に、地域の組織化や取組みの継続化の可能性が高まる。また、アウトリーチとして、青少年交流センターや児童館が学校内に居場所をつくることで、施設を利用せず今までキャッチできなかった若者の声を拾える。

② 小中学校PTAや保育士・職員などへの「子ども・若者の参加・参画」研修の実施

子ども・若者に身近な保護者や教員・子ども施設の指導員、スタッフなどに子ども・若者の参加・参画の必要性や日常から意見を聴く試みの大切さを届ける。

③ 若者の集まる場で、定期イベント的に声を聴く

青少年交流センターなど若者が集う場で、定期的に声を聴く。以前出された意見や、意見を受け実現したことを若者に返し、キャッチボールを繰り返していくことにより、その場は若者と大人が愛着をもち育てていく場となる。

また、若者自身も声を上げることの大切さに気づき、意見表明や参加・参画によって地域や社会に関わることを知る契機となるのではないかと考える。

【提言3】「参加したくなる、カルチャーを」

楽しくなければ、人は集まらない。入り口はハードルを低くし、楽しいコンセプトと頑張れば得られる魅力的なインセンティブがあれば、参加のモチベーションや意欲につながる。なお、前期に実施した「世田谷区若者施策に関する調査」では、活動時間の柔軟性や活動場所の利便性、活動先の雰囲気といった参加条件、あるいは能力・スキルの発揮や収入の獲得といったインセンティブが重視されることが伺えた。

また、対若者だけでなく対商店街視点でも人材確保やそれに掛かる報酬などのインセンティブ設計も視野に入れて企画する必要がある。

●具体案

① 若者の提案を、若者の審査で実現できる助成金の設置

青少年交流センターや児童館などに、若者の提案を実現する予算を確保。若者の審査により選定し、実現に向けた当初の資金面をフォローできる仕組みが、若者に身近な場に必要。

② 活動参加のインセンティブとして地域通貨「せたがや Pay」などの活用

頑張れば得られる魅力的なインセンティブがあることで、若者の参加のモチベーションや意欲につながる。地域通貨「せたがや Pay」などの取組みや PR 活動と連携した実践も検討できる。

【提言4】「多様に参加・協働できる制度を」

表舞台で活躍したい人、陰で支えたい人など様々な若者たちのニーズを満たすべく、多様な参加の仕組みを構築する。また、若者の力を最大限引き出すための、大人と若者をつなぐ存在（OB/OG などの先輩世代や身近なメンターのような若者世代人材）が必要。

また、リアルでの参加が難しい若者はオンラインでの参加が可能等、活躍できる舞台のヴァリエーションを増やすことにより、様々な力を持つ若者が関われる下地をつくっておきたい。コロナ禍における活動の継続・発展にむけても、オンライン環境の整備・併用は不可欠である。

●具体案

① 青少協学生インターンの募集

モデル事業における実行期前後において若者と委員サイドを繋ぐ役割をもつ人材募集案。公募により選出。

② 協定大学や区内高校との定期インターン制度設置

世田谷区内の大学や高校との連携によりインターン枠をつくり、継続的に人材を獲得できる仕組みをつくる。夏休みなど高校生世代から区政や地域活動に参加する機会を後押しする。

③ 利用者から事業者への人材循環制度設置

例えば学校カフェ等の利用者がその居場所を利用する中で、将来的に運営側に回るような地域内における人材循環型の仕組みを構築する。

④ オンラインやリモートでの活動参加

「eスポーツ」や「分身ロボット・AIロボット」、「バーチャル空間」等、若者向けの取組みに情報技術の進展を取り込むことは必須である。居場所での通信環境を整備し、オンラインゲームや分身ロボットを活用することで、外出できない若者や障害を持った若者の参加できるよう取組む。

【提言5】「たくさんの多様な大人と会おう！」

若者の多様性を育むには、多様な大人との関係性や多世代の関わりを構築することが大切。若者と大人と一緒に取組むことの難しさがあるものの、大人と関わることでディスカッションの精度を上げたり、専門的な学びだけでなく、生きる知恵やシティズンシップへの意識の醸成などにつながる。

SNSやハッシュタグなど若者の関心が流行を生み社会をリードする一方、関心の世界が限られる側面や、FX詐欺被害など大学生世代でも全国的な問題となっていることが指摘されている。社会の入り口として、地域のなかでいろいろな大人に出会う体験が、学校で学ぶ専門性とはひと味違った学びを身に着ける機会となるのではないか。同時に、おとなや地域の側が多様な若者と出会い関わることで、刺激を受け変化することも、相互作用として十分な効果を生む可能性を指摘することができる。

●具体案

① 若者に身近な居場所で多様な人との出会いの機会をつくる

地域の方が関わる学校カフェや、買物客が立ち寄る商店街での居場所・イベント等、普段接している保護者や教職員とは異なる大人と出会い、話をするができる場や機会をつくる。

- ② 青少年交流センターにおける、大人の居酒屋ノミネーションを模したイベント「飲めない居酒屋」等、若者の交流の場に地域の大人も参加し、出会いと交流のきっかけとする。
- ③ 生きづらさを抱えた若者を理解する試み（講習受講等）
外出できず声を上げることのできない若者等を支える機会の拡充に向け、関わる大人や地域の方が事前に理解を深め、視野を広げる試みが必要。

【提言6】「持続的発展のできる組織づくりを」

若者支援の取組みが持続的に継続し、発展していくために、場の確保や安定した運営体制、若者世代に特有の短期の世代交代を前提とした人材の仕組み、継続的な運営資金の担保が必要不可欠である。

企画や事業の立ち上げ・構築にあたっては、毎日のように若者たちと密なコミュニケーションを行い、スムーズな進行に務めるべきだが、実際そこまでのコミットメントが難しいことも事実。その部分を青少協委員や事務局である区役所などが担う選択肢もあるが、日々の仕事にプラスされることとなるため片手間で進めることも難しい現実がある。一方、この段階から事業者を決め、資金を使い実行・推進していくのも早計であり、その丁度エアポケットになっている部分をサポートできる体制やスキーム構築が重要である。

●具体案

① 協定大学や区内高校との定期インターン制度設置（再掲：提言4-②）

世田谷区内の大学や高校との連携によりインターン枠をつくり、継続的に人材を獲得できる仕組みをつくる。夏休みなど高校生世代から区政や地域活動に参加する機会を後押しする。

② 既存施設の拡張

青少年交流センターや児童館、プレーパークといった施設では、利用者が施設に来ることを待つのみならず、アウトリーチする場・機会を求めていると考えられる。よって、施設に来ない若者にアプローチするための場・機会として学校カフェその他居場所事業の運営にも関わってもらおう。

③ 地域団体との提携

その他、子ども・若者とながりのある団体との協力関係構築が必要。

【提言7】「若者にも伝わる広報・PRを」

届いても読まれていない、伝わっていない現状、良い取組みも知られていない事実がある。

全ては伝わってから価値が生まれるもの。然るべき人に、然るべき方法で深く伝える工夫をすべきである。意見表明・参加・参画の機運醸成のためには、必要な情報に必要なタイミングでアクセスできる情報環境が不可欠である。例えば、若者の投票率向上のために必要な情報が、若者にとって利用しやすい環境で整備されているのか一考の余地がある。

同時に、大人の理解者を増やし、地域の理解を促す広報やPRについても更なる取組みが必要である。

●具体案

① コンテンツをマンガ化する

若者にとってキャッチーなスタイルとして、コンテンツをマンガ化して情報を届ける。若者が描いて対価を支払うなども可能。

② 広報広聴課内に「若者室」を新たに設置

若者と広報広聴課の協働でつくる広報戦略を策定。デジタルネイティブ世代らしくYouTubeなどの動画や各種SNS、WEBについて、若者目線で活用した提案が可能。全体予算を変えずにメディア別に予算を振り分け、より効率的・効果的に訴求が可能となる。先発の「ねつせた!」との協働も視野に入れることが可能。

【提言8】「庁内連携や官民連携をスムーズに構築できる体制を」

若者支援担当課だけが若者に関係している訳ではない。広報広聴課や経営改革・官民連携担当課、経済産業部課、人事課など他の部署課でも若者との接点の可能性は幅広いため、横断的なコミュニケーションが取れる体制づくりが必要。

また、区役所にとって民間企業の持つノウハウや技術資源が魅力的であると同時に、民間企業にとっても、安心感やPRの点から、区役所の施策に自社製品・サービスを取り込んでもらうメリットはあると考える。民間企業とのWin-Win 関係を意識して、魅力を感じてもらえる施策として組み立てることも必要である。

●具体案

① 経済産業部署、官民連携担当部署等と連携した Wi-Fi 環境の整備、官民連携による Wi-Fi ルーターの設置

安全・安心・強力な通信をPRできる場・機会も兼ねて、無料のWi-Fi 設備や充電機器を設置してもらうよう働きかける。

② 区内大学と人事部署との連携による定期インターンシップ制度設置

③ 「若者に関することは若者に意見を聴く」を区役所から

「若者に関することは若者に意見を聴く」をルール化するなど、まずは、若者の意見を聴くことが当たり前となる環境・制度を区役所で実現。若者が必要とする施策や事業の実現に向け各所管が動き出すことで、若者支援担当課を核とした連携体制を構築。

■Ⅳ. 若者の意見表明・参加・参画に関わる指標

平成 29 年-30 年度期子ども・青少年協議会の検討「若者施策の評価・検証と体系化」を受け、今期の検討においては、モデル事業の検討と並行して、試行結果の成果を測るための評価指標の検討を行ってきた。しかし今期後半においては、新型コロナウイルス感染症への対応を余儀なくされたため、当初検討していた事業実施が叶わず、指標をそのまま用いることはなかったが、今後、若者の意見表明・参加・参画の取組みを進めていく際には、指標としてあげた以下の視点をもって進めていただきたい。

(1) 共通の指標

- ① その場で自分の思っていることを表現できたか。
- ② その場の印象が参加する前とした後で変わったか。
具体的にどのように変わったか。
- ③ その場で自分のやりたいことができたか。
- ④ また参加したい、やってみたいと思ったか。
- ⑤ 若者の参加・参画により、社会や大人が変わることができたか。どう変わったか。
- ⑥ 他の地域への拡がりの可能性のある仕組みとなっているか。

(2) 学校での取組みに関わる指標

- ① カフェで自分の思っていることを表現することができたか。
- ② カフェの印象が参加する前とした後で変わったか。→具体的にどのように変わったか。
- ③ カフェで自分のやりたいことができたか。
- ④ カフェにクラスで馴染めない生徒が来ることがあったか。
- ⑤ カフェの運営に携わった地域の人で、顔なじみの方ができたか。
- ⑥ カフェで多世代での意見交換や交流ができるようになったか。
- ⑦ カフェの運営が教職員に負担のかからず、かつ継続運営できる仕組みとなっているか。
- ⑧ カフェでの生徒の様子を教職員にフィードバックできる仕組みとなっているか。
- ⑨ 他の学校への拡がりの可能性のある仕組みとなっているか。

(3) 商店街での取組みに関わる指標

- ① 地域の人・多様な人との交流、信頼できる人との出会いがあったか。
- ② その場の経験が、自己表現につながったか。
- ③ その場の経験が、自分の成長につながったと思うか。
- ④ 働くことの嬉しさ、楽しさを感じられたか。

- ⑤ 商店街を身近に感じたか。

(4) 施策への活用等を目的とし若者の意見を聴く取組みに関わる指標

- ① 若者の指標
- 多様な若者が参加することができたか。
 - 意見を他の参加者や大人に受け止めてもらうことができたか。
 - 社会に働きかけることができること、社会を変える力があることを感じられたか。
 - 課題と思うことについて、積極的（主体的）に働きかけてみようと思ったか。
- ② 大人の指標
- 若者の意見をどう受け止めたか、若者に伝えることができたか。
 - 今後も若者の意見を聴く機会をつくりたいと思ったか。
 - 今後の活動に、若者の視点や意見を活かしていこうと思ったか。
- ③ 若者・大人 共通の指標
- 若者の意見を、地域や施策に活かすことができたか。

世田谷区子ども・青少年協議会

森田 明美 会長からのメッセージ



■ 東日本大震災から 10 年をむかえて

被災地の子ども・若者の成長発達支援に関わって 10 年を迎えました。先日も東北地方に大きな地震があり、今回の地震を経験して家族から聴いていた大地震を初めてイメージし体感した子どもたちがたくさんいました。震災は、被災した地域や体験だけでなく、年齢による違いも含め、今も一人ひとりの子ども・若者の暮らしや生き方に大きく影響しています。

この間、大学生と一緒に東北に向かい、様々な活動をしてきました。先日は、宮城県議会の取組みとして意見交換を続けてきた若者たちが、「自分たちは指導や支援を受けたいのではない。大人には一緒に考えて自分たちが動き出すときにそっと後押してほしい。」と語る場面に立ち合いました。

自分たちが出会い何度も同じ時間を過ごしてきた若者の言葉や意見は、声を聴く大人に明確な実感として届くと同時に、大きな喜びとなります。成長の主体として、若者と大人はお互いに影響しあう存在であること、時間軸を共有する大切さや、声を聴き続けることの大切さを改めて実感するとともに、若者の参加とはどういうものなのかを体感できる機会となりました。

■ 世田谷区子ども・青少年協議会に関わって

平成 21 年度から 10 年間、子ども・青少年協議会に関わってきました。それまで関わられていた学識経験者の方々が任期を終えられたことを受け、引き続き務められていた委員の方々に話を聞きながら始めることとなりました。

当時は、まだ「子ども・子育て会議」が立ち上がっておらず、区議会議員も加わる会議体として、緊張感をもって「世田谷区子ども計画」や「世田谷区子ども条例」、「せたホッと」などにも、世田谷区の子ども施策を補強する組織のひとつとして関わっていきました。

子ども・青少年協議会は「地方青少年問題協議会法」という法律に基づく組織です。世田谷区は会議名「子ども・青少年問題協議会」から「問題」を取り、「子ども・青少年協議会（以下「青少協」）」と名称変更したタイミング（平成26年4月）がありました。ここは、子ども・若者へのスタンスが大きく変わるきっかけとなったタイミングとして記憶しています。

「子ども・若者育成支援推進法」の成立も踏まえ、若者を、地域を共に担うパートナーとしてとらえ、子ども施策を18歳までで終えることなく、若者施策としてつないでいくという大事な政策を担っていると考えています。

青少協には、特筆すべき特徴がいくつかあります。

例えば、

- ◆ 必要な課題には行政的なスケジュール感を前提とせずに早期に取り組むこと
- ◆ モデル事業に取り組む、そこから見えてきた課題を提言にまとめ区全体への汎用を図ること
- ◆ 報告書は委員自らが文章化し作成すること

などです。

いずれも、世代交代のスピードが速い若者世代を対象とするからこそそのルールとして受け継ぎ、その都度の委員の皆さんが実践に結び付けてくださいました。青少協のなかに小委員会を組織し、具体化の議論を任せることで、例えば、烏山で若者の居場所として人気を博し、地域のおとなの皆さんに認められた「オルパ」や、SNSでの情報発信を通してネットワークによる居場所構築を模索し続けている「ねつせた！」などの取り組みが生まれました。行政だけ、区民だけでは難しい、地域と若者、そして区との協働だからこそその成果があったと感じています。

■ これからの世田谷区子ども・青少年協議会に向けて

若者支援担当課が組織され、青少協に当事者として若者委員を位置づけ、専門委員として参加してもらうようになったことも、大きな変化となりました。全国的には、当事者が加わる行政の会議体はまだ多くありませんが、委員にどんな方を迎えるのか、積極的に当事者を加えることは非常に大きな意味を持ちます。世田谷区は先進的な実践を行う自治体として、若者支援を担う意識をこれからも持ち続けてもらいたい、そう思っています。

若者は何が気になり、何に反応し行動するのか、一緒に感じ変化を共有できる存在として、大人の皆さんにもその喜びを味わってもらいたいものです。

地域には、地域をリードする子ども・若者や、それほど多くのサポートを必要とせず家庭の力で育っていく子ども・若者もいれば、いくつもの支援を必要としている子ども・若者もいます。また、若者世代は、考え方、暮らし方、文化など、どんどん変わっていく世代であり、政策化していくことには特別の難しさがあります。彼らが今、何が気になり何をしようとしているのか、何に困り何に怒り、何に喜びを感じているのか。若者世代を捉え、若者世代に視点を定めて、一緒に施策を作り出し、展開していくことが不可欠です。

今期の青少協のテーマ「若者の力が活きる地域」とは、「若者と一緒に変わる地域」と言えるかもしれません。大人と若者が地域を共に担うパートナーとして、支援する／されるといった一方通行ではなく、相互に支えあう関係性を持って地域の良い点も悪い点も共有し、どの世代も住みやすい新しい世田谷を一緒に作り出していけることを願っています。

— 資料編 —

1. 依頼文
2. 資料 1 世田谷区子ども・青少年協議会委員名簿
3. 資料 2 世田谷区子ども・青少年協議会審議の経過
4. 資料 3 令和元年度若者支援シンポジウム資料
5. 資料 4 子ども・青少年協議会臨時会開催日程・内容
6. 資料 5 モデル事業学校チーム校内カフェ視察資料
7. 資料 6 モデル事業商店街チーム資料①【企画案】
8. 資料 7 モデル事業商店街チーム資料②【取組み案一覧】
9. 資料 8 モデル事業商店街チーム下北沢まちの案内所アンケート集計結果
10. 資料 9 モデル事業商店街チームしもきた倶楽部若者の感想
11. 資料 10 モデル事業イベントチーム意見交換会 記録（要旨）
12. 資料 11 事業・用語解説

31世若者第95号

令和元年7月24日

世田谷区子ども・青少年協議会 様

世田谷区長 保坂 展人

地方青少年問題協議会法第2条第1項第1号の規定に基づき、
下記について調査、審議願います。

記

若者の力が活きる地域～意見表明・参加・参画を中心に

世田谷区子ども・青少年協議会委員名簿 (令和3年3月30日現在)

役職	委員構成	氏名	所 属	小委員会	任期	
会長	学識経験者	森田 明美	東洋大学社会学部社会福祉学科教授		令和元年6月1日～ 令和3年5月31日	
副会長	学識経験者	入澤 充	国土館大学大学院法学研究科教授	委員長	令和元年6月1日～ 令和3年5月31日	
委員	区議会議員	石川 ナオミ	自由民主党世田谷区議団		令和元年6月1日～ 令和3年5月31日	
		福田 たえ美	公明党世田谷区議団		令和元年6月1日～ 令和3年5月31日	
		桜井 純子	世田谷立憲民主党社民党		令和元年6月1日～ 令和3年5月31日	
		田中 優子	無所属・世田谷行革 110 番・維新		令和元年6月1日～ 令和3年5月31日	
	学識経験者	林 大介	浦和大学社会学部准教授	副委員長	令和元年6月1日～ 令和3年5月31日	
	区民	森岡 美佳	世田谷区青少年委員会		委員	令和元年6月1日～ 令和3年5月31日
		新橋 千恵子	青少年松沢地区委員会会長			令和元年6月1日～ 令和3年5月31日
		岡部 健一	世田谷区立小学校PTA連合協議会会長			令和元年6月1日～ 令和2年8月23日
		中條 佐和子	世田谷区立小学校PTA連合協議会			令和2年8月24日～ 令和3年5月31日
		志村 ちあき	世田谷区立中学校PTA連合協議会会長			令和元年6月1日～ 令和2年8月23日
		栗花落 久子	世田谷区立中学校PTA連合協議会会長			令和2年8月24日～ 令和3年5月31日
		明石 眞弓	世田谷区民生委員児童委員協議会主任児童委員会部会長		委員	令和元年6月1日～ 令和3年5月31日
		鈴木 法子	公募区民		委員	令和元年6月1日～ 令和3年5月31日
藤原 由佳		公募区民		委員	令和元年6月1日～ 令和3年5月31日	
野口 美恵		公募区民		委員	令和元年6月1日～ 令和元年12月6日	
新井 佑	公募区民		委員	令和2年3月1日～ 令和3年5月31日		
行政庁 職員	岡野 安成	東京都世田谷児童相談所長			令和元年6月1日～ 令和2年3月31日	
	後藤 友幸	渋谷公共職業安定所長			令和元年6月1日～ 令和3年5月31日	
	遠藤 一男	東京保護観察所保護観察官			令和元年6月1日～ 令和3年5月31日	
	土田 聖一	世田谷少年センター所長			令和元年6月1日～ 令和2年9月6日	
	渡邊 明宣	世田谷少年センター所長			令和2年9月7日～ 令和3年5月31日	
専門委員	今村 弥生	杏林大学医学部付属病院精神神経科医師			令和元年6月1日～ 令和3年5月31日	
	廣岡 武明	メルクマールせたがや施設長		委員	令和元年6月1日～ 令和3年5月31日	
	下村 一	公益財団法人児童育成協会 希望丘青少年交流センター長		委員	令和元年6月1日～ 令和3年5月31日	
	篠原 健太郎	特定非営利活動法人ワーカースコープ 東京中央事業本部 世田谷エリアマネージャー		委員	令和元年6月1日～ 令和3年5月31日	
	東 珠希	協定大学(昭和女子大学) 学生		委員	令和元年6月1日～ 令和3年5月31日	
	高野 黎	協定大学(日本大学文理学部) 学生		委員	令和元年6月1日～ 令和3年5月31日	
	中谷 汐里	『情熱せたがや、始めました。』メンバー 大学生		委員	令和元年6月1日～ 令和3年5月31日	

令和元年-2年度期 世田谷区子ども・青少年協議会審議の経過

開催年月日	会場	協議会	小委員会	主な審議内容（予定）
令和元年7月24日（水） 9時30分～11時30分	区議会 大会議室	第1回		・会長、副会長選任 ・委員紹介 ・協議会の進行説明 ・審議議案 ・今後の検討方法等について
令和元年8月28日（水）※1 9時30分～11時30分	野毛青少年 交流センター		第1回	・若者の意見表明・参加・参画の全国の事例、意見交換 ・検討の進め方について
令和元年9月26日（木）※2 14時～16時	メルクマー ルせたがや		第2回	・若者の参加・参画について講演 ・区の目指すべき姿と実現のためのキポイントについて
令和元年11月15日（金） 18時30分～20時30分	国立館大学 会議室		第3回	・モデル事業（案）に向けた意見交換
令和元年12月11日（水） 9時30分～11時30分	区議会 大会議室	第2回		・小委員会の検討状況の報告 ・今後の議論の進め方について
令和2年1月23日（木） 18時～20時	国立館大学 会議室		第4回	・モデル事業実施に向けた検討
令和2年2月17日（月） 14時～16時	国立館大学 会議室		第5回	・モデル事業実施に向けた検討
令和2年3月16日（月） 14時～16時	国立館大学 会議室		第6回	・モデル事業実施に向けた検討
令和2年3月25日（水） 14時～16時	ブライトホ ール	第3回		【中止】 ※新型コロナウイルスの感染拡大に伴い開催中止
令和2年5月8日（金） 9時30分～11時30分	庁議室		第7回	【中止】 ※新型コロナウイルスの感染拡大に伴い開催中止
令和2年6月12日（金） 9時30分～11時30分	庁議室		第8回	・提言に向けたスケジュール見直し ・モデル事業について
令和2年8月5日（水） 9時30分～11時30分	都市整備領域 第1会議室		第9回	・取組みモデルの検討 ・モデル事業実施に向けた検討
令和2年8月31日（月） 9時30分～11時30分	区議会 大会議室	第4回		・検討状況報告 ・報告を受けた議論など
令和2年10月22日（木） 9時30分～11時30分	（オンライン）		第10回	・モデル事業検討・実施状況報告 ・報告書骨子確認
令和2年11月13日（金） 9時30分～11時30分	（オンライン）		第11回	・モデル事業実施・検証報告 ・報告書たたき台について
令和2年12月22日（火） 9時30分～11時30分	ブライトホ ール	第5回		・報告書素案の提出 ・素案を受けた議論など
令和3年1月22日（金） 9時30分～11時30分	池之上青少年会館 音楽室		第12回	・報告書案の検討
令和3年2月26日（金） 9時30分～11時30分	庁議室		第13回	・報告書案の検討
令和3年3月30日（火） 9時30分～11時30分	区議会 大会議室	第6回		・報告書の提出

【関係人の出席】

※1「若者と咲かせるネットワーク・せたがや」中島、近藤、村松、三浦（敬称略、以下同）

※2「生き方工房 nekota」櫻井（区の子ども・若者活動に、当事者として、あるいは少し年長のパートナーとして関わってきた経験がある。）、「若者と咲かせるネットワーク・せたがや」齊藤

若者支援シンポジウム2019 若者が参加しなくなっちゃう地域づくり

- 日 時 令和元年10月27日(日) 13時30分～18時00分
- 場 所 世田谷区立希望丘地域体育館
- 共催・後援 (共催) 若者と咲かせるネットワーク・せたがや、(後援) 世田谷区教育委員会

コーディネーター 林 大介さん コメント

- ・主権者教育が学校に丸投げするのではなく、家庭や地域の中でも取り組む。小さな子どもが自分で決める機会は日常の中で多く存在している。Ex.) 幼児が靴下を選ぶ
- ・子どもも関わる政策は子ども参加で。子ども自身も、一人の住民として参加することで、主権者を意識するとともに、郷土愛も生まれる。
→セレモニー・体験型ではなく、実際に市民である子ども世代の声を行政施策に反映させることが不可欠である。



1部：ゲストリレートーク

生き方工房 necota 櫻井 龍太郎さん

テーマ① 若者と大人の関係性

～若者の意思決定を保障するには～

- ・若者社会的排除
- ・「子どものくせに」「イマドキの若者は」
⇒「子ども・若者らしい」とは？
- ・「若者」と「大人」→対立？パートナー？
- ・「ありのままがいいよ神話」
→発達欲求の否定、阻害
- ・意思決定には時間がかかる
→意思決定する経験があるか？



希望丘青少年交流センター「アップス」下村 一さん

テーマ② 若者の主体の場づくり

- ・「変える」ことの経験→自販機の中身
- ・失敗しないで行ける？
- ・若者と大人の経験の貯金
→言っても良い、聴いてくれる
- ・場面ごとの子ども/若者/大人の
適度な距離
- ・「役立ててる感」の実感
- ・経験の積み重ね



NPO法人フリー・ザ・チルドレン・ジャパン 中島 早苗さん

テーマ③

若者のアクションにつながるきっかけづくり

- ・子どもに関する問題は、子ども自身が関わって解決されるべき
- ・子どもでも社会・世界を変える力がある
- ・「世界を変える」ことは、「自分を変える」こと
- ・Gift+Issue=Change
- ・子どもが安心して参加できる場づくり
- ・変化を起こす力を持っている子どもの芽を伸ばすのは大人の役目



一般社団法人世田谷トラストまちづくり 風間 委文子さん

テーマ④ やわらかい仕組みづくり

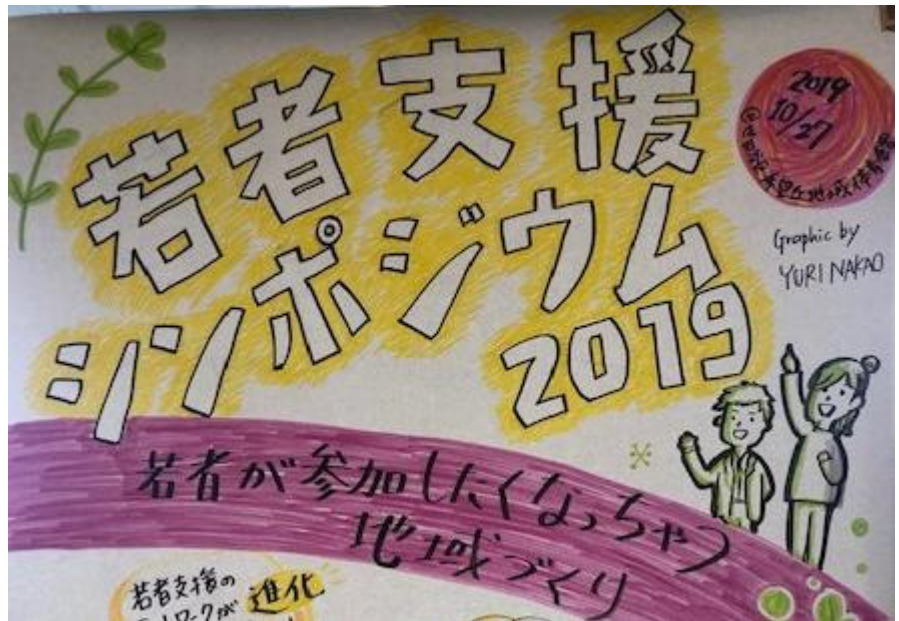
～若者の「やってみよう！」を応援するには～

- ・成果を求めるのではなく、やりたいことが出てきたことに応援できる仕組み
- ・10代まちづくり部門改編のため当事者へのヒアリング→成功も失敗もあり/とりあえず「やってみよう」を応援/
「まちづくり推し」しない
- ・やわらかい仕組みとは？
- ・期待してしまう大人のやわらかさ



※若者と咲かせるネットワーク・せたがや

… 若者の居場所づくりに取り組む団体や個人、地域の方をつなぐネットワーク。2017年設立。



2部：テーマに分かれてグループワーク

A：若者たちを信頼し、
挑戦を応援する大人
を増やす
若者と大人の両者の
信頼の階段

B：青年議会の発足（若
者と大人の協議会）
多様性の保障と、
若者たちに予算を！

D：若者に場づくりを
させてみる
トライ＆エラー
（失敗できる場
の提供）

K：若者の意見を聞く専門家
の育成
子どもの権利について
学ぶ機会を学校内で実
施
自分の意見を押し付け
るのではなく、背中を見
せる

H：周りの目を気にしな
い・小さな声を拾うシ
ステム
学校お休み券の発行
使用していない施設
のシェア

L：学校にしゃべり
場をつくる
（ゲストを呼
ぶ？）

4：目標設定を一緒に考
えてくれる大人の存
在（伴走者）
若者と大人の理解に
差がある

若者支援 シンポジウム 2019



Graphic by YURI NAKAO



若者が参加したくなる地域づくり

若者支援のネットワークが進化
の空の向かい!

子供
若者
50%?

おま
信望
自
健康に
大人!

第1部 リレートーク



林大介さん
首都大学東京 特性教授

若者
主権者

子供の権利条約
出生から18歳

『若者が参加したくなる』

18歳から19歳 30万人@世帯

参加しながら!

18歳成人
賛成
82%

自分の権利を明く希望
自己肯定感
地域への愛着
地域への参加
があるほど高い!

まずは
自分を知ろう

経験の乏し
大人が「うはやない」

思っているか
を言う!

興味
= 面白い
= 嬉しい

だから
少くとも
参加していきな!

インテ
その
やり方も
70.73!

大人の
サポート



若者と大人の関係性

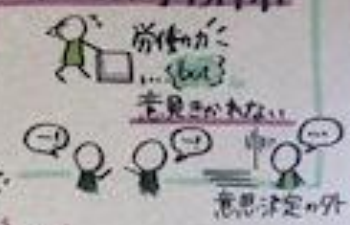
櫻井能太郎

生き方工房 necota
ユースワーカー
上から下まで

すべての若者が
自分の人生の創造主体となり、
豊かに生きていける社会に

中高生の居場所
世田谷で活動しました!
ユース・アクト
世田谷

若者の社会的排除



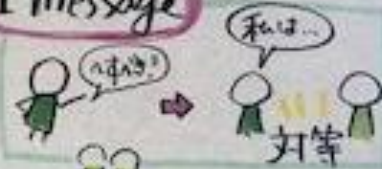
バランス
を見定める

意思決定

保障するは!!

関係性
に注目

I message



なぜ意思決定が大事な
時間がかかるもの



共に
志し 悩み 語り
学び 社会をつくる!!

「ありのままの...」
神話



若者主体の場づくり

下村一さん

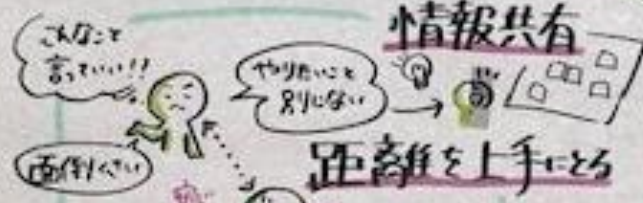
世田谷区立希望丘
青少年交流センター「アップス」



選挙
運営準備者
若者委員会
常に
ユース・アクト
地域委員
地域の人が
関わる = 継続
若者参加

ネットワーク
軽く!

情報共有



距離を上手にとる

信頼貯金



失敗しながら



除く地域人

若者のアクションにつながるきっかけ作り

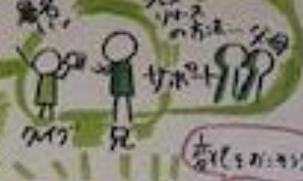


申島早苗
 フォーザ・フッド・レシジョン
 1999
日本ど'START!

当事者
 子どもの問題を解決する!
 子どもの考案の権利

12年の経験
 子どもの世界を変える力がある!!

FREE THE CHILDREN
 同世代の児童労働をなくす!



Gift & Issue = Change!
 子どもの権利

聞く
 待つ
 寄り添う

WE Movement

① 授業
 イベント
 フェア

子どもにだけ力がある!

Brainstorming
 自分から考える

自分から考える

自身が force
 お返しする

聴く + 従う

- 目的・意思決定が必ず明確化
- 子どもの経験・成熟度・心算に合わせた仕度
- 大人/子ども役割の明確化
- 子ども同士の関係性サポート

自分で参加の仕方を学ぶ!!



やわらかいU23組み作り

若者の「やわらかい」を応援するには



風間 亜文子
 世田谷区まちづくり

公益信託
 世田谷まちづくりファンド

公開型
 審査

出会う
 仲間

J-22
 世代別

10代はまちづくり部
 あるじゃん!

1900円
 1000円

まちづくり

若者の
 活動

やわらかく
 いっしょに
 変えられるように

あの日の出来事
 聞いてみた

近にいるけれど背中
 おしてもらうの大事
 事例①U23世代(13)

若者の
 活動

10代はまちづくり部

ワンチーム!!!

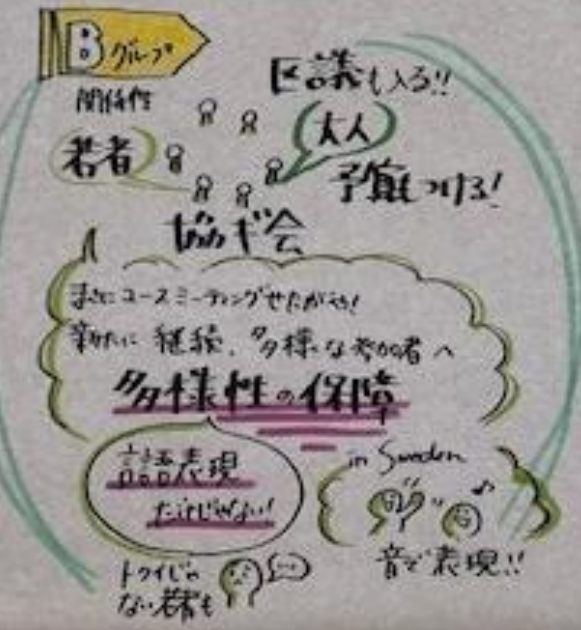
10代はまちづくり部

U23

第2部 グループワーク



オープンディスカッション



Lグループ

子供が大人が作る場所

アクション—犠牲を伴う

同年代

若者

仲間

お金の仲間いない方がうらやましい
何かお手伝いしてきたら

グループ

仲間がいない

若者の時間必す!
使いたい

通訳が必要!!

大人も想いを語る

身の回りで
何が起きているか知る

みんながどう同じ土俵にのり?
大人、理解を育てるのし大事

民間と区?
主権が分からない
世田谷区をモシロイ

自分自身が
どう参加?
大人

参加したい
おちなのか?

子供
若者

頼む
大人も居る!
地域で仲間に作って

林さん

Hグループ

大人になる

やってみよう!

場所の提供

ワクワクします!
対象は??

どの世代も!

場所の提供

いちばんで
大きくなる 実験の場
面白い!!

アットマンを
一緒に作る人
として関わっていく!!

林さん
by まるま

「大人が子供の
目線に合わせて」
は対等じゃない
お互いに

土俵へ

櫻井さん

若者 大人
尊重して
パートナーとして
付き合っていく

中さん

まちだりで
若い人が
チャレンジする機会

あんなに!
と言いつけ
たら

風間さん

Graphic by
YURI NAKAO

子ども・青少年協議会臨時会 開催日程・内容

年月日	チーム	内容	開催場所・開催方法
令和2年6月25日	商店街	しもきた商店街振興組合へのご説明及び協力依頼	北沢タウンホール ミーティングルーム
令和2年6月29日	イベント	区議会議員と若者との意見交換会開催に向けての検討	Zoom
令和2年7月3日	商店街	モデル事業実施にあたっての環境整備・条件整備検討	Zoom
令和2年7月30日	商店街	若者のキーパーソン探し・協力者呼びかけ・環境設定の検討	Zoom
令和2年8月4日	商店街	しもきた商店街振興組合・地域協力者を交えた検討	Zoom
令和2年8月12日	商店街	「下北沢まちの案内所」・「下北線路街空き地」・「ボーナストラック」の視察	下北沢まちの案内所等
令和2年9月1日	商店街	若者、協力者との打ち合わせ。シモキタおやこのまちのつどい市にブースを出店することを決定	北沢タウンホール ミーティングルーム
令和2年9月9日	学校	校内カフェインタビュー	Zoom
令和2年9月15日	商店街	若者、協力者との打ち合わせ。活動する若者の活動団体・活動事業名を「しもきた倶楽部」に決定	北沢タウンホール ミーティングルーム
令和2年9月23日	イベント	イベントのテーマ設定・開催方法等の検討	Zoom
令和2年9月27日	商店街	シモキタおやこのまちのつどい市に「しもきた倶楽部」のブースを出店	下北線路街空き地
令和2年11月1日	イベント	アップスインターン生へのヒアリング	Zoom
令和2年11月5日	学校	「ぴっかりカフェ」の視察、運営NPO法人へのヒアリング	神奈川県立田奈高等学校 「ぴっかりカフェ」
令和2年11月10日	イベント	昭和女子大学生へのヒアリング	Zoom
令和2年11月11日	商店街	若者とともに今後の事業展開を検討	Zoom
令和2年11月30日	商店街	下北沢まちの案内所にてストーブを囲み居場所をオープン	下北沢まちの案内所
令和2年12月3日	イベント	「あいりす」利用者へのヒアリング	あいりす・Zoom
令和2年12月7日	商店街	ふりかえり・今後の展開を検討	Zoom
令和3年1月6日	商店街	下北沢まちの案内所にてアンケート調査実施	下北沢まちの案内所

モデル事業 学校チーム 校内カフェ視察資料

■ 西東京市立中学校「西東京子ども放課後カフェ」ヒアリング記録

○日時

令和2年9月9日（水）10時～12時

○場所

オンラインによる

○視察者

世田谷区子ども・青少年協議会委員（所属）

- ・林 大介（浦和大学社会学部准教授）
- ・森岡 美佳（世田谷区青少年委員会元会長）
- ・下村 一（公益財団法人児童育成協会 希望丘青少年交流センター長）
- ・廣岡 武明（世田谷若者総合支援センター「メルクマールせたがや」施設長）
- ・東 珠希（協定大学（昭和女子大学）学生）
- ・高野 黎（協定大学（日本大学文理学部）学生）

世田谷区子ども・若者部若者支援担当課職員（役職）

- ・猪股 和美（若者支援担当係長）
- ・鈴木 岳彦（若者支援担当主任）

○ヒアリング相手方

（運営団体）西東京子ども放課後カフェ 古林氏、西原氏、卯野氏、大野氏

○当日のスケジュール

10:00～ 運営団体ヒアリング

○主な質問・回答内容

No.	質問内容
1	<p>放課後カフェに関する基本事項について教えてください。</p> <p>➤ 別紙のとおり</p> <p>※西東京市生活文化スポーツ部協働コミュニティ課市民活動推進係からの補足</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成27年（2015年）、田無第一中学校で開始 ・現在、西東京市立中学校9校中7校で実施されている。 ・中学生の放課後の居場所づくりが目的 ・平成27年西東京市市民協働推進センターゆめこらぼ主催「まちづくり円卓会議」がきっかけ
2	<p>放課後カフェを実現された際の背景や契機をあらためて教えてください。例えば、中学生の居場所がない、地域や多世代との交流の機会に乏しいといったことは、多くの自治体であるが、なぜ、西東京市では、このような場が実現し、広がりえたのか、原動力は何だったのか、お考えになるところを教えてください。</p>

No.	質問内容
3	<p>当区でも実現にあたって壁の一つは、教育委員会事務局や各中学校との調整ですが、カフェのメリット（生徒たちへの好影響）とデメリット（事務局職員や先生方の繁忙）をどのようにご説明し、理解を得たのでしょうか。</p>
4	<p>放課後カフェで羨ましい点の一つに、一つの中学校で始まった取組みが自然発生的に他の中学校に広がっていることです。この点について、何かポイント、秘訣があれば教えてください。また、ノウハウや体験を分かち合うとされる「放課後カフェのつどい」について、実施内容を教えてください（研修の意味合いもあるのでしょうか）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ 直接のきっかけは、小金井市の緑中カフェを見学したこと。そこから、1か所目の第1中でのカフェ開設までは時間がかかったが、社協や育成会とも相談し計画書をもって学校側(校長)と交渉した。 ➤ 市民協働推進センターゆめこらぼ主催のまちづくり円卓会議にメンバーとして参加した。その際、市内中学生の虐待からの自死がマスコミにも取り上げられていたことを受け、中学生に対してできることがないかと議論があり、直接的には難しくてもカフェという形式で関わることは可能ではとの思いが共通した。 ➤ 西原さんが積み上げてきたネットワークや学校からの信頼感が大きく、2校目、3校目とつながっていった。 ➤ せっかくだから各校につくれたらと広がったが、地域ごとの特性や学校のカラーもあり母体やメンバーが異なる今の形態となった。 ➤ 連絡会をつくったこともポイントとなった。講演会開催や、市の協働事業への申請等につながっていった。 ➤ 市からトップダウンで統一的な方法が示されていたら、役割を任せられた担い手は「仕事が増えた」と感じ、生徒が楽しめない活動になっていたかもしれない。現在の「地域ごとに主体がバラバラ」な方法には意味があるのではないか。 ➤ 教育委員会や市は認めてくれてはいるが、実際に行政として動くところまでは至っていない。また、目標の全校開設にはまだ至っていない。 <p>※西東京市生活文化スポーツ部協働コミュニティ課市民活動推進係からの補足</p> <ul style="list-style-type: none"> ・西東京市市民協働推進センターゆめこらぼが実施している「まちづくり円卓会議」は、市内の課題解決が望まれるタイムリーなテーマについて多様な関係者により話し合いを行うというものです。平成26～27年度は「子どもの声に向き合うために～今私たちにできること～」をテーマとして、これまで一緒に話し合う機会のなかった活動分野の違う方々（育成会、NPO、児童委員、事業者等）が一堂に会し、話し合う機会とすることが出来ました。立場の違いを超え、地域の様々な方々がつながりを持ったことで、地域の課題解決のきっかけになったのではないかと感じています。
5	<p>運営には、民生・児童委員、青少年育成会、社会福祉協議会、ほっとネット推進員、PTA、保護司の方々が関わっているとのことですが、ボランティアな形で集まっていらっしゃるのでしょうか（当番等は？）。そのために、継続的で、広がりのある運営に向けて、自発的な担い手や後継の育成等を意識的にされていますか。また、マニュアルや手引きのようなものはあるのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ 市との協働で、関わる方を増やすことを目的に講演会を開催し、意義を伝えている。 ➤ マニュアルや手引きは各カフェで作成している。 ➤ その他、社協から「子どもに関わりたい」という希望の方を推薦してもらいスタッフとなった例がある。

No.	質問内容
6 7	<p>放課後カフェを運営する上で、最も大切にしていることは何でしょうか。</p> <p>どのような大人が放課後カフェ運営に向いていますか。また、生徒から求められているとお考えですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ 昨年のスタッフ研修では育て上げネットの井村さんに講演を依頼し、「なんのために活動しているのか」をスタッフが共通理解することができた。その都度の再確認は必要と感じた。過去には、ぴっかりカフェの石井さんに講師に来てもらったこともある。 ➤ 学校でも家でも、街中で集まっても、指導される立場にいる中学生にとっては、指導されない場が必要であり、そういった場で自然にリラックスできるようにいられる大人が必要。 ➤ 話しかけてほしい生徒もほしくない生徒もいるのだから、対応が違って、いろいろな大人がいることが大切なのでは。 ➤ 何かをしてあげる、してもらおうという関係性ではなく、人として1対1の関係づくり。すぐに出来るものではなく、「土を耕す」という感覚でやっている。
8	<p>放課後カフェ運営の大人たちと子どもたちがどのような形で関わりを持っていますか（カフェにおいてのみ、カフェ以外、カフェのことにのみ、カフェのこと以外）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ 中学校の近くの地域に出かけると、多くの生徒から挨拶されるようになり、カフェの人として認識されている様子がある。 ➤ 不登校の生徒に「カフェのおばちゃん」として覚えられ関わりをもてたことがあった。 ➤ 育成会のイベントに誘うこともあるが、中学生はお手伝いとしてあてにされがち。中学生はまだまだ与えられたい年頃と思って接している。
9	<p>放課後カフェで提供しているもののラインナップを教えてください。食事や軽食となるものもあるのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ 飲み物の基本メニューは、カルピス、ドリップコーヒー、麦茶、スポーツ飲料、（冬場は）ココアやミルクティー。 ➤ 甘いものは不可（2校）、コーヒーは嗜好品のため不可、という学校がある。 ➤ 食べ物は全校不可、食中毒やアレルギー等ハードルが高いようだ。 ➤ コーヒーの牛乳等はアレルギーを表示して対応している。 ➤ コーヒーは、男性がスタッフとして入るときに「マスター」役として中学生に関わる際のツールになっている側面がある。 ➤ 甘い飲み物を不可などの学校ルールに初めは気落ちしたが、初めから無い分には生徒には影響しなかった。校内で飲み物を飲み、友人と会えることで、非日常感を味わえるようだ。
10	<p>初めて放課後カフェを開設した時の反響はいかがだったでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ 試行を経て、詳細な報告書を作成し、継続に向けた交渉を続けるなど、時間をかけて開設に至った経緯がある。社協とも相談しながら校長と直接進めたため、先生方は初めは遠巻きに見ていた様子があった。今は先生も来てくれている。（1中） ➤ 初めは物珍しさで参加が多かった。

No.	質問内容
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 校長の判断で、生徒にもっと本に触れさせたいと図書室での開設となった。(青嵐) ➤ 立ち上げ時からポスターの作製や掲示などに一部の生徒が関わっていた。(4中)
11	<p>放課後カフェが生徒から特に注目を得たような事やきっかけがありましたら、教えてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ 「感想ノート」を用意し生徒が自由記述できるように置いたり、アンケートを取るなどしている。(1中) ➤ 後発だったため、前例を参考に開設できた。先生の了解を得て、生徒とポスターを作り掲示した。 ➤ 調理室が1階だったため、生徒の目に入りやすかった。(4中) ➤ 中学生は忙しく、気まぐれな面もあり、帰宅や部活前のわずかな時間に来てくれる生徒もいるため、目が付きやすく立ち寄りやすいというロケーションは重要。
12	<p>どのような生徒が放課後カフェを利用していますか（学年、男女比、中学校ごとの特性、生徒の属性や背景等）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ 1学期初回は参加人数が多いが、その後落ち着いてくる傾向がある。 ➤ 男女比は平均すると半々だが、参加者の傾向はその都度違う。 ➤ 支援級の生徒が先生と参加することもある。 ➤ 交流は学年ごとが多いが、クラスを超えての交流が楽しいようだ。(一中) ➤ 図書室で開室するため、部活が休みで読書したい生徒や飲み物だけ飲んで部活に行く生徒もいる。 ➤ 勉強やおしゃべり、スタッフとの交流が主な目的。 ➤ 特別支援級の生徒は、小学校までは一緒だった生徒と久しぶりの交流になっていた。 ➤ 西東京市は他のクラスに入ってはいけないルールがあり、クラスを超えたたまり場として活用している。 ➤ いったんゲームやけん玉などの遊びが始まると、学年を超えた交流も始まっている。(青嵐) ➤ 普通の教室が会場。ボードゲームやおしゃべりを目的とする生徒が多い。 ➤ 曜日を分けて開室し、部活によって参加が偏らないよう配慮している。(ひばり) ➤ 曜日には配慮して開室している。 ➤ 2学期からは3年生の参加は減る。(四中) ➤ 実施回数が多く、またスタッフに地域で長くかかわっているメンバーの存在があるため、勉強のサポートや相談など、多様なかわりが生まれている。(やぎ)
13	<p>放課後カフェは、特にどのような生徒にとって価値あるものとなっていますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ ひとりで来ても楽しめる場所でありたいが、混雑していると騒がしく落ち着ける雰囲気にはなかなかならない。 ➤ 日々忙しく、どこでも指導の目にさらされている中学生にとっては、校内にホッとできる場があるだけで価値がある、居場所を必要としている子はいると考えている。 ➤ 民生委員が関わっていることで、支援や配慮のいる子の存在が見えることがある。家には居場所のない子が毎回来ていることが分かったことがあり、ひとりで来て漫画を読んでいるだけだが、その生徒にとって居場所になっていたようだ。 ➤ 明るく元気な生徒だけでなく内向的な生徒にも来てもらいたい思いは持っている。いつか利用されるよう細く長く続けていきたい。

No.	質問内容
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 1回あたりの開設時間は、2～2時間半。1中は長くても1時間半。
14	<p>同じ生徒がリピートすることを想定して運営されていますか。それとも1回の利用だけでも意義のあるものとなっているのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ 週1回開室しているやぎカフェは、開催の継続によりコミュニケーションを重ねやすいのでは。親密度は高いと感じる。 ➤ 学校に苦手を感じている生徒が、カフェのある日に登校が少しでも楽しみに感じてくれたらよい。
15	<p>生徒たちがカフェの運営スタッフとなることもあるのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ ポスター制作等で初期よりかわりはあった。(4中) ➤ 片付けやイス運びを手伝ってもらうことはある。(1中) ➤ 授業が延びて準備が遅れた場合等に先生が設営を手伝ってくれることがある。(青嵐)
16	<p>放課後カフェに関して、生徒たちからどのような感想や意見、要望等の声が挙がっていますか（人気のある取り組みや飲み物、食べ物等がありますか）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ 西東京市が学校を通じて取ったアンケートがあるので、参照してもらいたい。 ➤ 西東京市のアンケートでは、良いところ、悪いところの両方の項目に「うるさい/にぎやか」「先生が来ることがある」「大人が話しかけてくる/話しかけてこない」といった回答があり興味深かった。一面的でなく、いろいろな生徒がいることがわかった。 ➤ 感想ノートに、「明日カフェがあると思うと学校に行くのが楽しみ」と記載されていたことがあった。 ➤ 学校では不可となっているが、サイダーやコーラ等炭酸系の飲み物の要望が一番多い。
17	<p>運営していると、様々な背景や問題を抱えた生徒もいるかと思いますが、どのように対応されていますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ たまたま違う制服を着ている生徒がいると転校生とわかり、スタッフがさりげなく話しかけ話し相手になることもある。 ➤ 養護教諭から生徒の背景についての話を聴くことはあるが、皆同じ制服で不定期の参加では個別のフォローまでは難しい。 ➤ ケースの子の保護者がスタッフとして入ることがあり、その様子を民生委員が見に来たことがあった。 ➤ 興奮しやすい特徴の生徒にはスタッフがそっとフォローに入ったり、室内でトラブルがあれば先生にその場で連絡し対応をお願いしたりするなどその都度対応している。 ➤ どんな生徒に対しても変わらない対応をすることが大切と考えている。
18	<p>児童センター（児童館）やプレーパーク、公民館等、他の子ども・若者関係施設との協働するようなことはあるのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ 下保谷児童センターでは、協働で「おにぎりカフェ」を開設している。

No.	質問内容
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ (ひばり)ひばり児童センターの職員が受付に入ることがあり、生徒に人気がある。センターの移転の予定もあり、積極的に関わってくれている。 ➤ いろいろな機関との協働は今後の課題である。
19	<p>放課後カフェを実施されて、生徒、スタッフ、学校それぞれにどのような影響や効果があったでしょうか（あればデメリット面を含めて）。また、象徴的、印象的なエピソード等あれば、教えてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ 先生が「本校の生徒は挨拶できない」とこぼしていたが、スタッフには皆挨拶していたため先生に伝え、先生の生徒への評価が上がったことがあった。
20	<p>現在のコロナ禍の状況で、放課後カフェの運営において、課題や障害として挙げられることはありますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ 小金井市の緑中のカフェは、マイボトル持参で10月頃から再開すると聞いている。 ➤ 連絡会で「現在の状況でも何かできることがあるのでは」と話し合ったことを受け、学校に相談したところ、消毒ボランティアや学習支援、職業体験の代替に仕事の話をしてくれる大人の紹介などの希望があり、できることから関わりを継続している。(1中) ➤ コロナ禍でも地域や学校との関係を切らないよう取組んでいる。 ➤ 週何日か学習支援で入ることになった。(やぎ) ➤ 飲み物の在庫があったため子ども家庭支援センターに寄付し家庭訪問時に活用してもらうことができた。 ➤ ゲームや漫画を用意し、飲み物はマイボトル持参で実施する方法もあると思う。
21	<p>コロナ禍以外で、今後の課題や展望等がありましたら、教えてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ 市との協働事業が3年目となり本来であれば最後の1年、今後も継続できるよう市や学校と関係を深めていきたい。 ➤ 西東京市の事業として受託しているのではない今の形では、担い手や管理職の交代で途切れる可能性がある。どう継続していくかが課題であり展望。協働を深め、持続可能な活動にしていきたい。
22	<p>運営経費について、1回開催あたり、どのくらいかかるのでしょうか。また、開催以外でかかる経費と合わせて、年間どのくらいかかりますか。</p> <p>23 運営経費について、西東京市NPO等企画提案事業（補助上限20万円、最長3年間？）を活用されているかと思いますが、差し支えなければ、金額を教えてください。また、その他の収入がありましたら、教えてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ 各カフェ1回あたり5,000円程度は必要。実施回数が多いカフェは市の助成では足りず、別の助成金や寄付等個別に対応している。 <p>協働コミュニティ課：【補助金交付金額】 平成30年度（195,400円）、令和元平成31年度（200,000円）</p>

No.	質問内容
他	<p data-bbox="209 241 1050 275">行政や教育委員会には何を求めるか？何があればより活動し易いか？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li data-bbox="209 327 1457 443">➤ 運営マニュアルやパッケージ化は、統一的につくろうとすると、リスク回避が優先され多様性がなくなりやすい。それぞれの地域で交渉しすり合せしていくと、地域や学校ごとにそれぞれのルールができ上っていく。 <li data-bbox="209 454 1401 488">➤ 社協の活動のフードドライブで飲み物を定期的に分けてもらうことがあり、その支援は助かっている。 <li data-bbox="209 499 1177 533">➤ 資金は必要になるため、市民活動としての保障があると試行錯誤が可能となる。 <li data-bbox="209 544 1457 611">➤ 行政は食材に予算がつけにくいと聞いている。協働事業でも食材費の費目がなく、その他の扱いとしている。
他	<p data-bbox="209 669 1377 703">学校の理解が大切と分かったが、開設がまだの学校もある。学校の反応や理解の感触はどうか？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li data-bbox="209 754 1457 822">➤ すでに学習支援などの実践例がある学校に「もうこういった活動があるので…」と言われてしまい進んでいないのが実情である。 <li data-bbox="209 833 826 866">➤ 地域の人へのバッティングなどの配慮もあるようだ。 <li data-bbox="209 878 1457 945">➤ 校長会等での反応として、すでに開設した学校では「(管理職としては)メリットもデメリットもさほどない」といった感触だったとの話を聞いている。
他	<p data-bbox="209 1012 432 1046">その他情報提供等</p> <ul style="list-style-type: none"> <li data-bbox="209 1097 1457 1164">➤ 世田谷区で実施するのであれば、1校目をテストケースとして委託等ではじめ、生徒や保護者、地域の反応を踏まえて広げていくこともできるのではないかな。 <li data-bbox="209 1176 1457 1243">➤ 市との協働事業3年目となり、アンケート聴取や調査まとめなど、行政と活動する中で勉強となったこともある。 <li data-bbox="209 1254 1457 1321">➤ 11月に島根の方々に呼ばれ、ぴっかりカフェの石井さんとお話する機会がある。よろしければご参加ください。 <li data-bbox="209 1332 1166 1366">➤ 試行時の報告やアンケート結果、研修資料等、提供できるようにさがしておく。

【別紙】西東京子ども放課後カフェ 基本事項

	田無第一 中学校	ひばりが丘 中学校	青嵐中学校	柳沢中学校	田無第三 中学校	田無第四 中学校	保谷中学校
	放課後 カフェ	ひばり カフェ	せいらん ブックカ フェ	やぎカフェ	サンカフェ	たなよん カフェ	セブンティ カフェ
実施場所	調理室	視聴覚室 (1階)	図書室 (1階)	調理室	第2音楽室	調理室	調理室
実施回数	年6回 (昨年 度は4回) (学期2回)	年5回	年8回	年33回	年3~4回	年3回 (学期に1 回)	年3回
スタッフ数 /1回	10~15人	10人	14人	4~5人	7~8人	20人	10人
利用生徒数 (延べ)	654人	675人	1,309人	2,535人	243人	150人	22人
利用生徒数 /1回	70~200人	平均150人	150人	60人	75人	70~80人	100人前後
開室時間/回	1時間半程度	2時間~ 2時間半					

■ 神奈川県立田奈高等学校「びっくりカフェ」視察記録

○日時

令和2年11月5日（木）13時～16時30分

○場所

神奈川県立田奈高等学校図書館（横浜市青葉区桂台2-39-2）

○視察者

世田谷区子ども・青少年協議会委員（所属）

- ・森岡 美佳（世田谷区青少年委員会元会長）
- ・廣岡 武明（世田谷若者総合支援センター「メルクマールせたがや」施設長）
- ・東 珠希（協定大学（昭和女子大学）学生）
- ・高野 黎（協定大学（日本大学文理学部）学生）

世田谷区子ども・若者部若者支援担当課職員（役職）

- ・望月 美貴（若者支援担当課長）
- ・猪股 和美（若者支援担当係長）
- ・鈴木 岳彦（若者支援担当主任）

○ヒアリング相手方

（運営団体）特定非営利活動法人パノラマ代表理事 石井正宏氏、同職員 小川杏子氏

○当日のスケジュール

13:00～ 運営団体ヒアリング

14:30～ 「びっくりカフェ」開店、運営体験

16:00 「びっくりカフェ」閉店

～16:30 片付け

○主な質問内容

No.	質問内容
1	<p>実施回数、運営スタッフ人数、利用する生徒の数、学年、男女比、属性や背景等、カフェに関する基本事項について教えてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・開催は木曜日で、夏休み等長期休暇を除いた年間35回程度開催。カフェ後に振り返りを実施。 ・石井さんと小川さんが常勤スタッフとして、人件費が生じている。 ・ボランティアは約200人の登録があり、常時8人くらいが参加してくれている。レギュラーボランティアは5～6人ほど。毎回2～3人は初めての方が参加する。生徒は、初めての参加者と話すことを楽しみにしており、レギュラーの同じメンバーのみでの開催が続くと、「飽きた、新しい人は来ないのか？」と言われることもある。 ・カフェでは、リユースカップを使っているが、カフェ終了後、その洗い物を手伝ってくれる生徒もおり、その最中に様々な話が出てくる。 ・年度や学年、担任教諭によって、生徒の参加の度合いが変わってくる。男女比は半々くらい。クラスや学年を超えてコミュニケーションが生まれるかは、学校の雰囲気による。 ・カフェの時間帯で、昼休みはお腹を空かせた生徒が食べ物目当てでやってくる。放課後は、比較的話をしたい、聞いてもらいたいという生徒がやってくる。

No.	質問内容
	<ul style="list-style-type: none"> ・放課後は16時で閉めているが、時間きっかりで閉めるのではなく、ゆっくりと帰宅を促す形を取っているので、そのロスタイムのような時間帯に、相談ごとや悩みごとの吐露のような何かが起きることがある。時間で閉めないことが大事。 ・もう一方の大和東高校「ボーダーカフェ」は1時間30分の開店時間。
2	<p>カフェを実現された際の背景や契機を教えてください。高校生の居場所がない、地域や多世代との交流の機会に乏しいといったことは、多くの自治体や高校であるかと思いますが、なぜ、このような場が実現したのか、原動力は何だったのか、お考えになるところがありましたら教えてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多様な生徒に対応するにあたり、教育的視点のみならず、福祉的な視点もないと、生徒が抱える問題に対応できないというところから始まった。 ・先生方だけでは対応できず、外部の支援がないと回らないということで、カフェ立上げ時の校長先生が市長部局のヘルプを出した。 ・ぴっかりカフェは、教育委員会とは切り離され、校長権限により、独立して運営されている。 ・一方、石井さんはひきこもりの若者支援や相談業務に取組んでおり、つまり前回の予防型支援が必要ということで、不特定多数が出入りできる居場所として、図書室でのカフェを実施することになった。 ・当時の学校司書の協力的な姿勢の影響も大きい。 ・「ぴっかりカフェ」のような居場所が偶然や奇跡で終わらないように継続していくことが重要。 ・「ぴっかりカフェ」を始めて7～8年経つが、一つの意味合いとして、生徒が言語化できていないことや言語化されていない問題等を言語化していくということがある。
3	<p>カフェを運営する上で、大事にしているポイントは何でしょうか（場所の選定や内装といった場づくりの工夫、若者たちと関わる上で心がけていること等）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・田奈高校の場合は図書館ありきで始まっているカフェで、大和東高校は多目的室で行っている。 ・条件として、飲食物やカフェ備品が保管できる冷蔵庫やバックヤードが必要。 ・カフェ開設前は、本を読む場所ではなく、遊戯王のカードゲーム場のようになっており、来室する生徒も少なかった。 ・ポイントとしては、カフェだからと言って、おもてなさないこと、お客さんにしないということ。生徒と一緒にカフェ、居場所をつくっていくイメージ ・また、学校だからと言って、指導する姿勢ではなく、支援をするという姿勢で取組んでいる。 ・本棚天板との間に布をかけたり、通路にマットを敷いたりする等、意識して死角を作っている。
4	<p>運営スタッフの方々はボランティアな形で集まっていられるのでしょうか（当番等は?）。また、継続的な運営に向けて、自発的な担い手や後継の育成・研修、マニュアル・手引き等、どのような工夫をされていますでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアは、経常的に関わってくれるレギュラーボランティアが多い。 ・ボランティア同士も仲がよく、自然に手伝いに来たくなるようなカフェであることに価値があると思っている。 ・ボランティアにとっても、「ぴっかりカフェ」がコミュニティ、サードプレイスとなっており、SNSでもつながっている。

No.	質問内容
	<ul style="list-style-type: none"> ・核となるボランティアが Facebook で発信することで、同好の士が集まる。 ・結果として、ボランティアがボランティアを呼び込んでくるような場となるのが理想。 ・登録ボランティアを約200人いるが、タイムツリーというツールを使って、各開催日早いものがちで参加者が決まっていく。タイムツリーは学校司書が管理している。 ・また、石井さんが居場所に関わる講演の中で、ボランティアを呼び込むこともある。 ・マニュアル・手引き等はなく、育成・研修は、OJTで行っており、NPO的な人材育成かもしれない。
5	<p>どのような大人がカフェ運営に向いており、生徒から求められているとお考えでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己実現を果たした、社会的に成功した人だけではなく、無職の人や何をやっているのか分からない人、だらしない大人の男性のように多様な大人がいることが重要。 ・ただし、運営者が少人数のため、ボランティア希望者には最低限のITリテラシーを持っていて、SNSやタイムツリーを扱える人でないと、マネジメントができない。 ・学校側には、前日までに「ぴっかりカフェ」の参加ボランティアの一覧を提出している。ただ、学校側は、運営者NPOパノラマへの信頼感から、逐一確認している風はない。パノラマが参加ボランティアの人となりを判断し、その判断を学校側に信頼してもらっている。 ・ボランティアとして希望してくる者の中には、「ぴっかりカフェ」を出会いの場のように捉えているのか、何かを生徒に配っているようなことも見かける。そのような不審な行動は、レギュラーボランティアが主体的に運営者へ報告してくれる等、見守りをしてきている(名付けて「ぴっかりポリス」)。 ・ボランティア登録をするには、ボランティア養成講座を受講してもらおうが、副校長先生にも参加してもらっており、ボランティアの質の担保としている。 ・養成講座の中では、ボランティアに向いていない人として、「絡みたがり屋」「教えたがり屋」「知りたがり屋」の3たがり屋がある。「ぴっかりカフェ」の中では、指導はしてほしくないと考えている。 ・「ぴっかりカフェ」について、先生が全員賛成というわけではなく、反対派も無関心派もいる。 ・教室に入れない生徒がカフェに来ている。 ・大和東高校「ボーダーカフェ」のボランティアは、社会福祉協議経由の高齢者が多い。
6	<p>カフェ運営の大人たちと生徒がどのような形で関わりを持っていますか（カフェにおいてのみ、カフェ以外、カフェのこのことのみ、カフェのこと以外）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基本的にカフェのことで関わりをもっているが、学校外では、青葉区音楽フェスに生徒と一緒に参加したり、フェアトレードショーで生徒がランウェイを歩いたりといったイベントへの参加実績がある。 ・田奈高校のある青葉区は、裕福な地域として位置づけられる一方で、田奈高校は、貧困や外国からのルーツ等、様々な背景や問題を抱えた生徒が在籍していることから、地域から差別的な視線で見られることもある。 ・学校外イベントでは、「ぴっかりカフェ」に地域の方がボランティアとして参加することによる信頼という貯金を学校の外で使うというイメージ。よって、地域からの信頼を得ることを考えると、ボランティアは地域の方が望ましい。 ・パノラマでは、地域の企業に3日受け入れてもらい、問題なければアルバイトとして、ひいては就労へとつなげる「バイターン」という取組みも行っている。 ・入学した1年生向けのオリエンテーションが1時間ある中で、10～15分程度時間をもらい、「ぴっかりカフ

No.	質問内容
	<p>エ」や相談業務についてPRしている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーションでは、「ぴっかりカフェ」主催者の顔を売ることに主眼を置き、臨床心理士であるといった専門性よりも、学校内の先生以外の人として、顔を見たことがあるという関係性を重視している。 ・生徒は、学費として、図書購入費等も払っているのので、積極的に「ぴっかりカフェ」を利用してもらえればと思っている。
7	<p>カフェで提供しているもののラインナップを教えてください。また、生徒たちから希望があるが、提供することが難しいメニューはありますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みそ汁は人気がある。 ・貧困家庭の生徒は、お腹を空かせていることもあるし、食べ物・食事は、文化資本でもあるので、季節のものや食べたことのないものを体験してもらうことも重要。 ・体験により、文化資本が蓄積されないと住む世界が違うということになってしまう。 ・例えば、瓶のラムネ1つ取っても、栓の開け方や、ビー玉で飲み口が閉じないように飲む方法は、体験しないと分からない。
8	<p>初めてカフェを開設した時の反響はいかがだったでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初に開設した時は、先生も含め、95人の来場があった。 ・「ぴっかりカフェ」では、通常の相談業務を行っている中では、出会えなかった生徒たちに出会うことができる。 ・お腹を空かせている生徒にとって食べ物・飲み物の提供は大事だし、飲み物がないと生徒の滞在時間が短くなる。 ・室内意匠は、黄色に塗装されているが、当時の学校司書等が作業した。 ・窓から光が差し込んでいる図書室の風景から「ぴっかりカフェ」と名付けられた。
9	<p>カフェで会話をする以外に、どのような過ごし方がされていますか（例、勉強を教え合う、ミニコンサート等）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クリスマスパーティーやダンスパーティーを開催した実績あり。 ・クリスマスパーティーでの弾き語りは、生徒がつくった詞に石井さんが曲を付けて披露したが、その生徒にとっては、思い出のみならず、体験が文化資本として蓄積されたのではないかと思っている。
10	<p>生徒たちがカフェの運営スタッフとなることもあるのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・卒業生が運営側になることは普通にあるし、パノラマとしても卒業していった生徒の近況を知り、必要によって支援することができる。 ・ボランティアとして運営側に回ることにはあるが、今のところ雇用の実績はない。が、雇用しないというわけではない。
11	<p>カフェに関して、生徒たちからどのような感想や意見、要望等の声が挙がっていますか（人気のある</p>

No.	質問内容
	<p>取組みや飲み物、食べ物等がありますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Wi-Fi 環境 ・食べたいもの、飲みたいもののリクエストはよくある。みそ汁を5杯飲んだ生徒もいる。 ・以前、LGBT(トランスジェンダー)の生徒が、LGBTのことを知ってもらうため、みんなの前でスピーチをしたことがある。 ・レギュラーボランティアで、着物を着て参加する女性があり、その方の着付けのもと、浴衣パーティーをしたことがあるが、今年度はコロナ禍でできなかった。
12	<p>運営していると、様々な背景や問題を抱えた生徒もいるかと思いますが、どのように対応されていますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カフェを運営する中で、ボランティアが生徒の悩みごとや課題を発見し、運営側で共有し、学校へ伝える、という形。 ・生徒の悩みごとや困りごとについては、カフェで話してもらうことで、生徒にとって緩いガス抜きと考えている。カフェでは、構えずに生徒に接して問題を発見する。その解決は別。 ・案件をリスト化する等のケース管理は、カフェではしていない。石井さん、小川さんがメモ程度で把握するのみ。 ・発見された問題については、月2回の相談事業の中で対応しており、保護者と話し合うこともある。
13	<p>カフェを実施されて、生徒、スタッフ、学校それぞれにどのような影響や効果があったでしょうか(あればデメリット面を含めて)。また、カフェが生徒から、特に注目を得たような事やきっかけ、印象的なエピソード等あれば、教えてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最近も共同通信の取材があったが、取材・視察の数は多い。 ・卒業生とのつながりはあり、卒業後に大変な支援が多い。 ・石井さんは11年、若者支援に携わっている。
14	<p>現在のコロナ禍の状況で、カフェの運営において、課題や障害として挙げられることはありますか。また、コロナ禍以外で、今後の課題や展望等がありましたら、教えてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カフェ運営ができなかった期間中、カフェサミットをYouTubeで行った。 ・歌を歌うことについても、文化資本のシェアとして行っているのでも、大声を出すことが禁止されたのは厳しかった。 ・コロナ禍においては、学校の中の居場所機能が弱まっていると感じている。
15	<p>教育委員会事務局や学校との調整は、どのように進めていますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・神奈川県教育委員会は協力的ではないと感じている。
16	<p>運営経費について、1回開催あたり、どのくらいかかるのでしょうか。また、開催以外でかかる経費</p>

No.	質問内容
	<p>と合わせて、年間どのくらいかかりますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年間約200万円の経費がかかり、ほぼ人件費。 ・食材はフードロスで提供されるものも活用している。 ・民間の助成金には、様々エントリーするが、採択されないことが多々ある。 ・カフェの成果として、明瞭に表れるものでなく、卒業後18歳を超えてから表れることもあるので、事業の効果にしても、助成金を取るにしても、外部への成果の見せ方は課題と考えている。
17	<p>行政が運営に関わる場合、このようなことはやってはいけない、してほしくないということはありませんか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カフェ運営は、学校のヒエラルキー構造から外れた立ち位置で行っているため、運営の自由度を奪われると厳しい。フリーハンドでやらせてほしい。 ・今後、世田谷区で学校内居場所カフェを実現するにあたっての助言として、教育委員会を通すのではなく、自分の学校で取組むことに手を挙げてくれる校長先生をパートナーとして取組むとよいのではないかと。そのような校長先生のもとには、カフェに理解をしめしてくれる先生が集まるポテンシャルがあると思われるので。

モデル事業 商店街チーム 資料① 【企画案】

令和2年7月30日時点



しもきたチャンネル

わかもの秘密基地

登場人物

- メインターゲット
10代後半～20代世代の若者
- 協力者
社会人 区民
- 仕掛け人
商店街、若者支援課、青少協委員
- クライアント (若者がプロジェクト実施する時)
下北沢に住んでる・下北沢に来る多様な人

若者主体の活動

1. 若者を中心としたチームビルディング
2. 若者目線でのマーケティング
(街や人、地域、ニーズを知る)
3. 小さなプロジェクト立ち上げ
(自分たちのやりたいこと×誰かのために)
4. 若者視点のPR作戦

仕掛け人の役割

1. チームビルディングキーパーソン探し
(商店街で働いてる若者に声をかけてみる?)
2. 協力者への呼びかけ
(多様な大人、商店主への声掛け等)
3. 環境設定
(しもきたチャンネルに必要な機材等の準備)
4. PR協力
5. 初期資金、運営資金

ポイント

- 「何をやるか」ではなく「誰に届けるか」
- 下北沢ならでは。。。
(地域への関心を高める)
- 目の前の困っている人を助けたい思い
- 仲間の見つけ方、巻き込み方
- ニーズや目的を探る
具体的に何についてどのように

案内所活用方法 ①

ふらっと立ち寄り秘密基地

- 電源ステーション
- Wi-Fi完備
- フードパントリーの受け取り場所
- ハイブリットでオンラインとリアルで若者会議



案内所活用方法 ②

サテライトスタジオ

- インスタライブでライブ配信 (YouTuber呼ぶ?)
- しもきたチャンネル
- 若者が動画作成やFM放送



★最初の一步

- キーパーソンと協力者、仕掛け人との企画立案（若者への呼びかけ方法や案内所の見学など）
- ↓
- 『しもきたチャンネル』アイデア募集
広く若者に呼びかけ
- ↓
- ハイブリッド作戦会議
(オンライン・オフライン)

検討事項

- 居場所の定義
コロナ禍で3密を避ける中でどう居場所をつくるか？
居場所は最終的には「人」との関わり
- コミュニケーションの再考
オンラインベースでのコミュニケーション実験
- 案内所からの活動の広がり
- 今の状況下「何か人の役に立ちたい」と考える若者とどのようにつながっていけるのか？（どのように出会える?）

しもきた商店街振興組合様に相談したいこと

- 下北商店街連合組合と協働できますか？
- しもきた商店街振興組合のHPに広報を載せることができますか？
- キーパーソン探しのお手伝い、紹介、提案をしていただけるか？
- 案内所の見学会を開催できますか？
- 案内所ならびに外のスペースの使い方について
- 上記の件を相談できる日程調整の検討
(8月3日～4日、時間帯等)

スケジュール

第1ステップ

- 【12月の委員会に向けて】
(8月初旬 商店街との打ち合わせ)
- 8月5日 小委員会
- 8月中旬～ キーパーソン探し 設備準備
- 9月 企画立案 作戦会議
- 10月 アイデア募集 ハイブリッド会議
- 11月～ 運用開始

スケジュール

第2ステップ

【継続に向けて】

- 2021年～ 計画の見直し、課題の洗い出しなど

＜若者への働きかけ・一緒にやること等＞

- 1・無料のウェブサイトを立てる→すでにInstagram「しもきた倶楽部」あり
- 2・「居場所」にきてもらう（お客さんとして運営側として・まず案内所に誰か大人が居続ける状態をつくっていくことから）
- 3・「下北沢まちの案内所」に若者に関わってもらう・若者による案内所の運営・外国人や下北沢に初めてきた人にインフォメーション→若者 ver. も良い。
- 4・電源カフェ・電源ステーション
- 5・照明（フェアリーライトやクリスマスツリー）
- 6・アンケート調査・まちの人に意見を聞く取組み・環境の必要性を実験調査し報告にまとめていく。そのためのアンケートを、居場所ですべていく（タブレットまたは紙ベースで聴き取り）・アンケートを実施して回答してくれた人に駄菓子を渡す
- 7・下北沢のブランディングを考える
- 8・下北沢まちの案内所でゴミ回収
- 9・若者と一緒に何かを作る
- 10・下北で困っている人を助ける→劇団員の意見受付・商店街の困りごと相談受付
- 11・フードパントリーの受け取り場所
- 12・サテライトスタジオ→インスタライブで配信（Youtuber 呼ぶ）、動画作成やFM放送
- 13・夜はトークショーなど。
- 14・謎解きイベント
- 15・eスポーツ大会
- 16・商店街のマップづくり・古着屋マップをつくる
- 17・商店街の悩み事が集まるような仕組み
- 18・下北沢の面白い人、モノを紹介するような枠組みをつくってあげる
- 19・オンラインとリアル融合で何かできないか。オンラインとリアルで若者会議とか
- 20・ライブ配信ができるとよい。ZoomからYouTubeに配信できる。→商店街PRチームが商店街の紹介を行う
- 21・Youtuber だけではなく、下北沢の特徴を活かしてバンドとコラボするなど。
- 22・音楽などのワークショップをやるのもよいと思う。実績をつくることからではないか。
- 23・若者版キッザニアで職場体験（社会体験）・若者のキッザニアのようなことができないか。
- 24・リモートでも関われることで、普段来られない若者も参加できる取組みが良い。
- 25・プレーリヤカーが商店街へ出張、カフェでおしゃべりできる場、青空カフェ
- 26・若者と一緒に何かを食べる
- 27・QRコードのリンク先から意見を入力（意見入力した人は、カフェの飲み物1杯無料→入力された意見はカフェに掲示→掲示された意見の中から若者がアイデアを選定。若者自身も行動し実現していく。
- 28・「若者にやさしい店」認証ステッカー、認証の基準は若者が検討。ステッカーは若者がデザイン。認証された店舗をマップ等で若者がPR。（海外のクリーンな店？認証等をヒントに考えられたもの）
- 29・若者の悩みが集まる場所として場をつくる。店頭立つのは若者、商店街の中で悩みを

- 解決してくれる人をマッチングする場。
30・カフェで積極的に若者が運営する。

<商店街との調整が必要となるもの>

- 1・キーパーソンの発掘。キーパーソン候補は、例えばフェスの仕掛け人（ex. カレーフェス・音楽フェス）や本多劇場の若者（ex. フードパントリーの配達をしてくれている人）、商店街で働いている若者など。→キーパーソンの発掘はすでに取り組んでいる
- 2・民生委員・地域の人を巻き込んでいきたい。
- 3・夜間のゴミの扱いについて、若者が知恵や力を貸す（商店街の活動に協力）
- 4・商店街のメリットは儲かること。コンサルティングで若者層とジョイントする
- 5・古着屋にポスターを貼ってもらう
- 6・下北沢ラジオゼロとのコラボ
- 7・しもきた商店街連合会のHPに広報を掲載することはできるか。（ex. 広告バナー）
- 8・すでにある大きなイベントとコラボする
- 9・下北沢で既に情報発信している人がいればその人の力も借りる
- 10・お店のワンポイントアドバイスを商店街に反映する
- 11・店舗側の求めるものとして「求人」がある。
- 12・野外での販売。テイクアウトのお弁当販売。売上げが減っているお店を助ける。

<広報>

- 1・QRコードの入ったカードを配布・ステッカーを作成して、携帯電話でQRコードを読み込めるようにするのもよい。デザインは若者がやる。→すでに「しもきた倶楽部メンバー募集カード」を作成済み
- 2・#ハッシュタグで意見投稿→若者の意見が流れるしくみ。まちのライブ感を味わう。
- 3・こんな経緯でこんなことをやっているよということが若者に伝わるように→インスタグラムのプロフィールを活用するか？
- 4・ねつせた！メンバーに取材してもらう
- 5・しもきたチャンネルに投稿するとコーヒー1杯サービスや会計から %OFF、シヨップ袋がもらえるなど。→駄菓子プレゼントとかなら可能性あり
- 6・立て看板を設置できないか。「下北コンシェルジュ募集中（活動中）」とか
- 7・若者を募集するため何をやるのかの要件を決めて、アクティボで募集するのはどうか？
- 8・「案内所」だけだと地元の人には知っていることなので来ない。それよりもHPを作るなどしてインターネットで周知したり、意見を募るほうが効果的だと思う。
- 9・#ハッシュタグのほか、コミュニティサイトなどオンラインでの意見表明のしくみ・交流の場があると良い。
- 10・ネットで知り合って、リアルであうということもできればよいと思う
- 11・SNSを使って、リアルでは出てこられない若者を拾い、巻き込んでいきたい。人前には出ないけれど意見は言いたいひきこもりの若者もいる。SNS含め、違うアプローチの仕方でも参加してもらえるのではないかな。SNSでの情報発信も
- 12・スマホで参加申し込み受付の仕組み

13・ツールとしてLINE@も活用するか？

<設備や環境整備等の場に関すること>

- 1・準備可能なもの
→ポット、灯油ストーブ、テント、椅子、電源関係、延長コード、ブランケット、カイロ、水、お湯、お茶、人工芝（地域の方から借用）、その他寒さ対策として暖をとるものが必要
- 2・まず案内所きれいにするとよい。
- 3・待ち合わせスポットみたいになれば良い。シンボルとなるようなもの（ハチ公みたいなもの）があると良い。（大人が整備？若者と？）
- 4・居場所に用意していきたい環境設定：Wi-Fi、充電、まちの情報、ウォーターサーバー、冷暖房→初期段階から準備できるものばかりではないため、段階的に、用意できる環境から始める
- 5・案内所の花壇の手入れ
- 6・案内所の内装も若者の意見を聞いてつくる。
- 7・待ち合わせ場所で終わりではなく、若者の相談にのるまでを考えるともう少し何か。例えばチラシを持ってきたら宣伝してあげるとか。イベントをやった実績報告とか。
- 8・商店街のギャラリーみたいにとできると良いのではないかな。
- 9・昔ながらの掲示板、黒板とチョークがあると良い。
- 10・例えば昭和テイストの待合室にするとか。
- 11・「せたがや若者ホットスポット」（Wi-Fi環境）→そんな場所があれば若者は集まるといふ仮説で実証実験ができたらい。将来的にはそのような場が、世田谷区内のあちこちにできて、WEB上で可視化されることで活動がつながり発展するようなことも考えられる。
- 12・準備が難しいもの
→粉末スープ、みそ汁豚汁、ホットワインなどの飲食物は商店街への配慮が必要
→たき火、こたつ、七輪、火鉢、足湯など、火を使うことは道路予定地であることや商店街から理解を得ることの難しさ等から、使用することは厳しい。

<その他>

- 1・職業体験の品揃え。下北インターンとしての窓口になる。（区の産業部門とも連携して）
- 2・仕事のギャラリー、職業人カードコレクト
- 3・活動費の支給
- 4・～P a y
- 5・下北コインを使えると面白いのではないかな
- 6・案内所の謝金やマーケット販売などを実施して運営費に充てる方法もあると思う。
- 7・大学の単位がもらえる
- 8・高齢者のデイケアの場を開放してもらおうとどうか

令和3年1月6日 商店街チーム 下北沢まちの案内所アンケート 集計結果

2021年1月6日 下北沢まちの案内所アンケート 集計	
Q 1. あなたの年齢を教えてください	
中学生以下	5名
高校生世代	25名
20代	11名
30代	3名
40代以上	6名
Q 2. 性別を教えてください	
男性	12名
女性	38名
回答しない	0名
Q 3. あなたのお住まいを教えてください	
世田谷区在住	13名
都内在住（世田谷以外）	19名
都外在住	17名
未回答	1名
Q 4. 下北沢にはどのくらいの頻度で来ますか？	
週に4回以上	10名
週に2～3回	1名
週に1回	0名
月に1～2回	6名
月に1回以下（ほとんど来ない）	33名
Q 5. 下北沢にはどんな用事で来ることが多いですか？（複数回答可）	
買い物	36名
食事	18名
音楽関係	2名
演劇関係	1名
仕事	1名
その他	
・塾3名	
・住んでいる3名	
・学校近くの学校・今日はラグビー部の部活のかえり（マネージャー）	
・部活の帰り	
・友人の家	

Q 6. 下北沢の好きなところ・気に入っているところを教えてください
・おしゃれ・おしゃれなお店が多い：6件
・古着等衣服関連の回答：18件
・カレーやカフェ等飲食店に関する回答：10件
その他
・かわいいお店がたくさんある・そんなに混んでないけど沢山お店がある
・交通の便が良い・アクセスが良い
・何でも受け入れるところ
・カオスなところ
・初めてなのでわかりません！！
・住みやすい・住み慣れた所なので安心・元気
・ふんいき。ゆるさ。
・何でもそろっているところ
・若者が多いところ
・他に比べてキレイ！うるさくない
・年齢層が多様なところ。古いもの、新しいものが溶け込んでいるところ。なんとなく自由でいられる。全国のあちこちに住んできましたが一番気に入っています。

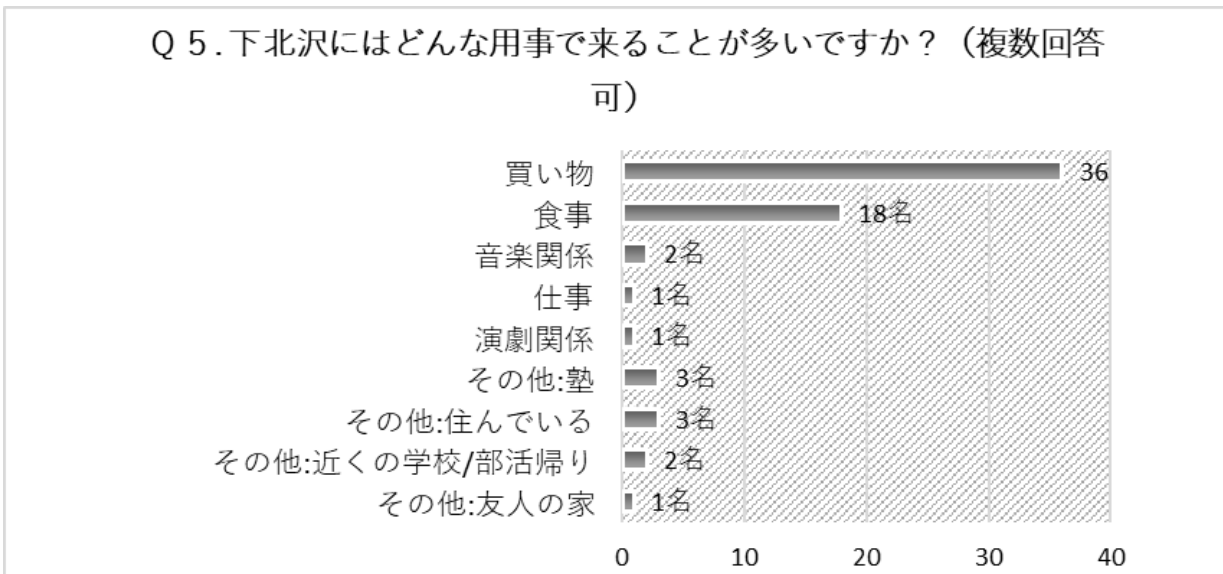
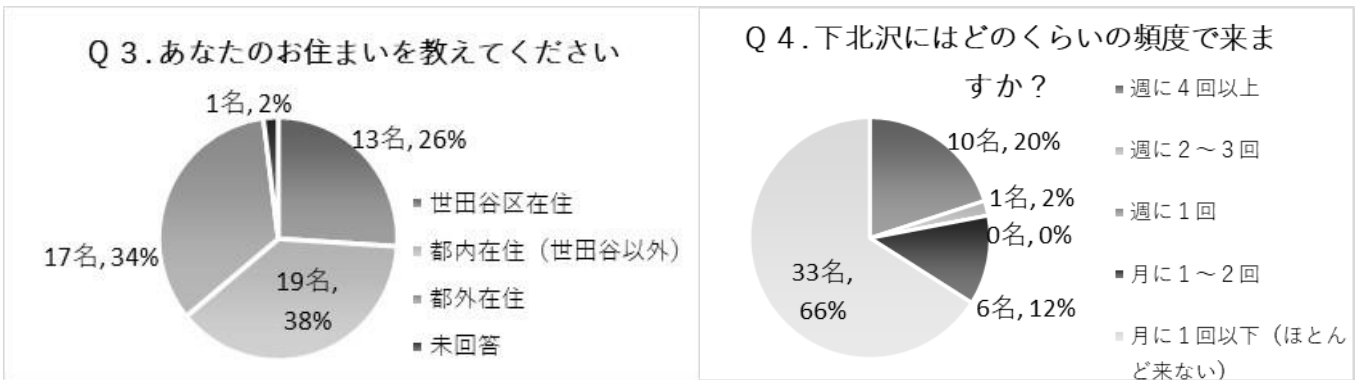
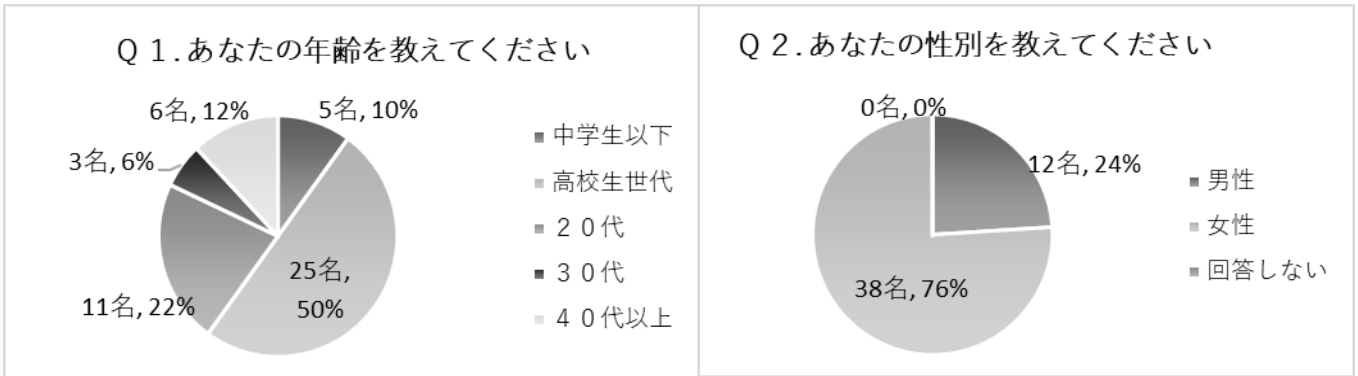
Q 7. 駅前の「ふらっと立ち寄る」場所にあったら良いと思う機能は何ですか？
(複数回答可)

案内所	6名
冷暖房	8名
無料充電コーナー	26名
無料Wi-Fiコーナー	29名
ベンチ	19名
給水コーナー	9名
その他	
・トイレ3名	
・全身鏡2名	
・イス	
・たばこコーナー	
・犬が集まるスペース	
・物々交換をする場所	

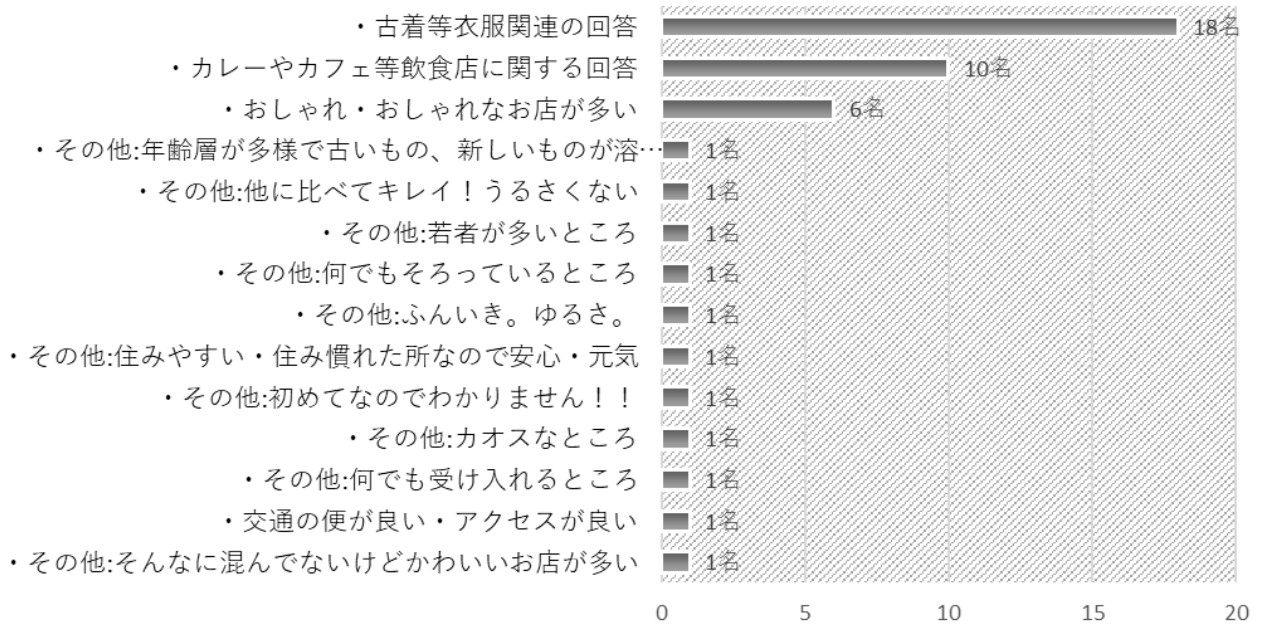
Q 8. 「下北沢まちの案内所にこんな機能があったら面白い！」と思うものがあれば教えてください

- ・休憩スペースがあったらいいなと思いました
- ・距離をとってのベンチを設置。暖かい、冷たいところの休憩スペース
- ・休憩所・座れる所
- ・座る所
- ・コタツのある休憩所
- ・フリースペース
- ・若者のホットスポット
- ・下北沢で行われる全てのエンターテイメントイベントがわかる。パフォーマンスの発表ができる。
- ・目印となる待ち合わせ場所が欲しい。渋谷のハチ公みたいな。
- ・ハチ公前みたいになったらいい…。
- ・銅像（ハチ公）・クーポン配布・両替所
- ・待ち合わせ場所
- ・面白い待ち合わせ場所
- ・若い人に人気の洋服屋の紹介
- ・推しバンドの紹介
- ・給水コーナー
- ・飲み物・トイレがほしい
- ・下北沢取材するライターズクラブ
- ・いろんな活動が知れる（下北にはこんな人がいるんだ～とか）
- ・おすすめのスポットを地図に記載する
- ・古着が安いお店を教えてくれる機能？
- ・案内所
- ・ペッパーくんが案内する。
- ・ごはん屋さんの情報、クーポンまとめなど
- ・お店の混雑状況が分かる機能
- ・イルミネーション
- ・イルミネーション
- ・冬はイルミネーションとかで待っていても楽しめる。
- ・植物があるところ（犬が入れる）・運動場
- ・スポーツが楽しめる・ドッグラン
- ・年齢・職業関係なく気軽に交流できるような機能。30代の会社員ですが、そういう場所があったらいいなと思っています。
- ・おしゃれなカフェスペース。水族館のような水槽。ミニシアター

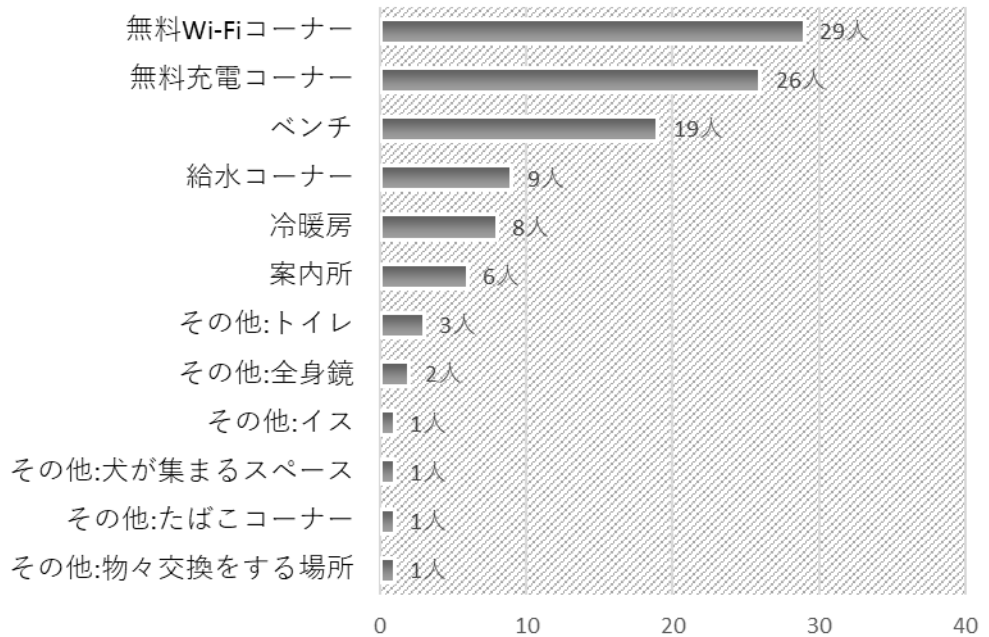
令和3年1月6日 商店街チーム 下北沢まちの案内所アンケート集計結果【グラフ】



Q 6. 下北沢の好きなところ・気に入っているところ



Q 7. 駅前の「ふらっと立ち寄り」場所にあったら良いと思う機能は何ですか？
(複数回答可)



モデル事業 商店街チーム しもきた倶楽部 若者の感想

(※「しもきた倶楽部」…P. 27～28 参照)

アンケート（しもきた倶楽部に参加してみてどうだったか）の回答を送らせて頂きます。皆でイベントに向けて話合っていたのが良かったです。こうした温かい輪がもっと広がればいいなと思いました。ただ参加日数が少なくあまり繋がれなかったのが残念です。またイベントがあれば参加したいと思いました。

せたがやの子ども・若者支援に携わる方々は優しい人が多くて、安心して取組みに参加できました。意見を取り入れてくれるところと、自分達ではできないところにサポートをしてくれる体制がしっかりとあり、ありがたかったです。これから何をしたらいいのか模索中の若者が、社会で活動するための足掛かりになるような活動が今後も行われると嬉しいです。

下北沢のイベントについては、今年は様々なイベントが中止になるなかに行えたことの一つですので、思い出深いです。

途中アクシデントなども有りましたが無事販売に至ることができたので、それも一つの思い出として楽しんで参加できていたように思います。

それについては、なによりも企画立案から当日の最中にまで猪股さまをはじめ、会の皆さまの温かなサポートがあったお陰かと思っています。お店の形作りから材料や備品類の調達、当日の最中にも度々お声がけいただけだったので、安心して参加できました。

それだけにサポステなどを通じた若者、参加者に入ってもらえなかったことは少し残念に感じたかもしれません。せっかくの機会でしたので。ただ世情もあるので致し方のないことかもしれませんね。

個人的に、サポートはあるだけでも（実際の利用は問わず）それだけで救われるように感じる人も居ると考えておりますので、今回のイベントのように街角から若者含めて支援する活動と報告が次の運動に繋がっていければ良いなと思います。

今年お世話になりましたこと、改めてお礼申し上げます。今振り返ってみても参加できて良かったと思いました。

ご検討ご報告頑張ってください。
よろしく願いいたします。

【良かった点】

- 基本的には、縁日の雰囲気や運営はとても良かった。ねつせた！メンバーも、お客様に良い対応をしているようで安心した。
- 駄菓子子どもや若者に親しみが持てるし、安いから買いやすい。小さくて持って帰りやすい。選んだ駄菓子も並べ方も良かった。
- 「せたがしや」というネーミングも良い。
- 久しぶりにねつせた！関連のメンバーや若者支援担当課の方々とコミュニケーションが取れて良かった。
- 周囲では親子連れなど、いろんな年齢層の方々が楽しそうにしている、明るい気持ちになった。
- 周りのお店の中での溶け込み具合が良かった。
- レモネードが美味しかった。ホットとアイスが選べるのが良かった。
- 駄菓子が2か所に分けて売られていて、2通りの楽しみ方ができる。
- 下北線路街は屋外で広々としていてコロナ禍では感染対策に良かった。

【もう少しこうしたら良し👉】

- コロナ禍の割には消毒液があまりなかった。もう少し目立つところに置いておいたらどうか。（お客様に感染対策意識を促すためにも）
- お金を入れる箱？的なものをもう1つ準備した方がいいのでは。もし持っていなかったら持っているメンバーから借りるも良し。
- しもきた倶楽部自体が、発信が乏しく、いまいち何をしているのかわからない。メンバーも活動内容（居場所やしもきたライターなど）もかぶっているし、ねつせた！の1プロジェクトのように見えなくもない。イベントの時にしか活動できないのであれば、いっそのこと、ねつせた！の1プロジェクトにした方が動きやすいのでは？

コロナ禍でも下北沢で人の温かみに触れることができ、貴重な体験となりました。大学生が地域や人と繋がる大切さを学べたと思います。また駄菓子ということで、老若男女問わず対象にできたところもよかったですと感じます。

しかし企画は「しもきた倶楽部」という名前を考えただけで正直力になれたのか…という思いがあります。来年からはもっとコミットしていきたいです！会議の回数やオンライン化をしたら大学生も参加しやすいのかなと思いました～

ありがとうございました😊

感想

コロナの影響や時間帯（大学の授業と重なってしまったりと）なかなか会議に参加できなかったため、モチベーションを保つことができなかったと思います。また、未だにどんな人がしもきた倶楽部のメンバーで、誰を中心として動いているかなどがわからないため、活動に参加するのに少しハードルがありました。もう少しねつせた！のように若者を中心とした運営組織みたいなのをつくることで、活動が活発になるのではないかと思います。そのためには、もっとメンバーを増やす必要があるので、私自身もっと活動に積極的に参加して、しもきた倶楽部の魅力を伝えられるようになりたいと思いました。

モデル事業 イベントチーム 意見交換会 記録 (要旨)

1. 希望丘青少年交流センター（アップス）インターンとの意見交換会

- 日時 令和2年11月1日（日）16：00－17：00
- 会場 アップス青少年専用会議室および ZOOM によるオンラインで実施
- 参加 ◇アップス・インターン4名（区内在住3名・区内在学1名）
◇子ども・青少年協議会委員1名
・下村 一（公益財団法人児童育成協会 希望丘青少年交流センター長）
◇事務局（世田谷区子ども・若者若者支援担当課）2名
・鈴木 岳彦 ・井上 忠紀

■取材内容

① 自己紹介（名前・年齢）

- （省略）

② 世田谷区が好きですか？

- 全員が yes

③ その理由は？

- 利便性が高く、福祉が充実している。また、世田谷は面積が広く、多様性がある。
- 青少年交流センターのような施設があるから。公園が充実している。
- 用賀で地域活動をしている友人がいるが、その若者を応援してくれている大人がいるから。
- 文京区に住んでいて、大学に入るまでは知らなかったが、通っていていいなと思った。
- 図書館や地区会館読書室などが充実している。借りたい本も身近な図書館から予約できる。

④ コロナ禍において困ったことは？

- 困っていることはたくさんあるが、困っているという状況を楽しみたい。
- 行きたいところ、やってみたいことができない。
- 人と直接会って話すことができなくなって、寂しい。
- オンラインだと、動作で人の気持ちを読むとすることができないので、コミュニケーションが難しい。
- 就職活動の準備で、実家に帰りたいが、実家からは、感染の多い都内からは帰って来ると言われてしまう。

⑤ 若者の声は社会に届いていると思う？

- あまり届いていないというか、発信していないと思う。
- 社会の問題というと、そもそも声を届けようとする人が少ないし、自分が声を上げたとしてもどうせ変わらないし、無駄に思える。

⑥ 選挙には行く？

- 全員が yes
- でも誰に投票していいかが分からないので、顔見知りの人に投票したりする

⑦ もし、区長になったらどんな施策に取組みたいか？

- 大学の学費を無償化する
- 居場所や、居場所となりうる公園を増やす
- 居場所を増やすが、それぞれの居場所に多世代交流ができる、国際交流ができる、中高生専用などと特性を設け、関心あるテーマで集まれるようにする。
- 子育てをしている保護者のための居場所を創る。

⑧ 年金のように、世代間に格差が生じるかもしれない制度に関心はあるか？

- あまり関心がない
- 年齢に達したら突然、請求の用紙が来て、高校の時に習っているが…、あまり身近なことと思えない
- 昔から、このままだと年金がもらえなくなると言っているが、今でももらえているのだから大丈夫だと思ってしまう。
- そもそも身近な問題でないと、自分に迫って考えられないし、年金といった制度は仕組みとしては知っていても、自分に関係ないようにかんがえてしまう。

⑨ 環境問題などには関心がある？

- ヨーロッパで声をあげている若者のことは知っているが、すごいと思うが、自分で何かできると思わない。
- レジ袋をもらわないようにしようと家族で決めたりすることはしているが、それ以上のことはしていない。
- 地球温暖化と二酸化炭素排出量については、あまり関連がないのではないかと考えている。

⑩ 身近な問題に対して、改善を求めるためにどうする？

- 声をあげられる仕組み、意見を聴いてくれる仕組みが大切だと思う。
- 聴いてくれる大人を選んで、話したり意見を言ったりしてみる。
- 桜丘中学校

⑪ 他人からの同調圧力を感じることはある？

- とても感じる。高校の時に意見などがあっても、それを言うと、友だちから反抗的な人と見られてしまう。

⑫ 若者の声を社会に届けるためには？

- まずは若者同士で意見交換ができるといい。
- 若者の意見を聴いてくれるような組織があるといい。
- 他人事ではなく、自分事だと思えることが大切。
- 若者の声の聴き方として、リーダー的な人に引っ張られないようにアンケートのような方法も必要だと思う。

2. 昭和女子大学鈴木ゼミ4年生との意見交換会

■日時 令和2年11月10日(火) 9:00-10:30

■会場 ※ZOOMによるオンラインで実施

■参加 ◇昭和女子大学学生(4年生)4名

◇子ども・青少年協議会委員5名

- ・石川 ナオミ (世田谷区議会議員 自由民主党世田谷区議団)
- ・福田 たえ美 (世田谷区議会議員 公明党世田谷区議団)
- ・林 大介 (浦和大学社会学部准教授)
- ・新井 佑 (区民委員)
- ・下村 一 (公益財団法人児童育成協会 希望丘青少年交流センター長)

◇事務局(世田谷区子ども・若者若者支援担当課)4名

- ・猪股 和美
- ・鈴木 岳彦
- ・井上 忠紀
- ・志田 麻衣

■取材内容

① 参加者自己紹介(氏名及び学年、経歴等)

➤ (省略)

② 今回は世田谷区のお時間をお時間をいただいているが、まず、今住んでいる場所と世田谷区の印象やイメージ、感じていることなどを教えてください。

(住んでいる場所) ※回答記録省略

(世田谷区のイメージ)

- 都会、子育てしている方が多い住宅地という印象。
- お金持ちが住んでいる、街がきれい、子育て・子ども支援が充実している印象。
- おしゃれ、敷居が高い。
- 実際に住んでみると子どもが遊んでいたり、ボランティアのおじさんが声をかけていたり、地元と変わらない。

③ このまちの住民だという実感はどのくらいあるか?このまちに住んでいるなあと感じる点、感じない点があれば教えてください。

- S市民という実感はあまりない。S市の職員として働きたいと試験を受けており誇りはある。S市を希望する理由は、通いやすさ。駅周辺をきれいにしていたり、力を入れていることもあり、未来あるまちだと思っている。
- 大学に向かうときに渋谷や表参道を通るが、高い建物が多く密集して道幅も狭く圧迫感を感じる。地元は風景が違って戻ってきたなと落ち着く。都会に住みたいとは思わない。
- 昨日図書館を利用して、F市民だと感じた。地元のお祭りで友達と会ったりすると実感する。
- 父親の転勤が多くいろいろなところに住んだが、F市が一番長く、友達や近所の方も知っていて地元感がある。世田谷は近所に知り合いもおらず、隣の人も2回くらいあっただけ。近所との交流がなく、世田谷区に住んでいる感覚はあまりない。郵便でマップやゴミ出しのカレンダーが届く時などに実感するくらい。

④ コロナの影響を受け一番困っていることは何か?また、身近な困りごとは誰に伝えているか。

(困っていること)

- 友達になかなか会えないこと。買い物や外食もできないし、家族以外とのつながりが感じられないのがさみしいし嫌。
- 友達とのつながりが薄くなって頻繁に会えない、相談や悩みも聞きづらい。
- 大学が閉鎖されていた時は図書館も閉まり、卒論や学習面で困った。友人と連絡を取り合う回数も減った。
- 大学は人数も多いし、遠方から来る人もいて(登校できなくても)仕方がないと言い聞かせている。
- 大学は履修もばらばらで分散登校も難しい。4年生は登校が必要な講義も少ないが、1~2年生はかわいそう。
- アルバイトで友達に会えるのが楽しみだったのに、友達に会えなくなったことに加えて、お金を稼げない。
- 大学に行けないこと。上京して家賃を親に払ってもらっているため、大学に行けないのに払い続けることを、親が「もったいない」と言っている。一人暮らしなのでさみしさも感じた。韓国が好きで韓国語の試験を受ける予定だったが、中止になった。外国にも行けず、就職前にやりたいことができなくなってしまった。

(相談相手)

- 家族
- 友達(大学、バイト、LINE)

⑤ 大学に行けないうちに困ったことなどについて、意見表明することは考えたことがあるか?

- 意見を言おうと考えたことはなかった。
- 意見をどこに訴えればよいかわからない。ひとりで言っても変わらなそうとの思いがある。
- 4年生で授業が少ないので、ZOOMのほうが楽かもという思いもあった。母は、休みでも授業料が高いことに不満があるようだ。
- 友達には「大学を使用しないのに施設費を払うのはなぜ？」など、大学に意見を言いたいと話していた人がいたが、実際にどうしたかはわからない。

(補足)「言っても変わらない」という思いがあるのは、そういう経験が実際にあるのか?

- 大学も、施設費などをとらないとしょうがないのだろうと感じていた。意見を言っても、少数だと通らないだろうと思う。自分自身は、両親ほどには減額してほしいと思っていないのだと思う。

⑥ コロナの前と後で何がどう変わったか?リアルとオンライン、それぞれのメリット、デメリットがあるが、どちらのほうがハッピーか、どのくらい差があるのか、それはなぜか?

- コロナ前のほうがよかった。大学に行けず、友達にも会えなくなった。マスクして出かけなければいけない、密を気にしなくちゃいけない、好きなアーティストのライブにも行けない。コロナ前と後では10とゼロくらいの差があり、今は最悪。
- 大学の友達と集まれないのはさみしいので、コロナ前のほうがよかった。ただ、私自身は、家にいるのが好きなので、今の生活にも慣れてきてそれほど嫌じゃない。時間に余裕ができたため、手作りなど家で出来ることを見つけれられたのはよかった。家族との時間が増えたこともよかった。
- 前後で比べてどちらも同じくらいと感じ始めている。大学まで1時間ほどかかるため、10分前に起きれば間に合うオンラインの良さはある。また、「GO TO」で普段行かない家族旅行もできた。マスクの息苦しさや、友達との時間、バイトができないことなどは嫌なこと。
- コロナ禍の生活に慣れてきているが、前のほうが良かった。友達にも会えないし、実習の前に友達と会って案を共有し合ったりしたかった。卒論や韓国語の勉強なども、外に出てやりたいタイプだが、大学やカフェも行けず家でやるしかなかった。前のほうが気軽に外出できた。

⑦ 保育・幼児教育を大学で学ぶ中で、どんなことに関心が高いか？また、社会に出て女性が働き続けるときに、こういうところを改善してほしいという思いがあるか？

(大学での関心があること)

- 子育て支援や母子保健。母子健康手帳を卒論テーマにしている。
- 絵本や玩具。廃材や身の回りのものでおもちゃを作ったり、絵本を探すのが好き。
- 環境構成。さりげないけれど工夫された環境構成によって、子どもの動きや興味が変わってくる。
- 環境構成や保育士の準備の重要性について。卒論で色について調べており、例えば、「男の子はブルー、女の子はピンク」などの準備の仕方をやめ、いろいろな色を用意することで個性を引き出せる。

(社会に出る際に改善してほしいこと)

- 女性は産休育休があるが、女性だけが休んで育児をするのはどうなのか。男性ももっと休みやすくなって、今より女性の負担が減ると良い。
- 政治の分野での女性のリーダーシップや、女性が管理職につける職場環境ができ、男性と平等になると良い。
- 幼いころから、男の子は強くて女の子は弱いという意識や、応援団長は男子が務めるなど、気づいていない小さなことから変わっていけば良い。
- 以前よりは育児の制度などが整ってきているが、調べなければわからないことも多い。情報がいきわたればもっと理解が深まるのではと感じている。

⑧ 4年間で教養だけではない得られたこと、印象に残っていること、社会に出て生かしたいことなどはどんなことか？

- 同じ保育士を目指す友達の存在。社会に出ても意見交換して視野が広がるのでは。大学の友人は中学高校と違い、同じものを目指しているというつながりがあり、とても大事に感じている。
- 社会人としてのマナーや、ボランティア活動や海外（バングラデシュ）に行ったときに会った難民の子どもたちなど、視野が広がる経験があった。また、社会的養護が必要な人たちなど、支援を要する人たちの力になっていきたいと感じている。
- 保育士として働きたい友達を得られ、実習や公務員試験など、つらい時にもお互いが支えになった。また、朝早く起きることや、提出物を出すなど、当たり前だけれど大切なことも学んだ。
- 実家を出てひとりで生活をした経験。保育士になることは地元でもできたが、知らない環境でこそこの経験や、バイトやたくさんの出会いがあり、社会に出てからも生きると思っている。

⑨ 若い人の声を、どうしたら社会に生かせるかを考えたい。どうしたら声が出せやすくなるのか？当事者の声をどうしたら反映させていけるのか？こういう後押しがあればいい、などのアドバイスがあれば教えてください。

- 今日のように、大人の方から寄り添ってもらえると話しやすい。若者はSNSなどは見ているだけが多く、自分から発信するのは私生活のことだけ。知ってほしい気持ちはあるので、固い話だけではなく、寄り添って聴いてもらえると良い。
- 区役所での若者支援など、知らない人が多い。情報を発信すると同時に若者に強めに語りかける、検索しなくても発見できるような情報の提示の仕方があると良いのでは。
- 情報が届いていない。高校生の時に地元の市議会議員さんと話したことがあるが、そのときも「高校生には情報が届いていない」という声が多かった。
- 伝える場所があれば、言いたいことがある人もいると思う。

3. 大学生が運営する女の子の居場所「あいりす」利用者との意見交換会

■日時 令和2年12月3日（木）18:00～19:00

■会場 三茶しゃれなあと「スワン」およびZOOMによるオンラインで実施

■参加 ◇あいりす利用者2名、あいりすスタッフ2名

◇子ども・青少年協議会委員4名

・下村 一（公益財団法人児童育成協会 希望丘青少年交流センター長）

・鈴木 法子（区民委員）

・藤原 由佳（区民委員）

・中谷 汐里（「情熱せたがや、始めました。」メンバー 大学生）

◇事務局（世田谷区子ども・若者部若者支援担当課）3名

・猪股 和美

・鈴木 岳彦

・井上 忠紀

■取材内容

① 自己紹介（名前・年齢）

➤ （省略）

② どれくらいの頻度で、「あいりす」を利用するか？

➤ 月に1回か2回

➤ 月2回

➤ 週に2回

➤ 2～3時間くらいいて、お菓子を食べる

➤ 今、お菓子は食べていない。それぞれプラばん作り、折り紙、塗り絵、絵を描いたり等をしている。プラ板は時々行う。

③ いろんなプログラムをやっていると思うが、やりたいことを提案したことはあるか？

➤ アイデア、候補をいくつか出してもらったら、投票してもらって、多く入ったものに取り組む。「あいりす」の部屋に投票結果があるので、最後にお見せする。

④ まだやっていないことで、今後「あいりす」でやってみたいことがあるか？

➤ ビンゴ

➤ コロナの影響で、料理イベントがあまりできていないので、落ち着いたら、みんなで取り組みたい。

➤ ケーキを食べたい。

⑤ コロナの影響で「あいりす」での活動でできなかったこと、変わったことがあるか？

➤ 今年から手伝っているので、去年との比較はできないが、使ったものの消毒等が大変。部屋自体の人数制限がある。

➤ 今年度前半はオンラインでやっていた。

⑥ 学校や児童館と比較して、みなさんにとって「あいりす」を一言でいうと、どんな場所か？

➤ あったらうれしい。

➤ ストレスのはけ口。

➤ スタッフに会えることがよい。

➤ 最近来たばかりだが、安心できる。

- ゆっくりできる。
- 行く場所が増えすぎてやばい。

⑦ あたらしいところに初めて入っていくことは緊張すると思うが、きっかけはどんなことだったか？

- 世田谷区の人に紹介されて、一緒に参加した。
- 母親が「あいりす」を見つけて、参加した→次から1人で来たのか？はい。

⑧ 大人をどう見ているか？若者に近づきたい大人はどのようにしたらよいかアドバイスをください。

- 大人には気を遣う。
 - 怖い人もいる。
 - 何を話していいかわからない。
 - 食べ物とか共通するテーマが何かあるとよい。
- いっぱい話しかけてくる大人をどう思うか。
- やばい (いい意味で)。

⑨ こんな大人はいやだというのはどんな大人？話したくない大人って？

- 怖い (見た目、おこられそうな雰囲気)。
- 声大きい。話しづらい。
- 大人だから立場が上だとはわかっているが、上から視線はいやだ。
- こういう人はむかつくということはない。
- 警察は怖い (警棒を持っている。通るだけで、逃げてしまう。)

⑩ 自分の両親、先生のような身近な大人にしてもらってうれしかったことがあったら、教えてほしい。

- 相談したときに、共感してもらえたかっただけなのに、いろいろ言われてしまう。
- 女と男で違うし。

⑪ 【若者から大人への質問】大人になったら、お給料はいくらもらえるか？

- 初任給15万 (手取り)。
 - 初任給23万、年収290万。
 - 初任給15万 (手取り)。
- 質問への感想：すごい、やばい (沢山もらえるという意味で)。

⑫ 有名人、マンガのキャラでこんな大人がいい、いやだというのがあるか？

- 竹之内豊 (すべてにおいてかっこいい)。

⑬ コロナだが、行きたいところは？

- アメリカに行きたい。以前ロサンゼルスに行ったことがある。アメリカにまた行きたい。
- ロサンゼルスには、ローラとか綾部がいるね。→笑う。
- 旅行が好きなので、旅行に行きたい。

⑭ 【若者から大人への質問】各委員の「あいりす」との関わりは？若者支援は何をするのか？

- アップスという若者施設に勤めている。のんびりできる居場所をつくりたい。大学生になると、社会に出ないといけないという漠然とした不安が出てくると思うが、なりたいものになれる、仕事につけるようなお手伝いができるように施設で取組んでいる。
- 若者支援の仕事は最初からやりたいと思っていたのか？
- 中学校の教員になろうと思っていたが、学校で子ども・若者に関わらなくてもよいと思い始めた。

⑮ 世田谷区にこうしてほしい、こういうものがあつたらいいというものがあるか？

- アップスが近いといいな。アップスみたいな施設が多いといい。

⑯ (終了後の感想や様子)

◇学生スタッフ

- 突然の意見交換会のお知らせではあったが、利用者の内1名が参加したくないとはっきり断れたのは良かった。2人きりでのあいりす施設内であったが、好きなことを楽しく行っていたので安心した。
- あんまり、自分自身が上手く話せなかったのが後悔。ほぼ利用者にまかせきりになってしまった。
- 固めな感じでとても緊張した。質問に対してちゃんと話せていたのかが不安。

◇利用者の様子

- スタッフの横で疲れた様子で寝る。少し遊び足りなくて、帰宅前に少しぐずる様子が見られた。終了後は少し元気になりプラバンを再開。プラバンが上手く出来たので喜んでいて。母親に意見交換会の発言や様子を伝えたところ、大変喜んでいて。

～事業・用語解説～

ア行

○あいりす

小学5年生～24歳までの女性が利用できる若者の身近な居場所。事業運営は、区と連携協定を結ぶ昭和女子大学の学生が行っている。

○アウトリーチ

支援ニーズがあるが、保健・医療・福祉施設等の拠点におけるサービスでは利用するのが困難な人に対して、状況に応じて専門スタッフが訪問して施設内と同等の必要なサービスを提供していく仕組み。

○アセスメント

個人の状態像を理解し、必要な支援を考えたり、将来の行動を予測したり、支援の成果を調べたりすること。

○生きづらさを抱えた若者

学校生活や就労時の体験、対人関係でのつまずきなどを起因として、社会生活や他者との関わりがうまくいかず、目指す生き方に向かって進めない、目指す方向がわからないために悩んでいる若者。

○SNS

ソーシャル・ネットワーキング・サービスの略。インターネットを介して人間関係を構築できるスマートフォン・パソコン用のウェブサービスの総称。

○オルパ

中高生世代の子ども・若者たちが行う自主的な活動や地域との交流などの経験の積み重ねを通じ、成長していくための支援手法の検証を図る「中高生世代活動支援モデル事業」として実施した居場所活動。世田谷区南烏山の空き店舗を活用し、NPO法人「せたがやっこ参画推進パートナーズ」が運営にあたり、大学生を中心としたスタッフによる支援を特徴とした。「オルパ」という愛称は、中高生運営委員会による会議でつけられた。9か月間の期間限定の活動であったが、登録者数は1,051名、延べ来館者数は6,496名となった。

○オンライン/オフライン

オンラインとは、コンピューターなどの機器がネットワークに接続された状態、あるいは通信回線を通じて接続された状態のこと。現代では特にインターネットに接続された状態のことを指すことが多い。対義語が「オフライン」。

カ行

○学校カフェ（校内カフェ）

中学生や高校生が日々通う学校の中に設けられた誰でも来られる居場所カフェ。校内居場所カフェは家庭や学校と異なる「サードプレイス（第三の居場所）」であり、また、地域ボランティアや支援者等、教職員とは異なる第三の大人に出会える場となっている。

○教育相談室

子どもたちの健全な育成を図るため、教育相談員が教育についての心配ごとに対し、保護者の方の相談にお応えしながら、お子さんに対しても必要に応じた心理的な援助を行っている。

○子ども計画

「世田谷区子ども計画」は、子どもが健やかに成長・自立でき、また、安心して子どもを生子み、育て、子育てに夢や希望を感じることができる地域社会の実現に向け、子どもや子育てについての総合的な施策を進めることを目的としている。



○世田谷区子ども条例

子どもが育つことに喜びを感じることができる社会を実現するため区が平成 13 年に制定している条例。条例では、子どもは” ひとりの人間として、いかなる差別もなく、その尊厳と権利が尊重される” とし、また、” 自分の考えで判断し、行動できるよう、子ども自ら学んでいくことが大切である” としている。

○参加・参画

「参加」は世田谷区政の基本的理念。さまざまな意義づけが行われるが、「従来、住民参加といえは、もっぱら首長とその下の行政機関の意思決定への参加を意味しており」（「これからの地方自治の教科書」大森彌、大杉寛）とされる通り、区の政策等の意思決定へ区民の参加・参画を指す。（せたがや自治政策研究所「地域行政の推進に関する研究令和元年度報告書」より）

ここでは、より広義に行政運営に加え地域社会への参加を意図して使用しており、18 歳未満の子どもや若者も、権利主体として、自分が生活する社会に参加し、自分たちが望むまちのあり方に意見表明し、決定に影響を及ぼす存在である。「子ども参加」の一つのモデルとして、ロジャー・ハートによる「参加のはしご」がある。

○サテライト

本拠地と離れたところにある小規模な拠点。

○児童館

区内に 25 館あり、子どもたちとの関わりをとおして健康で心豊かに育てていくための施設。各地域に 1 館ずつ中高生世代が活動しやすくなるよう中高生支援館を設置し、活動支援も行なっている。

○下北沢まちの案内所

世田谷区の下北沢駅東口改札前しもきたスクエア内（改札から約 50m）に設置されてい

る案内所。ボランティアの案内人が来訪者に下北沢の案内を行っている。

○主権者教育

国や社会の問題を自分の問題としてとらえ、自ら考え、自ら判断し、行動していく主権者を育成していくこと。(総務省「常時啓発事業のあり方等研究会」最終報告書、平成 23 年より)

○「情熱せたがや、始めました。」(略して、ねつせた!)

若者世代に必要な情報が届いていない課題より、若者自身が若者世代に馴染みのある SNS を利用し世田谷の魅力を情報発信していく団体。

○STEP

区立中学校生徒の放課後活動支援事業のこと。中学生の放課後の新たな居場所づくりを目的に、平成 11 年度から実施されており、STEP という名前は、「Space (空間)、Try (挑戦)、Enjoy (楽しみ)、Possibility (可能性)」という英語の頭文字からつけられている。

放課後に週 1 回程度、生徒が学級や部活動とは異なるメンバーで活動しており、活動日には、生徒はだれでも自由に参加することができる。また、運営には、地域の方々が運営協力員として携わっている。主な活動内容は、日本舞踊、琴、三味線、手芸、園芸、漢検学習、英検学習、調理実習、バンド、ヒップホップなど。

○せたがや若者サポートステーション

働くことに踏み出したい若者たちとじっくり向き合い、本人やご家族の方々だけでは解決が難しい「働きだす力」を引き出し、「職場定着するまで」支援する施設。

○青少年地区委員会

地域社会において青少年の健全育成を図るとともに、青少年をめぐる非行防止とその為の社会環境の浄化等を目的に各まちづくりセンターに設置された組織。区長から委嘱されたメンバーが中心となり、様々な活動を行っている。

夕行

○ダイアログ、ダイアローグ

対話。お互いの理解を深めるためのコミュニケーションの方法。

近年、精神医療の分野では、対話を重視する「オープンダイアローグ」という手法が注目されている(1980 年代よりフィンランドで開発・実践されてきた対話による治療技法。薬物や入院に極力頼らず、当事者を交え、治療チームと支援機関が対話を通し症状を改善させていく手法)。

○第三の居場所

自宅でも、学校や職場でもない、安心して過ごせる心地の良い居場所。

○たからばこ

中高生世代が利用できる若者の身近な居場所。事業運営は、区と連携協定を結ぶ日本大学文理学部の学生中心で行っている。

○Cheer! ~わかものライフガイド~

中学生から 39 歳までの若者に向けて世田谷区が制作した冊子。あそびたい、くつろぎたい、勉強できる場所がほしい、悩みを相談したいなどのエッセンスや、参加できる施設やイベントなどをまとめた情報誌。中学校で配布するほか青少年交流センターや児童館などで関

覧できる。

○地域コンソーシアム

地域で様々な世代や団体が共同・協力しながら何らかの目的・目標をもった活動を行うこと。本報告書では、地域の大人と若者たちが日常的に交流ができる情報や活動の拠点（たまり場）として使用。

ハ行

○ヒア・バイ・ライト（Hear by Right）

英国若者協会と地方自治体協議会の共同製作で 2001 年に開発された、子ども・若者の社会参加を具体的に進めるうえで、イギリスで活用されている手法である。「7 つのスタンダードの考え方」があり、子ども・若者が 7 つのスタンダードを身に着けることによって参加・参画が実現していくというものである。①共通の価値観、②戦略、③仕組み、④体制、⑤スタッフ、⑥技術と知識、⑦リーダーシップの取り方（「ヒア・バイ・ライト（子どもの意見を聴く）の理論と実践」奥田睦子編著・監修より）

○ひきこもり

（厚生労働省「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」より）様々な要因の結果として社会的参加（義務教育を含む就学、非常勤職を含む就労、家庭外での交遊など）を回避し、原則的には6ヶ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態（他者と交わらない形での外出をしてもよい）を指す現象概念。

○プレーパークせたがや

「自分の責任で自由に遊ぶ」をモットーにした遊び場。屋外での自由な「遊び」を通して得られる様々な体験や交流を通して、子どもたちに主体性や社会性を育む場所となっている。

○プラットホーム

土台。環境。

○ペタゴギック

個々の人間性・個性を見抜いて、それぞれに合った対応をする“究極の個別ケア技術”。このペタゴギックを身につけた人がペタゴ。ペタゴは、主に保育や幼児教育のための施設・学校などで働いている。

○ほっとスクール（適応指導教室）

心理的理由で登校できないでいる児童・生徒のための「心の居場所」として、自主性を養い、社会性を育みながら学校復帰に向けて気持ちを整えていくための支援を行う施設。

マ行

○メルクマールせたがや

不登校・ひきこもりなどの生きづらさや困難を抱えた若者の相談・居場所支援機関。厚生労働省所管で、就労を支援する「せたがや若者サポートステーション」と合わせて、「世田谷若者総合支援センター」として運営されている。

ヤ行

○ユースソーシャルワーカー、ユースワーカー

高校生を対象に卒業後の就労や家庭経済状況などに関する支援を行う仕組み、および、職員の呼び名。

ワ行

○Wi-Fi環境

無線で通信する端末がお互いに接続可能になる方式、環境。ネットワーク対応端末（パソコン・スマホなど）を無線接続できるようになり、インターネット利用が可能となる。

○若者支援シンポジウム

平成25年度の若者支援担当課新設より、区では様々な若者施策を展開し、活動団体や学校、PTAと連携するなど、若者支援を地域とともに広めてきた。若者支援に関わる機関や団体が一堂に会し、現在の事業の広がりやネットワークを確認し、つながりを深めるとともに、若者をとりまく課題を共有し展望を語り合い、第三の大人の重要性を再認識する契機として、若者支援シンポジウムを開催している。令和元年度は、世田谷区子ども・青少年協議会との連携協力のもと、イベントタイトルを「若者支援シンポジウム2019～若者が参加したくなっちゃう地域づくり～」として実施。「子ども・若者の地域参画」をテーマに、パネルディスカッションや参加者によるグループワークを通して、未来の展望を語り合う場となった。

【発行】

令和3年3月

世田谷区子ども・若者部若者支援担当課

〒154-8504 世田谷区世田谷 4-21-27

電話：03（5432）2585 FAX：03（5432）3050
